

富山城跡発掘調査報告書

－総曲輪レガートスクエア整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)－

2017

富山市教育委員会

と やま じょう あと
富山城跡発掘調査報告書

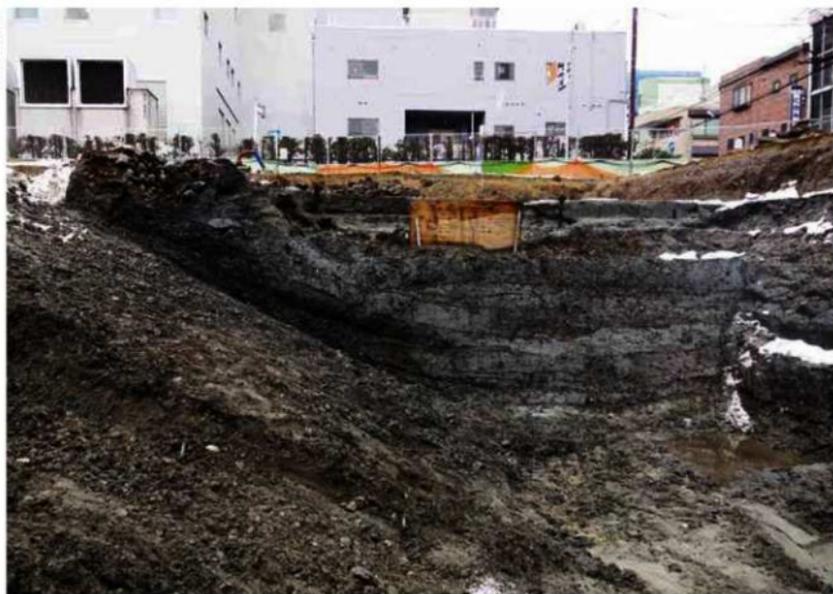
－総曲輪レガートスクエア整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)－

2017

富山市教育委員会



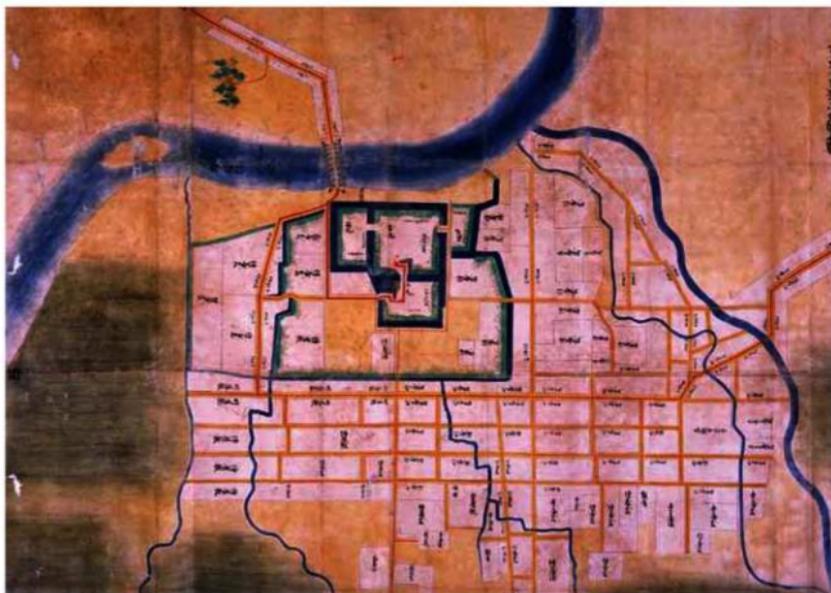
富山城跡 上層全景（東から）



富山城跡 外堀断面(西から)



富山城跡 下層全景(真上から)



『越中国富山古城之図』（正保絵図）

金沢市立玉川図書館蔵



『越中国富山古城之図』（正保絵図）より富山城周辺拡大図



『万治年間富山旧市街図』(万治絵図)

個人蔵・富山県立図書館受託



『万治年間富山旧市街図』(万治絵図)より富山城周辺拡大図



外堀最下層出土遺物1(瀬戸・中国陶磁器)



外堀最下層出土遺物2(越中瀬戸)



外堀最下層出土遺物3 (古唐津・肥前)



外堀最下層出土遺物4 (寛文期)



外堀最下層出土遺物5(慶長期上層)



外堀最下層出土遺物6(慶長期下層)



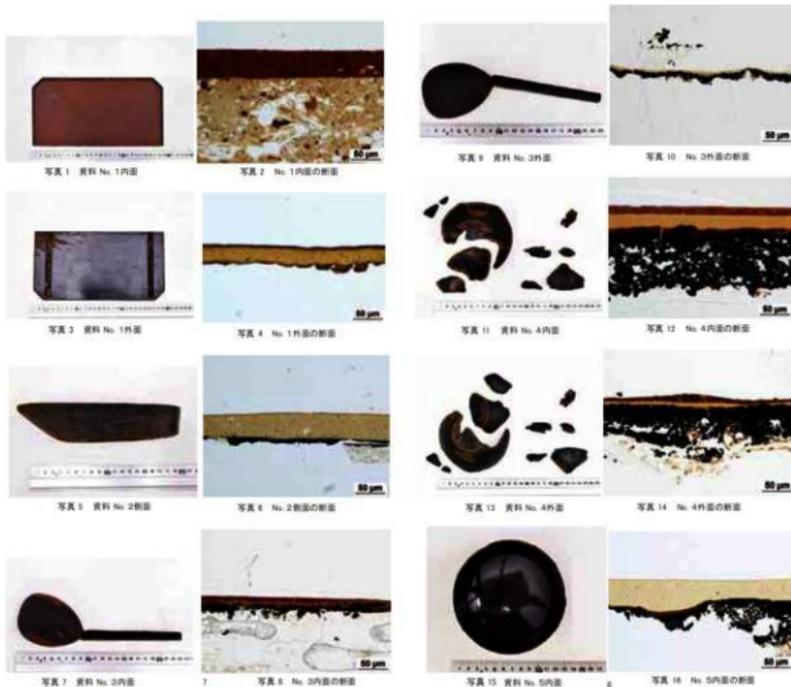
木製品1(漆器)



木製品2(下駄)



木製品3(文字資料)



漆塗膜分析1



写真 64 資料 No. 16 外面

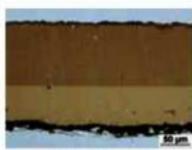


写真 65 No. 16 外面の断面

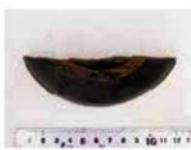


写真 78 資料 No. 20 外面

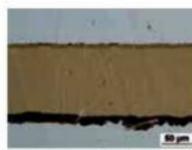


写真 79 No. 20 外面の断面

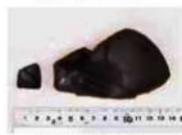


写真 66 資料 No. 17 内面



写真 67 No. 17 内面の断面



写真 17 資料 No. 5 外面



写真 18 No. 5 外面の断面



写真 68 資料 No. 17 外面



写真 69 No. 17 外面の断面



写真 19 資料 No. 6 内面



写真 20 No. 6 内面の断面



写真 70 資料 No. 18 内面



写真 71 No. 18 内面の断面



写真 21 資料 No. 6 外面



写真 22 No. 6 外面の断面



写真 72 資料 No. 18 内面



写真 73 No. 18 外面の断面



写真 23 No. 8 裏合内



写真 24 No. 6 裏合内拡大



写真 74 資料 No. 19 内面



写真 75 No. 19 外面の断面

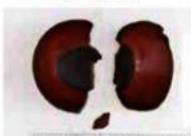


写真 25 資料 No. 7 内面



写真 26 No. 7 内面の断面



写真 76 資料 No. 20 内面

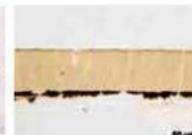


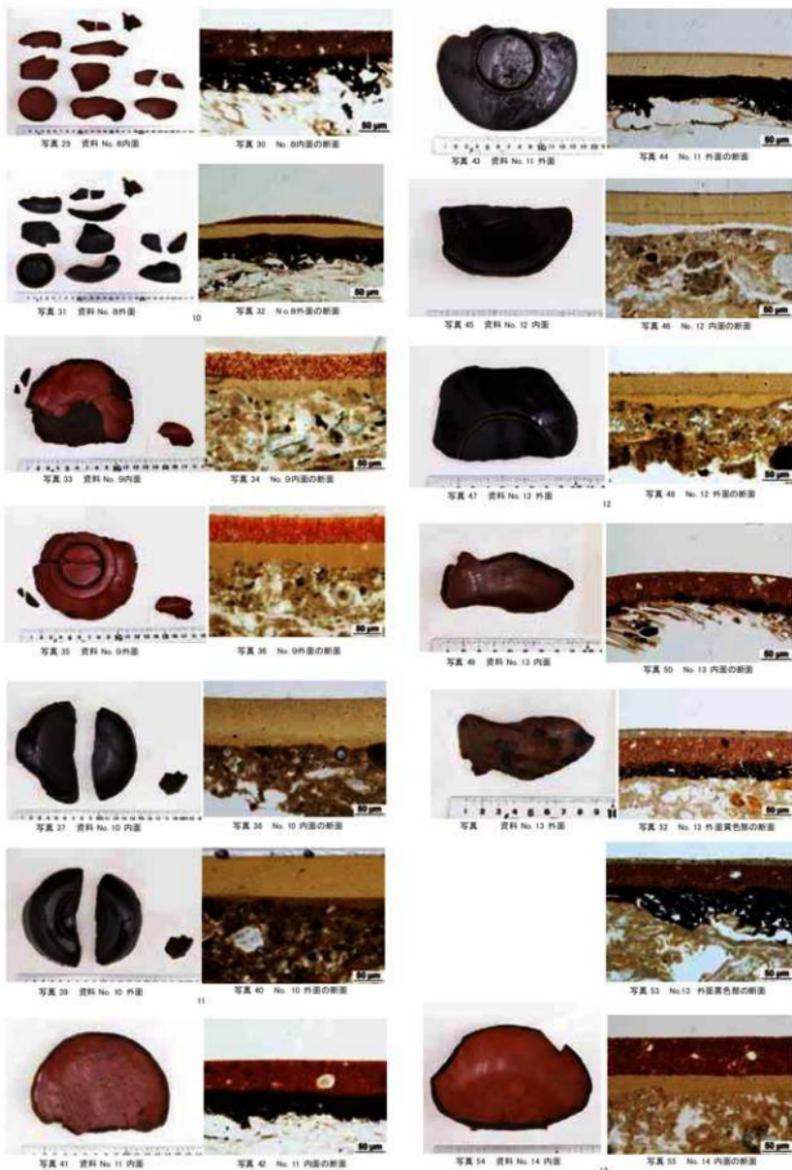
写真 77 No. 20 内面の断面



写真 27 資料 No. 7 外面



写真 28 No. 7 外面の断面



序

富山市は、東西60.7km、南北43.8kmに及び、富山県全体の約29%にあたる1,241.77km²という広大な面積を占め、3,000m級の立山連峰を仰ぎ、富山湾に面する自然環境に恵まれた都市であります。

富山市には、先人たちが残した遺跡が現在1,050ヶ所確認されています。遺跡は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない財産であり、これを保護し、未来へ継承していくことは現代に生きる私たちの務めと考えております。

近年、富山城跡周辺では市街地再開発に伴い発掘調査が数多く行われ、富山城の新たな歴史が次々と明らかとなってきております。

平成17年に富山市立総曲輪小学校が統合され、その跡地には総曲輪レガートスクエアが整備されることとなりました。

平成26年度から平成28年度の3年をかけて、この整備に先立ち富山城跡の発掘調査を実施しましたところ、平成26年度に近世富山城の外堀が確認され、外堀の幅や深さなどの構造が明らかとなりました。

このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元総曲輪四丁目地区の皆様をはじめ、調査や整理にあたりご指導を賜りました関係各位、諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成29年3月31日

富山市教育員会
教育長 麻 島 裕 之

例 言

- 1 本書は、富山市総曲輪四丁目地内に所在する富山城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、総曲輪レガートスクエア整備に伴うもので、富山市企画管理部企画調整課から委託を受け富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で、北陸航測株式会社が実施した。
- 3 調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。
調査期間 現地調査 平成26年9月21日～平成27年3月31日
出土品整理 平成28年5月1日～平成29年3月31日
調査面積 1,562㎡
調査担当者 監理担当 堀内大介（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター）
調査担当 朝田 要 橋 日奈子（北陸航測株式会社）
- 4 本書は、第1章第1節・第2章・第5章第2節を堀内、第3章（第2節石造物・石垣石材除く）・第5章第1節を朝田、第3章第2節（石造物・石垣石材）・第5章第3節を古川知明・野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）、第5章第4節を宮田康之（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）が執筆した。各文の文責については文末に記した。また全体の編集は朝田が行った。出土遺物に記載されている文字の解読については、木本秀樹に依頼して行った。
- 5 自然科学分析は、環境考古学分析・放射性炭素年代測定・樹種同定①は株式会社パレオ・ラボに、樹種同定②・漆塗膜分析は株式会社吉田生物研究に委託し、その成果は朝田が編集し、本書「第4章 自然科学分析」に掲載した。また「第4節動物遺存体分析」は納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）が執筆し、「第5節富山城外堀出土埴壇・取鍋の蛍光X線分析」は中村晋也（金沢学院大学）に依頼して行った。出土木製品の保存処理については、株式会社吉田生物研究所に委託し、高級アルコール処理法で行った。
- 6 富山城及び富山城下町に関する古地図の掲載については、富山県立図書館・金沢市立玉川図書館・富山市郷土博物館の承認を得た。
- 7 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 調査にあたり、総曲輪四丁目町内会、総曲輪地区センター、堀内秀樹、兼子心、長秋雄、佐々木達夫、鈴木重治、藤田邦郎、佐々木花江、竹部佑介、古本統吉、九千房百合、中原義史、中島啓太、秋山綾子、九千房英之、松永篤知、新宅輝久（順不同）からご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

- 1 本書で用いた座標は国土地産院VII系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 使用したグリッドはX=76,555、Y=3,835をA0とし、それを起点として南北軸を南から北へ1～7、東西軸を西から東へA～Nとし、グリッド名はその組合わせを用いた。
- 3 遺構記号は、SD：堀・溝・石組水路、SK：土坑、SP：ピット、SX：性質不明遺構を用いた。
- 4 土層及び遺構埋土、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠る。
- 5 遺構番号は、基本的に調査時に付した番号をそのまま使用したが、下層の遺構番号は上層から通し番号とした。
- 6 図中のアミカケは、各頁に凡例を示している場合を除き、以下のとおりである。

	スス・炭化物・油煙痕		赤彩 赤色系漆の文様		赤色系漆		石造物・石垣石材自然面
	地山		黒色系漆		黄色系漆		
- 7 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
 - ①遺構埋土に新旧関係がある場合は、特記欄に古く新のように記号で記す。
 - ②規模・法量の（ ）は現存長である。
- 8 [] は引用・参考文献である。

目次

第I章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 旧総曲輪小学校跡地活用事業に伴う調査歴	3
第II章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第III章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法と層序	11
第2節 遺構と遺物	13
第IV章 自然科学分析	
第1節 環境考古学分析	92
第2節 放射性炭素年代測定	103
第3節 樹種同定・漆塗膜分析	106
第4節 動物遺存体分析	121
第5節 富山城外堀出土埴塼・取鍋の蛍光X線分析	127
第V章 総括	
第1節 近世富山城外堀最下層出土遺物について	130
第2節 近世富山城外堀について	144
第3節 石垣石材と石造物について	152
第4節 富山城三ノ丸南外堀出土の売薬行商鑑札について	156
写真図版	

挿図目次

第1図 旧総曲輪小学校跡地活用事業計画図	1
第2図 旧総曲輪小学校跡地活用事業に伴う試掘調査・立会調査位置図	4
第3図 周辺の遺跡分布図	8
第4図 富山城・城下町の調査位置図	9
第5図 グリッド配置図	12
第6図 基本層序	12
第7～18図 全体図・遺構平面図・遺構断面図	16～28
第19～35図 土器陶磁器実測図	37～53
第35図 瓦・土製品実測図	53
第36図 金属製品・石製品実測図	54
第37～44図 木製品実測図	59～66
第45図 石10 刻印拓影	68
第46～51図 石造物・石垣石材実測図	70～75
第52図 近世富山城外堀最下層埋土堆積状況略図	133
第53図 近世富山城外堀最下層出土遺物分布図(層位)	134・135
第54～57図 近世富山城外堀遺物出土位置図 i～iv	136～143
第58図 堀・土塁位置の変化	145
第59図 『万治年間富山旧市街図』(部分)	146
第60図 外堀横断面合成図	147
第61図 富山城南外堀変遷模式図	149
第62図 慶長期富山城外堀及び寛文期拡張部分推定図	150
第63図 明治期解体前の二階櫓御門石垣	152
第64図 二ノ丸二階櫓御門石垣の位置と石材出土地点	152
第65図 出土した六角型灯籠の復元図	154
第66図 売薬行商鑑札	157

表 目 次

第1表	調査に至る経過一覧	2
第2表	富山城・城下町における調査一覧	10
第3表	遺構一覧表	76
第4表	土器陶磁器観察表	77~84
第5表	木製品観察表	85~89
第6表	瓦・土製品・金属製品・石製品観察表	90
第7表	石造物観察表	90
第8表	石垣石材観察表	90・91
第9表	堀最下層層位別遺物出土点数	133
第10表	正保城絵図の城郭部と城下部比較表	145

巻 頭 ・ 写 真 図 版 目 次

巻頭図版1	上層全景
巻頭図版2	外堀断面・下層全景
巻頭図版3	「越中国富山古城之図」(正保絵図)
巻頭図版4	「万治年間富山旧市街図」(万治絵図)
巻頭図版5	外堀最下層出土遺物1(瀬戸・中国製陶磁器)・2(越中瀬戸)
巻頭図版6	外堀最下層出土遺物3(古唐津・肥前)・4(寛文期)
巻頭図版7	外堀最下層出土遺物5(慶長期上層)・6(慶長期下層)
巻頭図版8	木製品1(漆器)・2(下駄)
巻頭図版9	木製品3(文字資料)・漆塗膜分析1
巻頭図版10・11	漆塗膜2・3
写真図版1	近代遺構検出状況、木札出土状況・SX17(石組遺構1)
写真図版2	調査区西側上層石組遺構(SX02・SX24)、SX02(石組遺構2)、SX24(石組遺構4)
写真図版3	SX03(石組遺構3)、SX39(石組遺構5)、SD01(石組水路)
写真図版4	上層遺構断面・遺物出土状況
写真図版5	SD01(石組水路)、SD04(富山城外堀)完掘状況・断面
写真図版6	SD04(富山城外堀)完掘・最下層遺物出土状況
写真図版7	SE20・SE22、下層遺構完掘・断面
写真図版8~15	土器・陶磁器
写真図版15	土製品
写真図版16	金属製品・石製品
写真図版17~27	木製品
写真図版28~37	石造物・石垣石材

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

富山城跡(市№2010442)は、平成5年3月発行「富山市遺跡地図(改訂版)」に記載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。この当時の包蔵地範囲は、現在の富山城址公園を中心に旧本丸・西ノ丸・二ノ丸を含む90,000㎡であったが、平成10年の文化庁次長通知である「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」の中で「近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができる」とした近世遺跡に関する取扱いの原則変更が通知されたことを受け、平成12年4月に改訂した「富山市遺跡地図」では城下町主要部まで範囲を拡張した。その後、平成25・26年度に富山城跡の埋蔵文化財包蔵地範囲の見直しを行い、城下町主要部を富山城下町遺跡主要部(市№2011048)として分け、富山城跡は旧本丸・西ノ丸・二ノ丸・三ノ丸・東出丸、外堀の外側に配置された武家屋敷地までを範囲とした。現在の富山城跡の埋蔵文化財包蔵地面積は343,000㎡である。

平成17年、富山市立総曲輪小学校と富山市立八人町小学校が富山市立芝園小学校として統合され、総曲輪小学校は廃止となった。平成21年12月に「富山市統合小学校跡地活用事業基本計画」が策定され、旧総曲輪小学校跡地はPPP(パブリックプライベートパートナーシップ：公民連携)を採用して活用することが盛り込まれた。その後、平成25年10月に「旧総曲輪小学校跡地活用事業基本計画」が策定され、まちなかに住む高齢者を対象に訪問医療、訪問介護、投薬指導や生活の相談などの地域包括ケア体制を整えた地域医療・介護の拠点を整備することとなった。

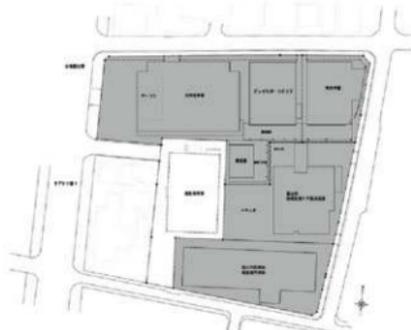
事業が進展するなかで、平成26年2月に旧総曲輪小学校跡地の南側の一部を富山市医師会へ貸出することが決定し、富山市医師会は富山市医師会看護専門学校をここへ移転することとした。

また、事業地から市道富山駅根塚線(すずかけ通り)へのアクセスが不便なことから、旧総曲輪小学校西側に建つアームストロング青葉幼稚園敷地1,381㎡を事業地に組み込むことが計画され、富山市と学校法人アームストロング青葉幼稚園との間で土地交換の協議が重ねられた。平成26年10月、旧富山市中央保健福祉センター・旧富山市救急医療センター跡地との土地交換契約が正式に締結され、アームストロング青葉幼稚園敷地は「旧総曲輪小学校跡地活用事業」に組み込まれることとなった。

平成26年9月に募集を開始したPPPの事業者は、翌年2月に大和リース株式会社が優先交渉権者に決定した。同社から地域包括ケア拠点施設「富山市とやままちなか総合ケアセンター」を中心に、専門学校やフィットネス施設などが入居する計画が提案され、富山市の承認を得た。これらの施設のあるエリア帯は、「総曲輪レガートスクエア」と命名し、整備することが決定した。

平成21年10月以降、「富山市統合小学校跡地活用事業基本計画」に先立ち事業地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、企画調整課・管財課と埋蔵文化財センターの間で協議を重ねた。両課の依頼を受けて、平成21年度、25年度、26年度の3回にわたり試掘調査を行ったところ、旧校舎と体育館を除く全域約7,727㎡の範囲に、富山城外堀跡を含む3層の遺構面を確認した(第2節参照)。

試掘調査の結果を受け、事業担当課の企画調整課と埋蔵文化財の保護措置について協議



第1図 旧総曲輪小学校跡地活用事業計画図

を行い、遺跡が保護できない建物部分に関して本発掘調査を行い記録保存することとなった。

本発掘調査は平成26年度から3年計画で行い、平成26年度に富山市医師会看護専門学校建設予定地1,562㎡、平成27年度に「総曲輪レガートスクエア」建物建設予定地3,565.5㎡、平成28年度に立体駐車場建設予定地(旧アームストロング青葉幼稚園敷地部分)704.9㎡の発掘調査を行った。

第1表 調査に至る経過一覧

※ゴシック体が埋蔵文化財調査

年月	経 過
平成17年 4月	総曲輪小学校と八人町小学校が統合し、芝園小学校となる (芝園小学校校舎は、旧総曲輪小学校校舎を使用)
平成18年 4月	芝園小学校に安野屋小学校も統合(校舎は、旧総曲輪小学校校舎のまま)
平成20年 4月	芝園小学校に愛宕小学校も統合、新校舎が供用開始 旧総曲輪小学校校舎が空き校舎となる
平成21年10月	旧総曲輪小学校跡地の埋蔵文化財の取り扱いに関して企画調整課と協議開始
12月	「富山市統合小学校跡地活用事業基本計画」策定
平成22年 2月	第1回試掘調査
平成25年 9月	旧総曲輪小学校解体に伴う設備接続工事に対する工事立会調査
10月	「旧総曲輪小学校跡地活用事業基本計画」策定
11月	旧総曲輪小学校プール解体後、 第2回試掘調査・ボーリング調査 (～12月)
12月	旧総曲輪小学校校舎解体(～平成26年3月)
平成26年 2月	富山市医師会に旧総曲輪小学校跡地の一部を貸出することを決定
5月	第3回試掘調査・ボーリング調査 (現地～6月、基礎整理～平成27年3月)
9月	PPPによる事業者募集開始
10月	本発掘調査(第1期) (現地・基礎整理～平成27年3月) 富山市と学校法人アームストロング青葉幼稚園の間で、土地交換契約を締結
平成27年 2月	PPPによる事業者(優先交渉権者)が大和リース株式会社に決定
5月	本発掘調査(第2期) (現地～11月、基礎整理～平成28年3月)
10月	富山市と学校法人アームストロング青葉幼稚園の間で、所有権移転登記完了
11月	富山市医師会看護専門学校建設工事着工
平成28年 2月	アームストロング青葉幼稚園解体
3月	下水道工事立会調査 (～5月)
4月	「総曲輪レガートスクエア」工事着工
5月	本発掘調査(第3期) (現地～8月、基礎整理～平成29年3月) 整理調査(第1期) (～平成29年3月)
12月	富山市医師会看護専門学校完成
平成29年 2月	「総曲輪レガートスクエア」完成
3月	本書『富山城跡発掘調査報告書』刊行
4月	「総曲輪レガートスクエア」供用開始・富山市医師会看護専門学校開校(予定) 整理調査(第2・3期) (～平成30年3月)(予定)
平成30年3月	『富山城跡発掘調査報告書Ⅱ(仮)』刊行(予定)

第2節 旧総曲輪小学校跡地活用事業に伴う調査歴(第2図)

(1)平成21(2009)年度 第1回試掘調査

平成22年2月16日～26日に企画調整課の依頼を受け、埋蔵文化財センターが実施した。試掘調査は、旧小学校敷地面積11,436㎡のうち、鉄筋コンクリート造である校舎部分1,319㎡・体育館部分952㎡は調査対象から除外し、残り9,165㎡を対象とした。試掘トレンチは、校舎周辺の一部とグラウンドの一部に7本設定した。

その結果、グラウンド北側に設定したH21-4T・H21-5Tで中世～近世の溝、柱穴などの遺構を検出し、約1,000㎡の範囲に2層以上の遺構面を確認した。しかし、校舎解体や周囲のアスファルト舗装撤去が行われておらず、校舎周辺では十分な調査は行えなかったため、校舎解体後の平成26年度に再度試掘調査を行うこととなった。

(2)平成25(2013)年度 工事立会調査

体育館への設備接続工事(発注者:管財課)に伴い、平成25年9月3日～5日に電気配線布設工事(延長40m×幅1.1m)、平成25年9月18日～20日に水道管布設工事(延長48m×幅0.6m)の立会調査を実施した。調査は、管財課が株式会社二友組に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。

掘削工事の深度が浅かったため、遺物包含層の確認に留まった。

(3)平成25(2013)年度 第2回試掘調査・ボーリング調査

プール解体後の平成25年11月25日～12月4日に管財課の依頼を受け、埋蔵文化財センターが実施した。調査はまちづくり交付金を受けて、プール跡地962㎡を対象とした。試掘トレンチは3本、ボーリングは2箇所設定した。

その結果、地表面下約100～170cmに富山城外堀跡を検出した。ボーリング調査から堀底が現地表面から約4.7m下にあると推測した。また、地表下約55～70cmで湧水が確認され、外堀跡は深度が浅いところに透水層があることが分かった。

(4)平成26(2014)年度 第3回試掘調査・ボーリング調査

校舎解体後の平成26年5月19日～6月10日に試掘調査・ボーリング調査を行った。調査は、企画調整課が北陸航測株式会社に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。試掘トレンチは旧校舎周辺とグラウンドに12本、ボーリングは2箇所設定した。

その結果、戦国時代の堀・溝・土坑、江戸時代の富山城外堀・溝・土坑などの遺構を検出し、旧総曲輪小学校跡地のほぼ全域約7,727㎡(平成21年度確認面積約1,000㎡を含む)で、最大3層の遺構面を確認した。ボーリング調査から地表下205cm～215cmで湧水が確認された。

(5)平成26(2014)年度 本発掘調査(第1期)

平成26年10月26日～平成27年3月4日に富山市医師会看護専門学校建設予定地1,562㎡を対象に本発掘調査を実施した。調査は、企画調整課が北陸航測株式会社に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。湧水が激しいことから、ディーブウェルを設置して行った。

その結果、富山城外堀跡を検出した(第3章)。

(6)平成27(2015)年度 本発掘調査(第2期)

平成27年5月15日～平成27年11月25日に「総曲輪レガートスクエア」内の建物(富山市とやままちなか総合ケアセンター、富山リハビリテーション医療福祉専門学校・富山調理製菓専門学校、グンゼスポーツ、廣貫堂カフェ、立体駐車場)建設予定地3,565.5㎡を対象に本発掘調査を行った。調査は、企画調整課が北陸航測株式会社に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。

その結果、室町時代の区画溝、戦国時代の区画溝・堀・井戸・土坑・ピット・かわらけ廃棄土坑、江戸時代の区画溝、井戸・土坑・ピット・廃棄土坑・馬屋、明治時代のゴミ穴などを検出した。

(7)平成27(2015)年度 工事立会調査

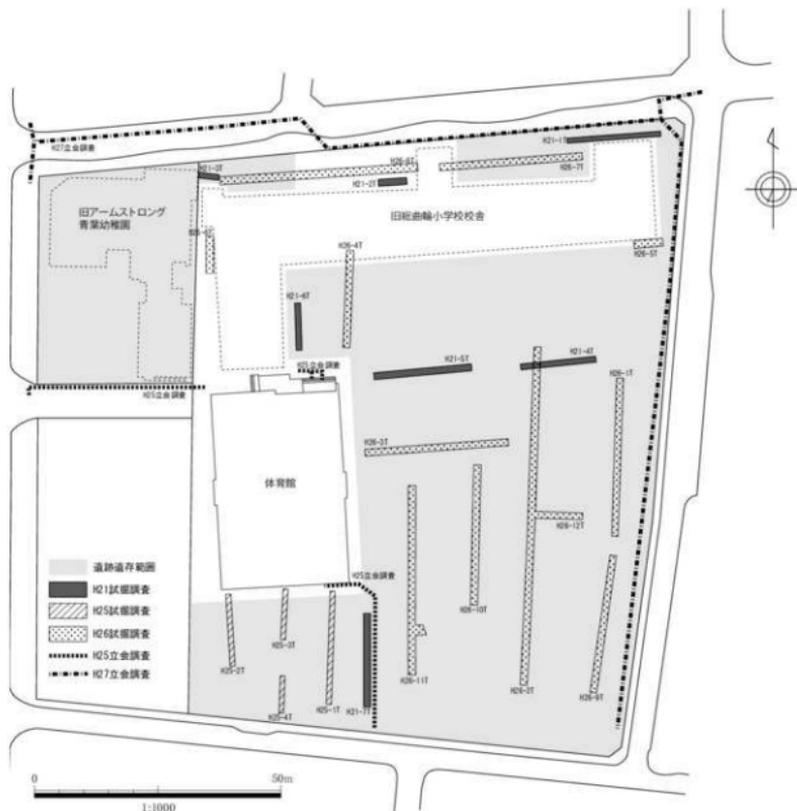
下水道工事(発注者:下水道課)の施工に伴い、平成28年1月7日～4月15日に下水道管布設(延長272.88m×幅1.0～1.6m)の立会調査を実施した。調査は、施工業者が北陸航測株式会社に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。

その結果、中世の堀・溝・土坑・井戸・ピット、江戸時代の富山城外堀・溝・土坑・井戸・廃棄土坑・ピット、明治時代の石組水路、昭和時代のゴミ穴などを検出した。

(8)平成28(2016)年度 本発掘調査(第3期)

平成28年5月15日～平成28年11月25日に「総曲輪レガートスクエア」の立体駐車場建設予定地704.9㎡を対象に本発掘調査を実施した。調査は、企画調整課が北陸航測株式会社に委託し、埋蔵文化財センターがその監理に当たった。

その結果、戦国時代の堀・溝・土坑・井戸、江戸時代の溝・土坑・廃棄土坑・水溜状遺構などを検出した。



第2図 旧総曲輪小学校跡地活用事業に伴う試掘調査・立会調査位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山市は、平成17(2005)年の市町村合併により富山県の中央部から南東部にかけて県全体の約1/3を占める広大な市域となった。富山市の地勢は大まかに山間部と平野部に大別され、北には富山湾が広がり、東には立山連峰が聳え、西には呉羽丘陵・山村地帯が連なり、南には岐阜県境に接して山林が広がる。平野部は、神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地と氾濫平野が広がる。

富山城跡の旧本丸、西ノ丸と二ノ丸の一部は、現在富山城址公園となっており、公園内には博物館や美術館が建ち、春には公園北側の松川べりとともに桜の名所として市民の憩いの場となっている。近年は、公園内にイベント用ステージや日本庭園の新設、茶室「碌々亭」の移築など中心市街地の観光拠点としての公園整備が進められてきた。旧三ノ丸や東出丸は、明治期に民有地となり、それ以降は市街地化が進み、往時の面影はほとんど残っていない。富山城跡の内堀・外堀は、内堀の一部を残してそのほとんどが埋められている。

富山城跡は、富山市本丸・総曲輪・丸の内などの中心市街地に位置する埋蔵文化財包蔵地で、富山湾から7.5km内陸に入った神通川右岸の河岸段丘上に立地する。城の東側には鮎川が北流し、富山城跡は西の神通川、東の鮎川に挟まれた天然の要害の地にあった。現在の神通川は城の西側をまっすぐに北流するが、明治時代後期までは蛇行しながら城の西側から北側へ流れていた。神通川が洪水を頻繁に発生させることから、明治34(1901)年~同36年に川の流れを直線的に変えるための分水路を設ける馳越工事が行われた。やがて、分水路の川幅が広がって新しい本流となり、城の北側を流れていた元の本流にはほとんど水が流れなくなったため、元の本流であった場所は廃川地となった。広大な廃川地は富岩運河掘削工事の排土で埋め立てられ、埋立地には富山駅や県庁、市役所などが建設され新たな市街地が形成された。元の本流は、現在松川としてその名残をとどめている。

また、富山城外堀跡の南を東西に走る現在の市道総曲輪線(平和通り)は、江戸時代の北陸街道であり、西町・太田口通りを起点とする飛騨街道が交わる交通の要衝であった。城は、その交通の要衝に神通川を背に造られている。

第2節 歴史的環境

中心市街地には、藩政期富山城外堀に囲まれた内側を範囲とする「富山城跡」、外堀南辺・東辺沿いの武家屋敷地と北陸街道沿いの町屋敷地を範囲とする「富山城下町遺跡主要部」、中世富山城築城以前の遺跡を範囲とする「総曲輪遺跡(市№2010443)」が埋蔵文化財包蔵地として所在する。次に富山城跡周辺における歴史と発掘調査成果を概観する。

弥生時代中期～古墳時代前期 神通川流域に集落や墳丘墓、古墳などが造営される。右岸には、千石町遺跡がある。富山城跡の南約0.4kmに位置する千石町遺跡では、約2,200年前に造営された方形周溝墓が5基見つかった〔富山市教委2015a〕。方形周溝墓群の南西約100m地点で地下約6mのところから約2,300年前の洪水で流された流木6本(コナラ属2本、クリ4本)が見つかった。洪水の影響を受けなかった流路北側の高台に方形周溝墓群が造営されたと考えられる。

左岸には、呉羽丘陵最高峰の城山(標高145m)の山頂に弥生時代後期の高地性集落が営まれ、丘陵上には多数の墳墓や古墳が造営された。城山の南西約0.3kmには、古墳時代前期の呉羽山丘陵古墳群が南北約1.9kmにわたって造営された。呉羽丘陵北端部の百塚遺跡・百塚住吉遺跡では、方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳等が28基造営され、「百塚古墳群」と称している〔富山市教委2009a・2012〕。百塚古墳群の南西約1kmには、古墳時代初期の杉坂古墳群がある。富山城・城下町では、弥生土器や

土師器が散見して出土する。

古墳時代後期 呉羽丘陵の番神山に古墳時代後期の群集墳が造営される。同時期に百塚遺跡では円墳が造営され、円墳の周溝内埋葬施設には馬のハミが副葬されており、他地域に先に馬を所有した有力者の存在が考えられる〔富山市教委2012〕。

古代 西ノ丸の工事立会(2010a)調査区、城下町のグランドパーキング(2004)やTOYAMAキラリ(2013a)の発掘調査区で、古代の須恵器・土師器が出土している。中でも西ノ丸出土の「宅持」と墨書された奈良時代後期の須恵器は特筆される。この他にも墨書土器が数点見つかったこと、「宅持」墨書土器には厳重に管理されているはずの漆の付着があることを合わせて考えると、富山城・城下町周辺に官衙関連施設が存在することを伺わせるとしている〔鹿島2011〕。

室町時代後期～戦国時代前期 本丸東部の石垣新設(2007b)調査区では、室町時代後期～戦国時代前期の井戸や溝を検出し、筭や漆器、中国製磁器など的高級品であった遺物が出土することから、至近に武家居館の存在を示唆している〔富山市教委2016〕。三ノ丸の総曲輪レガートスクエア(2015b)調査区では、室町時代後期の区画溝、戦国時代前期の武家居館の堀などを検出した〔富山市埋せ2016〕。

この時期は、文献史料に「外山(富山)」の地名が散見する時期に当たる。応永5(1398)年の「吉見詮頼寄進状」(市指定文化財)には、能登の吉見詮頼が將軍足利氏から拝領した「外山郷」地頭職を京都東岩蔵寺に寄進したことが記載されており、荘園「外山郷」の存在が確認できる。永享2(1430)年の「足利義教御内書」には、6代將軍足利義教が正室の三条尹子(瑞春院)に「富山柳町」を与え、嘉吉3(1443)年の「瑞春院寄進状」には、瑞春院が賜与された「富山柳町」を夫義教や息子義勝などの菩提を弔うために京都二尊院へ寄進したことが記載されている。「富山柳町」は跡川沿いの自然堤防帯に向かい合って成立した市的機能を持つ商業地との指摘〔久保2014〕があり、荘園「外山郷」の比定地を跡川左岸の富山城周辺とされており、本丸の2007b調査区や三ノ丸の2015b調査区で検出した室町時代後期～戦国時代前期の遺構は荘園「外山郷」に関連する遺構と考えられる。

また、三ノ丸の2015b調査区で検出した区画溝の主軸方向はN-12°-Eであり、戦国時代・江戸時代の区画溝や堀などもこの区画溝と同一の主軸方向である。このことから、荘園「外山郷」が条理地割を敷いて形成されており、その地割が江戸時代まで踏襲されていたと考えられる〔富山市埋せ2016〕。神通川左岸には、古代～近世の複合遺跡である金屋南遺跡がある。遺跡の最盛期である室町時代～戦国時代には、溶解炉や廃滓場などの鑄造関連の遺構を検出し、鑄造を生業とする村があったと考えられる〔富山市教委2007〕。

戦国時代後期 中世富山城は、越中守護代神保長職により築城され、築城時期は天文12(1543)年ごろが有力である〔久保1983〕。平成14年から行ってきた富山城址公園内の試掘調査などで、戦国時代の堀や井戸などを検出し、中世富山城が近世富山城と同じ場所に建っていたことがほぼ確実となった〔富山市教委2004・2006b・2008・2009b〕。三ノ丸の2015b調査区では、中世富山城期の堀や井戸、かわらけ廃棄土坑などを検出し、この調査区周辺まで中世富山城に関連する遺構が広がることを確認した〔富山市埋せ2016〕。

中世富山城は城主の入れ替りが激しい城であった。神保長職が荘園「太田保」への進出の足掛かりとして富山城を築いたが、永禄3(1560)年に上杉謙信により長職は城を追われ、城は上杉氏の支城となった。その後、反上杉勢力の一向一揆勢が城を占拠したが、元亀元(1573)年に一向一揆勢は謙信により富山周辺から排除され、天正4(1576)年には越中一國がほぼ上杉氏の支配下となった。天正6年に謙信が死去すると、月岡野での織田勢と上杉勢との戦いで織田勢が勝利し、これにより織田勢が越中への進攻を強めた。天正8年には、織田信長のもとにいた神保長住(長職の子)が富山城に入城し、その支援として佐々成政が越中へ派遣された。天正10年、長住は上杉勢に与した元神保氏家臣の小島職鎮・

唐人式部大輔らに城に幽閉された。織田勢が間もなく城を奪還したが、長住は城から追放されることとなり、これにより成政が富山城主となった。同年に起きた本能寺の変後、成政は織田信雄・徳川家康に味方したため、豊臣秀吉と対立した。天正13年、秀吉は成政討伐の越中攻めを決断し、呉羽丘陵の城山にあった白鳥城を本陣として布陣し、その支城として安田城・大峪城を構えた。成政は秀吉に降伏し、富山城は破却された。

江戸時代 慶長2(1597)年、前田利長が富山城に入城した。翌年家督相続のため金沢に移るが、慶長10年嗣子利常に家督を譲って隠居し、再び富山へ戻り、その時に城と城下町を整備した(慶長期富山城)。神通川対岸を通っていた北陸街道はこの時に城の南側を通され、飛騨街道とも結節させ、街道沿いには町屋敷を配した。慶長14年、大火により城は焼失し、元和元(1615)年の一国一城令により廃城となった。

寛永16(1639)年、加賀藩から10万石が分与され富山藩が成立した。翌年、初代藩主となった前田利次は百塚の地に新城築城まで加賀藩領に所在する富山城を仮居とすることとし、城へ入城した。しかし、百塚での新城築城は財政的に厳しかったために断念して、居城を富山城とすることとした。万治2(1659)年に加賀藩と領地を交換し、富山城を含む富山城周辺は富山藩領となった。寛文元(1661)年から富山城の改修を行い、幕府から新たに天守のほか、櫓3ヶ所、櫓門3ヶ所などの新築が許可されたものの、最終的天守や櫓は建てられず、櫓門は二ノ丸と三ノ丸の間に1ヶ所建てられたに留まった(藩政期富山城)。また、慶長期に西側であった大手は南側に変更された。

延宝2(1674)年の利次の死後、神通川左岸の八ヶ山地内に富山藩主前田家墓所長岡御廟所が造営された。二代正甫が亡父の念願であった百塚の新城予定地近くに利次を葬り、以後この場所が富山藩歴代藩主の墓所になった(古川・野垣・小林・蓮沼2010)。

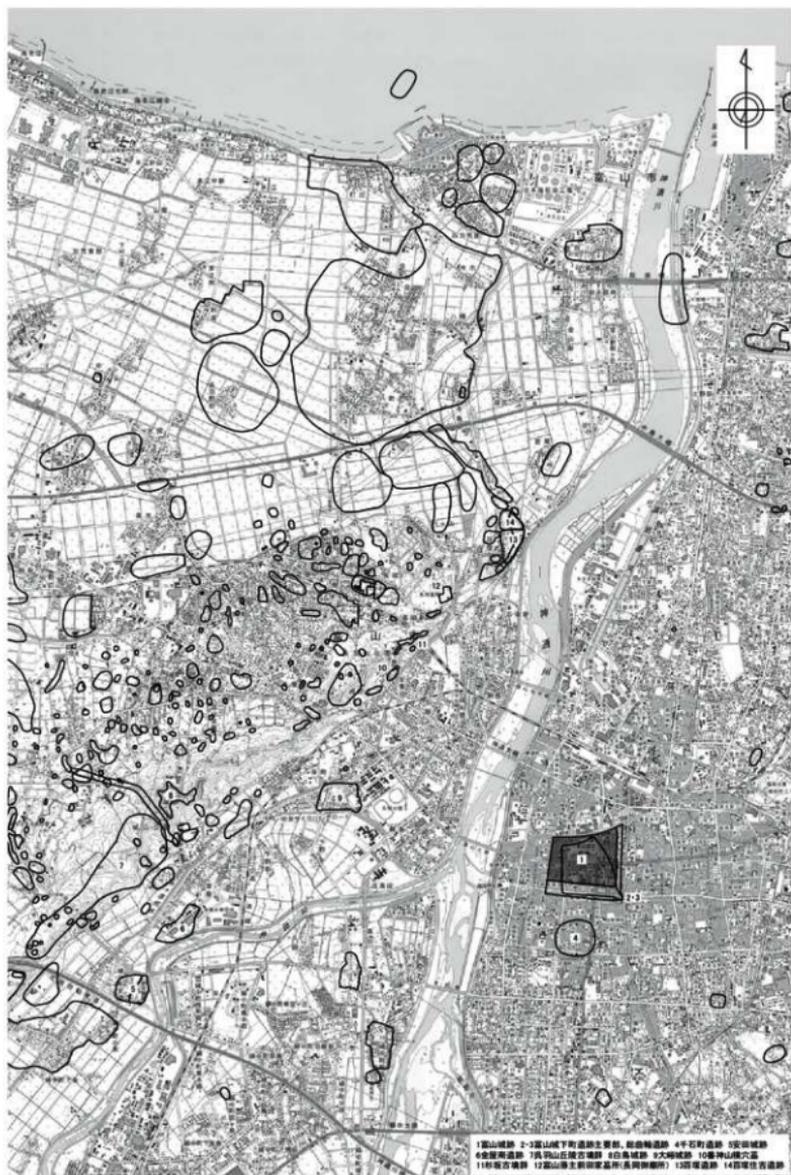
富山城や城下町については、これまでの発掘調査で多くの成果が得られている(第4図、第2表)。本丸の池泉整備(2009b)調査区では、本丸御殿の縁側に伴う沓脱石や飛び石を確認した〔富山市教委2017〕。本丸の鉄門石垣・搦手石垣の解体修理に伴う調査(2006b・2007a)では、石垣の内部構造などが明らかとなった〔富山市埋せ2006・2007〕。

本丸の土塁調査(2007b・2010b・2011b)では、土塁が40°前後の傾斜をもつことが明らかとなり〔富山市教委2016〕。西ノ丸北西部の雨水貯留管施設設置(2011c)調査区では、内堀の深さが現地表から約5.8m下にあることが分かった〔富山市上下水道局・富山市教委2012〕。本書で報告する三ノ丸2014d調査区では、近世富山城外堀の構造や深さを確認した(第三・IV・V章)。三ノ丸・城下町ユウタウン総曲輪(2014e)調査区では、土塁の痕跡を検出した。江戸時代の様々な古絵図には、南外堀の北側には土塁が描かれており、古絵図どおり土塁が存在したことを裏付けた〔富山市教委2015b〕。

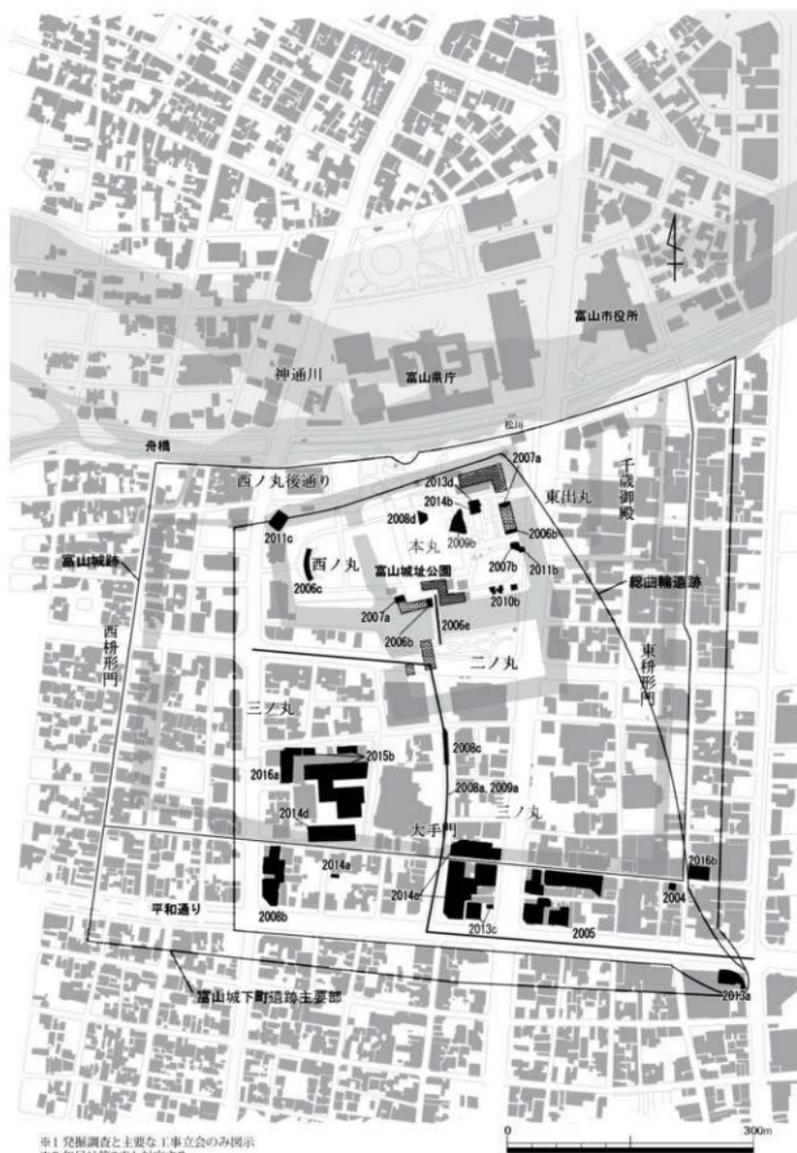
城下町にあたる総曲輪フェリオ(2005)調査区、プレミス総曲輪(2008b)調査区、一番町スクエアビル(2013c)調査区、2014e調査区などで、武家屋敷と町屋敷を分ける背割下水を確認し、背割下水は最低3度の作り替えを行っていることが分かった。また、2005調査区や2013c調査区のある一番町東側では、鞆羽口や鉄滓が多く出土することから鍛冶工房があり、2014e調査区のある一番町西側では、漆の付いた刷毛などが出土することから漆工房があったと考えられた(総南再組・富山市教委2006、総四旅籠町地区開協・富山市教委2010、富山市教委2014・2015b)。

TOYAMAキラリ(2013a)調査区のある西町では、木製品の素材や端材が大量に出土し、付近に木材加工場の存在を推測している〔富山市教委・西町南再組2014a〕

このように城下町での生産活動の様相や屋敷割の構造などが少しずつ明らかとなってきている。(堀内)



第3図 周辺の遺跡分布図



第4図 富山城・城下町の調査位置図

第2表 富山城・城下町における調査一覧

	調査箇所	調査原因	調査区分	調査面積 (㎡)	主な文献
2004	城下町(総曲輪)	グランドパークキング建設工事	発掘調査	130	富山城跡発掘調査概要2005
2005	城下町(一番町・総曲輪)	総曲輪フェリオ建設工事	発掘調査	2,811	富山城跡発掘調査報告書2006
2006a	本丸、二ノ丸内堀	城址公園整備(坂改修)	工事立会	—	
2006b	本丸鉄門西石垣、勝手南石垣	城址公園整備(石垣解体修理)	工事立会、石垣石材調査	—	富山市の遺跡物語№8 2007
2006c	西ノ丸	城址公園整備(ステージ建設)	発掘調査	278	富山城跡発掘調査報告書2017
2006d	城下町(総曲輪)	グランドプラザ建設工事	工事立会	—	富山市の遺跡物語№9 2008
2006e	本丸大手土橋	城址公園整備(電線管工事)	工事立会	—	富山城跡発掘調査報告書2016
2006f	本丸東辺土塁	千歳御門移築	工事立会	—	
2007a	本丸鉄門西石垣、勝手南石垣	城址公園整備(石垣解体修理)	工事立会、石垣石材調査	—	富山市の遺跡物語№9 2008
2007b	本丸東辺土塁	城址公園整備(石垣新設)	発掘調査	112	富山城跡発掘調査報告書2016
2008a	二ノ丸、三ノ丸、城下町(一番町・総曲輪)	市内電車敷設工事	工事立会	—	富山城跡発掘調査報告書2009
2008b	城下町(総曲輪)	プレイス総曲輪建設工事	発掘調査	1,200	富山城跡発掘調査報告書2010
2008c	三ノ丸	市内電車敷設工事	発掘調査	187	富山城跡発掘調査報告書2009
2008d	本丸	城址公園整備(池泉整備)	発掘調査	118	富山城跡発掘調査報告書2016
2009a	二ノ丸、三ノ丸、城下町(一番町・総曲輪)	市内電車敷設工事	工事立会	—	富山市の遺跡物語№11 2010
2009b	本丸	城址公園整備(池泉整備)	発掘調査	370	富山城跡発掘調査報告書2017
2010a	西ノ丸	城址公園整備(下水管工事等)	工事立会	—	富山城跡発掘調査報告書2017
2010b	本丸南辺土塁	城址公園整備(石垣改修)	発掘調査	87	富山城跡発掘調査報告書2016
2011a	本丸東辺土塁	城址公園整備(石垣改修)	工事立会	—	
2011b	本丸東辺土塁	城址公園整備(石垣新設)	発掘調査	25	富山城跡発掘調査報告書2016
2011c	西ノ丸内堀	公共下水道松川処理分区雨水貯留施設工事	発掘調査	134	富山城跡発掘調査報告書2012
2012a	二ノ丸、三ノ丸、城下町	水道工事	工事立会	—	富山市の遺跡物語№14 2013
2012b	本丸、西ノ丸	城址公園整備(電線管工事等)	工事立会	—	
2013a	城下町(西町)	TOYAMAキラ建設工事	発掘調査	380	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014a
2013b	二ノ丸、東出入、二ノ丸内堀	水道工事	工事立会	—	富山市の遺跡物語№15 2014
2013c	城下町(一番町・総曲輪)	一番町スクエアビル建築工事	発掘調査	423	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014b
2013d	本丸	城址公園整備(池泉整備)	発掘調査	66	富山城跡発掘調査報告書2017
2014a	城下町(総曲輪)	レーベン富山総曲輪レジデンス建設	発掘調査	96	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014c
2014b	本丸	城址公園整備(池泉整備)	発掘調査	64	富山城跡発掘調査報告書2017
2014c	本丸	城址公園整備(下水管工事等)	工事立会	—	富山市の遺跡物語№16 2015
2014d	三ノ丸外堀	総曲輪レガートスクエア(第1期)	発掘調査	1,562	本書
2014e	城下町(一番町・総曲輪)、三ノ丸外堀	ユクタウン総曲輪建設工事	発掘調査	3,960	富山城跡 富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2015
2015a	三ノ丸	アームストロング青葉幼稚園移転新築工事	工事立会	473	富山市の遺跡物語№17 2016
2015b	三ノ丸	総曲輪レガートスクエア(第2期)	発掘調査	3,565.5	富山市の遺跡物語№17 2016
2016a	三ノ丸	総曲輪レガートスクエア(第3期)	発掘調査	704.9	富山市の遺跡物語№18 2017
2016b	城下町(総曲輪)	総曲輪三丁目市街地再開発	発掘調査	285	富山市の遺跡物語№18 2017

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法と層序

(1)調査の方法

本調査区の範囲内には、古絵図から近世富山城内外堀があると推定されており、事前の試掘調査によりその存在を確認していた。また、ボーリング調査により、堀の深さは現在の地表面下約4.7mであり、堀底が湧水層に達していることが判明していた。加えて、地表面下-0.8~1mに位置する砂質土層(山砂/明治時代堀埋戻し土)からは、調査区周辺から雨水とみられる多量の水が常時流入する状態であった。このことから、堀底まで調査を進めるうえで、大量の地下水の湧出と雨水流入による調査区壁面の崩落の可能性が懸念された。

こうしたことから、調査はまず、堀底の地下水対策として、10月27日から、ディープウェル工事を施工し、調査期間を通して24時間、富山市が管理する火防水路へ排水できる体制を整えた。砂質土層からの雨水流入については、堀の中~下層の段掘りを行い、適宜、単管とコンパネにより壁面の補強を行いつつ調査を進めることで対処した。また砂質土層から流入する雨水には多量の山砂が混入しており、厚さ30~40cmとみられる砂質土層の空洞化による周辺地域への影響が懸念された。そのため、特に雨水の流入と壁の崩壊が著しい調査区東端約5~7mの部分保護範囲とすることで対応し、その範囲は上層遺構検出面である近代遺構の調査にとどめた。

10月29日から、埋蔵文化財センターの監理担当者立ち会いの下で、上層遺構検出面直上までバックホウによる表土掘削を行った。なお表土掘削の深度は、試掘調査で確認した明治期の石組水路の直上を基本とし、その深度以下に存在したコンクリートブロックを含む近代の建物基礎や、戦災ガレキなどの攪乱も同時に除去した。

調査区北側を東南東-西北西に向かって伸びる石組水路は、古絵図にみられる富山城外堀の北側肩部にほぼ沿う形で構築されており、石組水路を境に、その南北で、検出面の土質や遺構の性質が大きく異なっている。一方、古絵図で存在が想定された富山城外堀北側の土塁は、本調査時も確認できなかった。これは明治時代に外堀を埋める際に、周辺の地表面に合わせて全て削平され、埋め立て土として利用されたためと考える。

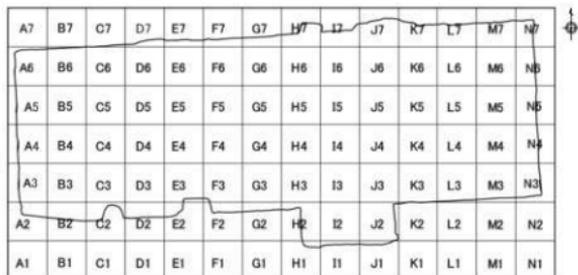
上層の遺構は、石組水路北側は土塁削平後に、南側は外堀埋立て後に構築された建造物の遺構であり、いずれも近代の遺構である。10月29日から11月14日まで近代遺構の検出作業を進め、16日に上層遺構検出状況の空中写真撮影を行った。上層遺構は石組水路や廃棄土坑、石組遺構等の明瞭な遺構を中心に進め、11月20日から石組水路以南の下層遺構の調査を開始した。

下層の遺構は、石組水路北側が近世富山城の土塁が構築される前の遺構であり、南側は近世富山城の外堀である。

富山城外堀に関しては、明治時代の埋戻し土・埋戻し前の自然堆積土である上~中層上部埋土(1~7・19層/堀断面と層位は第13図断面図参照)を、遺物の混入と掘削深度に注意しながら、バックホウにより機械掘削を実施した。機械掘削は埋土の性質の変化に注意して進め、上層部分は約2mグリッド×深さ1m程度、中層部分は約1m四方×深さ0.5m程度の範囲を基本として遺物を取り上げ、埋土種類とトータルステーションによる出土位置計測結果を記録した。粘性の強いオリブ黒色シルト(3~7層)を除去し、南側堀壁面崩落(また法面補強土)と考えられる8層まで機械掘削を行った後、堀の存続時期と構造上の特徴を示唆する可能性が高い下層(9~14層)・最下層埋土(15・16層)の掘削を、人力により行った。下層~最下層出土遺物に関しては、可能な限り遺存状態の良い遺物の出土状況の撮影記録を取り、重要と考えられる遺物については出土状態を図面に記録した。12月20日に

は、石組水路以南の堀の調査を完了させ、26日に上層遺構完掘段階の空中写真測量を行った。翌27日には現地説明会を実施した。平成27年1月5日から作業を再開し、下層遺構の調査を進めた。13日に下層遺構完掘段階の空中写真測量を実施し、同日午後から20日まで遺構の断割り等の残務を行った。

調査終了後の1月20日～2月18日、土壌強化改良した掘削土の埋戻し及びディーブウエルの撤去、24日に最終的な残土処理を行い、現場作業を終了した。

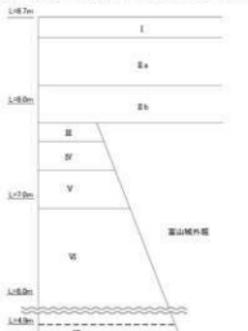


第5図 グリッド配置図 (S=1:600)

(2)基本層序

基本層序の土層観察は調査区北・東壁で行った。基本層序は下記の通りである。なお今回の調査面積全体の約85%を占める近世富山城外堀部分は、Ⅲ層上面(標高約7.8m)から掘削され、Ⅳ層～Ⅵ層を超えてⅦ層まで及んでいる。外堀堆積土は、上～中層上部埋土が明治時代の埋戻し土、中層下部～最下層埋土は外堀が機能していた時期の自然堆積土を中心とする。外堀堆積土については「第Ⅲ章第2節(1)」を参照されたい。

- I 層：表土層(標高8.5～8.7m)。2.5 Y 5/2 暗灰黄褐色粗粒砂～砂質シルト。グラウンド整地層。
- II a 層：盛土(標高8.1～8.5m)。埋戻し土である2.5 Y 7/3 浅黄色砂～砂質シルトに10 YR 2/1 黒色/10 Y R 3/1 黒褐色戦災ガレキ層が混在する。
- II b 層：盛土(標高7.6/7.8～8.1m)。10 Y R 5/2 灰黄褐色シルト。炭化物粒・焼土粒、礫を含む。
- Ⅲ 層：中近世遺物包含層(標高7.6～7.8m/上層遺構検出面)。10 Y R 5/2 灰黄褐色砂～砂質シルトまたはN 4/灰色砂～砂質シルト(グライ化)。明治時代に行われた土塁の削平と外堀埋戻しの際に形成された可能性が高い層。旧土塁推定地の直下で、明治時代の遺物を含む遺構を検出した。これより上層は近代の開発等により削平されている。近世遺構の検出面である。
- Ⅳ 層：古代・中世遺物包含層(標高7.3～7.6m/中層遺構検出面)。10 Y R 3/1 黒褐色シルト。今回の調査区北側調査区外で、試掘調査時に確認した。
- V 層：地山(標高6.9～7.3m/下層遺構検出面)。2.5 Y 5/2 暗灰黄色細砂～砂質シルト。調査区の北東調査面積全体の約15%のみ確認できた。この層で検出した遺構は近世土塁を築造する前、中世～近世初のものである。北側調査区(平成27年度調査)につながる区画溝などを検出した。
- Ⅵ 層：地山(標高4.9～6.9m)。砂礫層。2.5 Y 5/2 暗灰黄色細砂～砂質シルトに礫が多量に混じる。東方向に向かって厚くなる。
- Ⅶ 層：地山(標高～4.9m)湧水層。2.5 Y 5/2 暗灰黄色砂に礫が多量混じる。調査区東側では確認できない。



第6図 基本層序 (S=1:400)

第2節 遺構と遺物

(1) 遺構

遺構の時期は、明治時代に行われた近世富山城外堀の埋立てと、それに伴う土壘削平の前後により分けられる。新しい時代から、1) 近代：旧堀跡に構築された石組水路等石組遺構群および調査区北東上層の土坑及び溝、2) 近世：近世富山城の外堀、3) 中近世：調査区北東下層の溝・土坑および外堀底に残された井戸、の3期となる。

1) 近代の遺構

石組遺構

SD 01 (石組水路) (第12・15図)：明治時代に富山城外堀を埋め立てた後、その北肩部分に沿う形で地境を示すために構築された石組水路である。市内電車敷設工事の立会調査18・19地点でも確認している〔富山市教委2009〕。調査区を東南東-西北西に貫き、調査区の東壁および北壁の外に延びる。主軸方向はE-12°-Sである。断面の規模は、掘方で幅2.92m×深さ1.5mを、石組内部の水路部分で幅約0.75m×深さ約0.66mを測る。調査区内で全長約37.3mを測る。水路底面は東から西へ緩やかに傾斜している。断割りによる断面観察の結果、石敷底面の下に2本1組の胴木を敷く。胴木が計4本確認できることから、石組水路が最低2回構築されていると考える。石組構造は、底面に石敷きがあり、側面は南北共通して長円礫を互い違いに積上げる谷積みで、最大5段の残存が確認できた。長円礫は長径0.3～0.5m前後、短径0.2～0.3m前後を測るものが多い。最上面の石組は長軸を横に積上げる平積みで、高さを揃えてあった。底面の石敷きは、径0.3m～0.4mの基石状の円礫または側面と同様の長円礫を平坦面を意図して2列に並べる。埋土は下層に砂質土が複数層、中間層に粘土質土が堆積していることから、構築してから一定期間濺みのない状態で機能し、その後、浚渫されない時期が経過した後に廃棄されたと考えられる。遺物は大量の近代陶磁器を中心に、珠洲、越中瀬戸、越中丸山、小杉、瓦、土人形、ガラス製薬瓶、卸金や不明金属製品等が出土した。

SX 17 (石組遺構1) (第7・8・11図)：調査区の東に位置する。中央に位置する石組部分で南北2.5m×東西2.8m、深さ0.39mを測る。石組の周囲に、ほぼ同レベルの高さに木樋と埋篋があり、石組の約0.3m下に竹樋および木製ジョイントを伴っている。中央石組の北端から北側約1.5mに位置する埋篋は、内面に屎尿痕と推定される白色石化付着物が認められることから便槽の可能性が高い。また、木製ジョイントは石組の中央で上方に向かって孔を持つことから、石組に水を引き込むため竹管が連結していたと考える。以上から、SX17の石組部分は、貯水して使用した池状の遺構で、北側に位置する便槽に伴う貯水槽としての役割を果たしていたと考える。同じ検出面の周辺で、便槽とみられる遺構や木樋の底板が存在していることから、SX17から複数のトイレに水を供給していた可能性が考えられる。石組内の埋土および木樋・竹樋部分の埋土はグライ化した黄灰色砂質シルトを基調とする。遺構の掘方は不明瞭で、検出面の基盤土及び埋土が共通して砂質土で滞水していたためと考えられる。中央の石組南端から約1mの地点で木札2点(第8図)が出土した。

SX 02 (石組遺構2) (第7・9・11図)：調査区の西に位置する2列の石組が平円形に残る遺構で、庭池跡と考えられる。南北6.25m×東西1.85m、深さ0.37mを測る。西側北に換水溝を持ち、その底面は瓦で補強される。2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトを基本とする埋土が2層レンズ状に堆積する。底面は漆喰状の固いシルト質土で補強されている。遺物は近代陶磁器を中心に、越中瀬戸、土人形、実包が出土した。実包については、中本氏が詳細を報告している〔中本2015〕。

SX 03 (石組遺構 3) (第 7・10 図) : 調査区の東側に位置する。中心に曲物を持つ遺構で、曲物外周を自然石で囲う。曲物部分のみ掘方が残る。埋桶式便槽の可能性が高い。

SX 24 (石組遺構 4) (第 7・9・11 図) : 調査区西端、SX02 の西側に隣接する道路状遺構である。南北方向に石列が平行に並び、南側調査区外に延びる。調査区内に残存する南北の長さが約 17.3 m で、幅約 4.3 m、深さ 0.7 m を測る。直上が戦災ガレキであることから上部構造は削平されている可能性が高く、下部構造と考えられる石組間には明瞭な埋土は存在しない。また石列に旧二の丸二階櫓御門の石垣石材を数点転用していることから、明治 18 年から 25 年、石垣の解体と外堀の埋め立てと同時期に構築された遺構と考えられる(「第 V 章第 3 節」参照)。

SX 39 (石組遺構 5) (第 7・18 図) : 調査区西側に位置する。幅約 1.15 m、深さ約 0.40 m を測り、東西方向に延びる溝状の遺構である。断面形は逆台形を呈する。全長は約 8.6 m を測る。埋土は 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトで、埋土全体に小礫が充満する。

このほか SX17 の南西約 5 m (グリッド I ~ K 5・6) で、上面が平坦な石列を検出した。南北・東西方向に規則性がみられることから礎石建物の可能性が考えられる。石列間には約 3.6 m を測る。

2) 近世の遺構

SD 04 (近世富山城外堀) (第 12 ~ 15 図) : 平面積で調査区全体の約 85%、北東部約 150m²を除く全てが富山城の外堀である。東南東 - 西北西方向に延び、調査区内で長軸約 62.4 m、幅約 20.0 m 以上を測る。石組水路 SD01 の北側約 1 ~ 2 m に、ほぼ並行する形で堀の北側肩部を確認した。主軸方向は SD01 と同様、E-12° S である。堀の南側肩部は調査区内で確認できなかったが、現在の道路との道路境界線がそれにあたると思われる。高低差のある底面が 2 面存在しており、北肩と平行して北側が深く、南側が浅いテラス状を呈する。底面の標高は北側堀底が約 3.8 m、南側テラス底が約 4.7 ~ 4.9 m を測る。外堀の検出面の標高が約 7.8 m であることから、外堀の深さは最大約 4.0 m を測る。

調査区の東壁断面の断割り結果から確認できた北側堀の立ち上がり角度は約 35 度である。南側は 2 か所にトレンチを入れ、南側斜面の堀底からの立ち上がり地点と角度を確認した結果、角度は約 35 ~ 50 度を測り、壁面半ばから角度が急になる(第 14 図)。これらの計測結果から、堀幅は理論上、調査区東端で約 24 m、西端で約 28.5 m と推定できる。

外堀の埋土は 17 層に分けられ(第 13 図)、各層の土質と性格から、明治期の遺構検出面から下を、上から 1 層を上層(L = 7.0 m ~ 6.3 m)、2 ~ 7 層を中層(L = 6.3 ~ 4.7 m・テラス部分は L = 6.3 ~ 5.1 m)、8 を堀北側肩部の崩落土または北側堀法面補強土、それ以下の 9 ~ 17 層を下層・最下層(L = 4.8 ~ 3.8 m、テラス部分は L = 5.1 ~ 4.9 m)として調査した。

1・2・18 ~ 20 層は明治時代の埋戻し土、3 ~ 7 層は近世の自然堆積土で、1 層は 10YR4/1 褐色砂、2 ~ 7 層はオリブ黒色シルト / 粘土質シルトを基調とする。2 ~ 6 層の埋土の特徴および出土遺物の時期・種類に大きな相違点は無く、多量の近代陶磁器と少量の近世陶磁器が含まれていた。中層最下層である 7 層からは、瀬戸美濃、越中瀬戸、肥前系陶磁器などが出土している。また「第 V 章第 3 節」で報告する石造物及び石垣石材の大部分は 2 層から出土している。

8 層は黒褐色粘土質シルトを基調とする埋土で、砂礫を多量に含む。北側の堀法面の地山の礫層を巻き込んだと考えられるが、堀北側法面を人為的に補強した壁面土の可能性もある。9 層は砂質土である。外堀が機能していた時期に自然堆積したと考えられる。

10 層は小礫が多く混じる。北側堀底の南側に、幅 4.5 m、0.15 ~ 0.2 m の厚さで堆積する。8 層とは異なり、堀北側から離れており、人為的に小礫を混ぜて敷き詰められた層と考える。

11～14層は外堀が機能していた時代に自然堆積した埋土である。埋土は黒褐色粘質土を基調とするものが多いが、焼土を多く含むもの(13層)、礫及び白色粘土をブロック状に多く含むもの(14層)等、層ごとに特徴を持つ。自然科学分析の結果、12層から寄生虫が検出されており、人糞が投棄された可能性が指摘されている。遺物は、中近世土師器、瀬戸美濃、中国製陶磁器、越中瀬戸、唐津、伊万里などが出土した。

15～17層は北側最下層のみ堆積する埋土である。15層は黒色砂質シルトに礫が混じる。堀底の北側全体に、ほぼ水平に約0.15mの厚さで堆積する。16層は黒色粘土質シルトに砂礫が、17層は灰色砂質シルトに砂礫が混じる埋土である。遺物は中世土師器、大窯期の瀬戸美濃、唐津等が出土した。完形または完形に近い遺存状態の良い遺物が多く出土したことから、人為的に埋められた埋土ではなく、自然堆積した埋土と考えられる。

3) 中世～近世初頭の遺構

調査区北東部下層で検出した溝・土坑等と、外堀最下層で検出した井戸である。富山城の土塁・堀が構築される前に存在した遺構で、時期は中世である可能性が高い。

溝

SD11(第12・15図)：幅0.35m、深さ0.12m、検出時の長さ2.83mを測る溝である。南はSD04に削平される。遺構上面が攪乱により削平される。黒褐色粘土質シルトに灰オリーブ色粘土質シルトを基調とする埋土がブロック状に混じる。調査区の北側に隣接する平成27年度(第2期)調査区で検出した溝と連結する可能性が高い。

SD26(第17・18図)：幅1.15m×深さ0.32m、調査区内で長さ6.68mを測る。南北方向の溝で、北は調査区外に延びる。南は近世富山城外堀に、遺構上面は明治以降の開発によって削平されている。遺構は上下で新旧の溝に分かれており、新しい溝は幅が広く、古い溝は西側に幅が狭い。調査区北側に隣接する平成27年度(第2期)調査区で連結する溝が確認されており、中世から近世の区画溝の一部である。埋土は上層が5Y4/1灰色粘土質シルト、下層がN4/灰色粘土質シルトに地山がブロック状に混じる。新しい溝は江戸時代前期、古い溝は室町時代後期と考えられる。

土坑

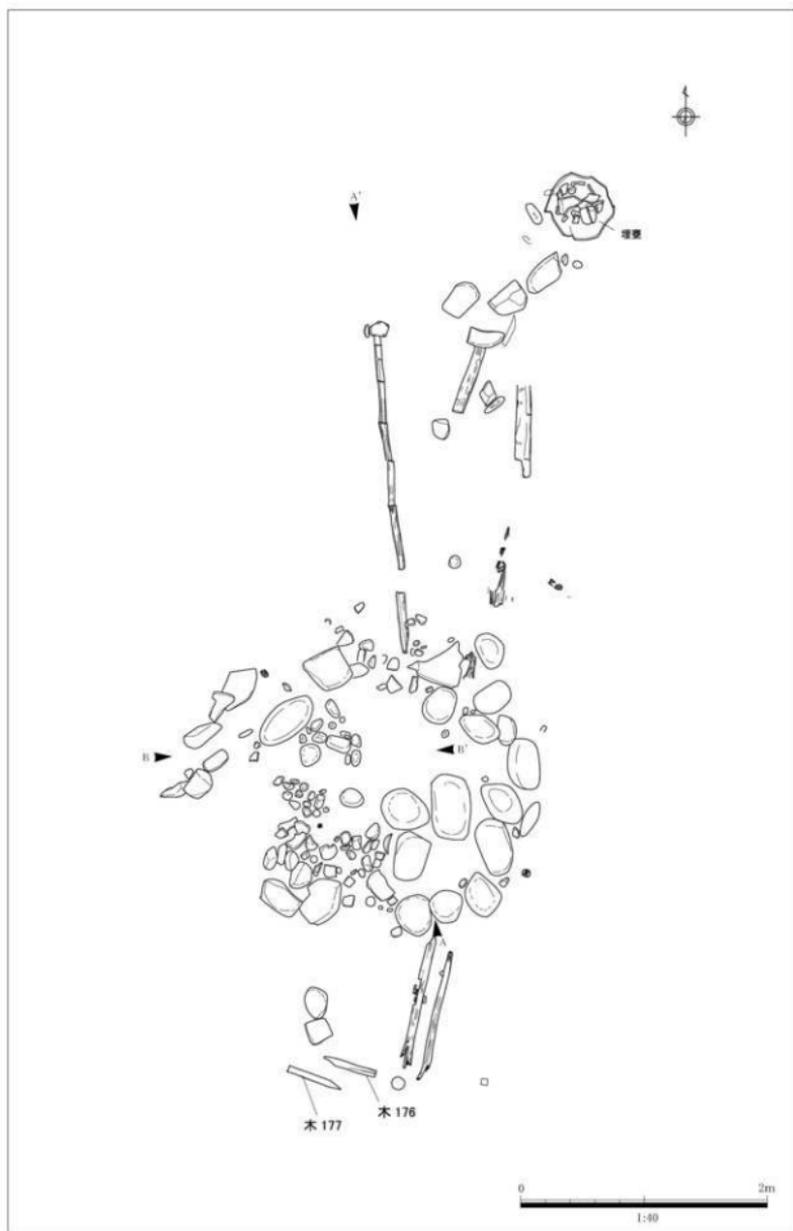
SK28(第17・18図)：長径1.10m×短径0.89m×深さ0.23mを測る楕円形の土坑である。埋土は10YR4/1褐色粘土質シルトに円礫が多量に混じる。

SK32(第17・18図)：径0.3m×深さ0.16mを測る円形の土坑である。埋土は10YR4/1褐色粘土質シルトに地山が混じる。中世土師器の小片が出土した。

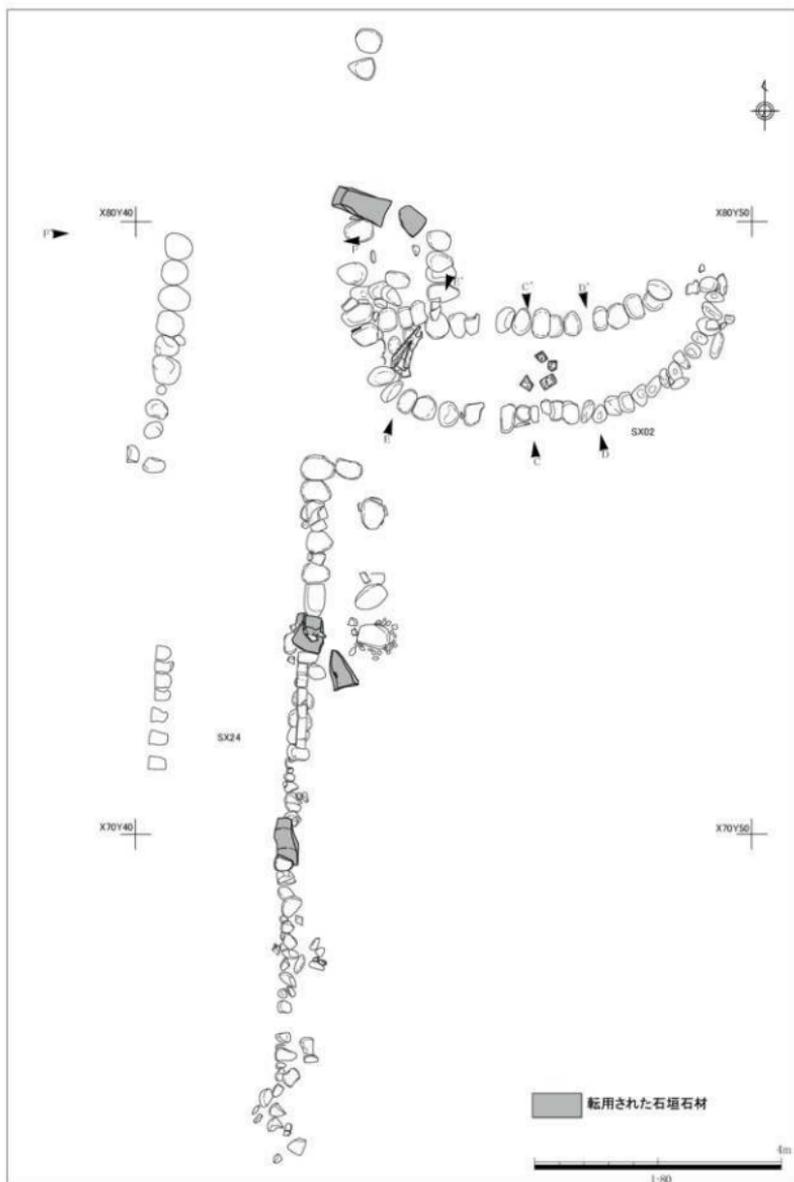
井戸

SE20(第12・16図)：長径1.55m、短軸1.12m、深さ0.43mを測る井戸である。平面形は楕円形である。井戸の下部構造と考えられ、東西に並ぶ形で、結桶2基を確認した。井戸の構造材であると推定される。遺物は出土していない。

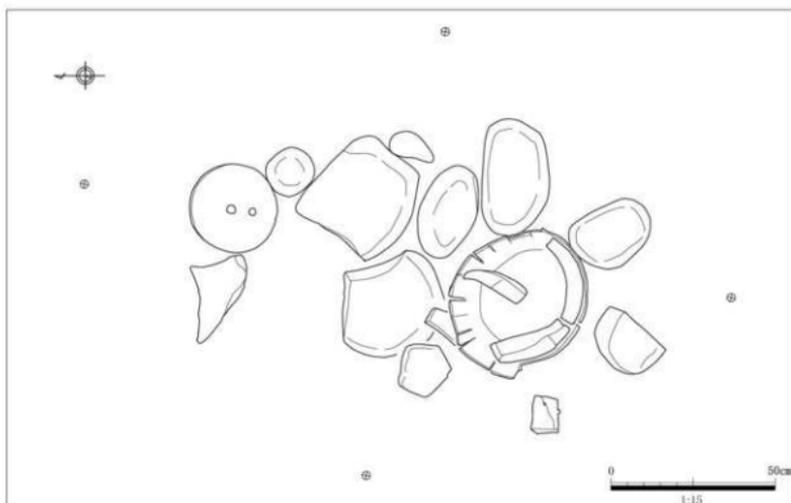
SE22(第12・16図)：径0.55m、深さ0.53mを測る井戸である。平面形は円形である。井戸の下部構造と考えられ、中心部分に構造材と考えられる曲物1基を伴う。曲物内からは唐津片が出土した。外面に鉄絵が描かれた絵唐津であることから、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。(朝田)



第8圖 SX 17(石組遺構1)平面図(1:40)



第9図 SX02・SX24 (石組遺構2・4) 平面図 (1:80)



第10図 Sx03 (石組遺構3)平面図 (1:15)

3

SX17(石組遺構1) a

L=7.4m A



- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 25Y1/1赤褐色砂 粘性・しまりなし | 5 75G1/4暗緑灰色砂 粘性・しまりなし |
| 2 25G1/2暗オリーブ灰色砂 粘性・しまりなし | 6 25G1/2暗褐色砂 粘性・しまりなし |
| 3 50Y3/1暗オリーブ灰色砂質土 粘性・しまりなし | 7 50Y2/1暗オリーブ褐色砂質シルト 粘性弱、しまりなし |
| 4 10G1/3暗緑灰色砂 粘性・しまりなし | 8 25Y3/1黒緑色シルト質砂 粘性・しまりなし |

SX17 (石組遺構1) b

L=7.4m B



- 25G1/3暗オリーブ灰色シルト 粘性・しまりなし
- 50Y3/1暗オリーブ灰色砂 粘性・しまりなし
- 25G1/2赤褐色砂 粘性・しまりなし
- 75G1/3暗緑灰色砂 粘性・しまりなし
- 75Y2/2暗オリーブ褐色粘土質シルト 粘性・しまり弱 礫を含む

B' L=7.6m C



- 75Y2/1黒色砂質シルト 粘性・しまりなし
- 25Y3/2暗褐色シルトに10Y4/1灰色粘土ブロック30~40%混 粘性・しまり弱
- 10Y4/1灰色粘土 粘性・しまり強
- 75Y3/2暗オリーブ褐色砂質シルト 粘性・しまりなし
- 10Y2/1黒色粘土質シルト 粘性・しまり弱

L=7.5m D



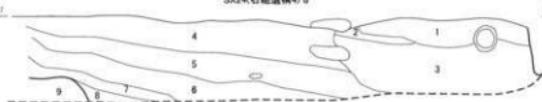
- 10Y4/4褐色砂質シルトに25Y6/6褐色砂質シルトブロック30~40%混 粘性なし、非常に固くなる ●断面を形成する人為的な層
- 75Y3/2暗オリーブ褐色砂 粘性なし、一部に黒色土を含む

L=7.5m E



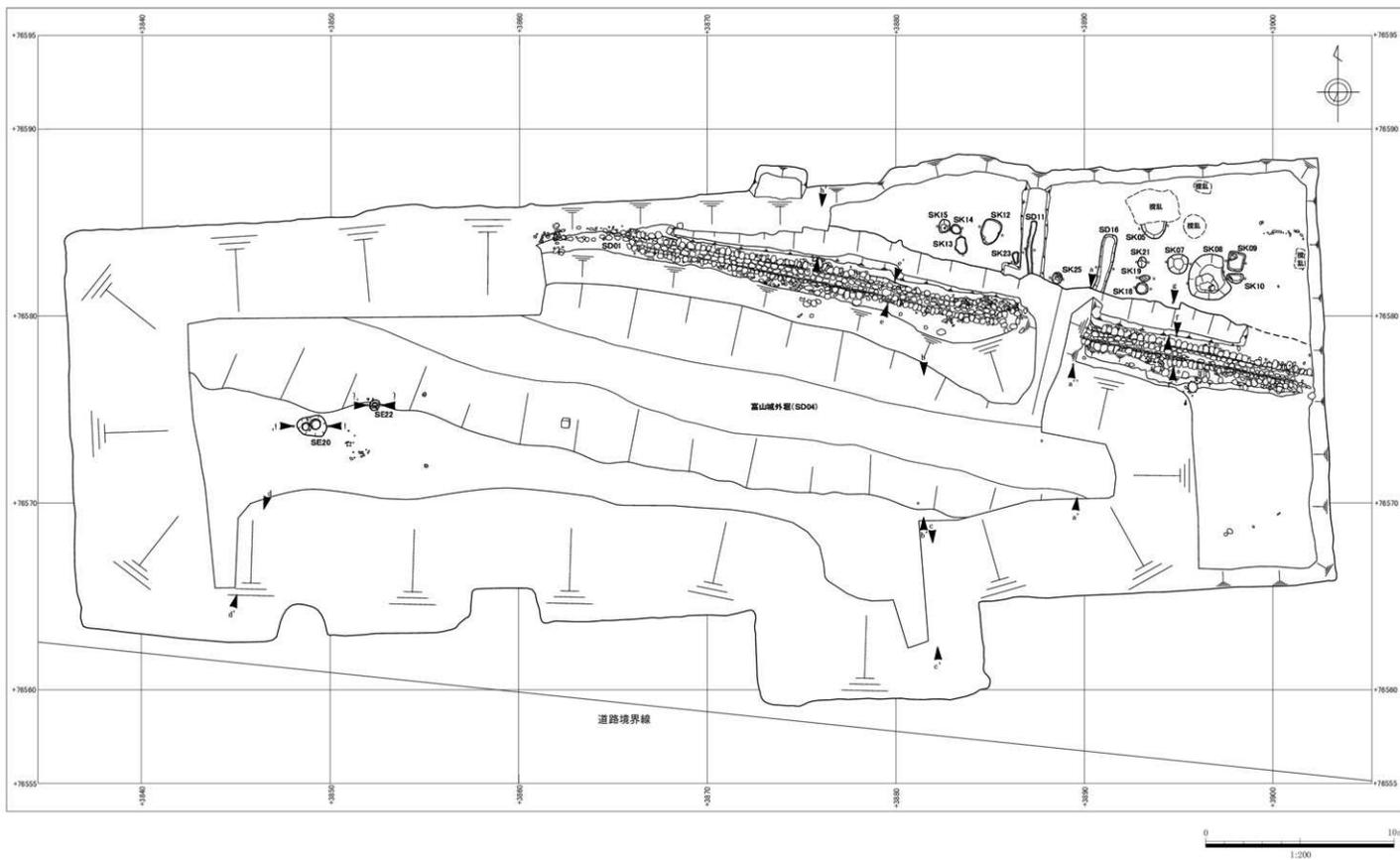
- 25Y3/2暗褐色シルトに10Y4/1灰色粘土ブロック30~40%混 粘性・しまり弱
- 10Y4/1灰色粘土 粘性・しまり強
- 75Y3/2暗オリーブ褐色砂質シルト 粘性・しまりなし
- 10Y2/1黒色粘土質シルト 粘性・しまり弱

L=7.6m F



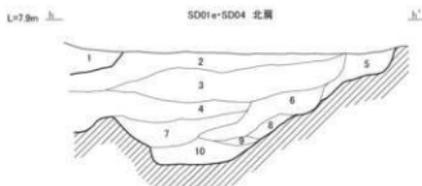
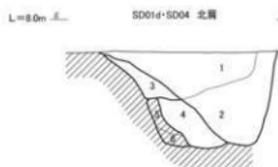
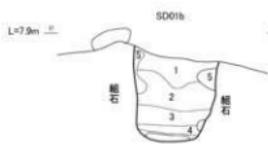
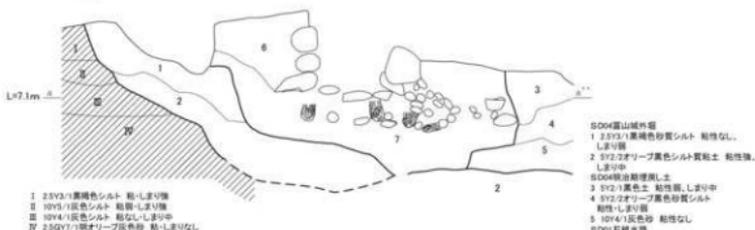
- 10Y3/2暗オリーブ褐色粘土質シルト 粘性弱
- 75Y3/2暗オリーブ黒色シルト 粘性なし
- 10Y3/2暗オリーブ灰色砂 粘性・しまりなし
- 25G1/3暗緑灰色シルト 粘性なし、しまり弱
- 50Y3/1暗オリーブ灰色シルト 粘性・しまり弱
- 75G1/4暗緑灰色砂 粘性なく、しまり弱
- 10Y3/2暗オリーブ褐色砂質シルト 粘性・しまり弱
- 75G1/3暗緑灰色砂 粘性・しまりなし
- 25G1/3暗オリーブ灰色砂 粘性・しまりなし

第11図 遺構断面図 (1:40)



第12図 上層遺構全体図 (1:200)

SD01a+SD04北側

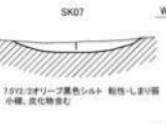
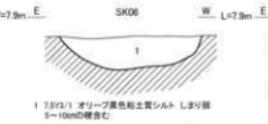
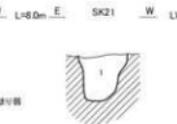
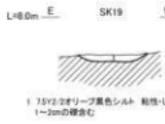
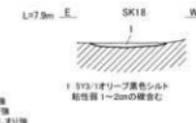
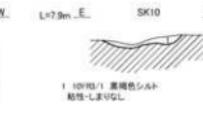
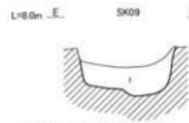
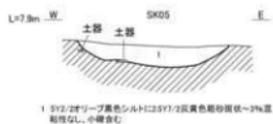


SK01

- 2Y2-2オリーブ黒色シルト 粘性なし、しまり中 礫を含む
- 3Y3-1オリーブシルト 粘性なし、しまり中 礫を含む
- 自然隆起土
- 3Y3-1オリーブ粘土質シルト 粘性なし、しまり強
*地山の隆起土・改良処理区土の可能性あり
- SD04
- 3Y3-2オリーブ黒色シルト 粘性なし、しまり弱 礫を含む
- 地山
- 23Y3-1黒砂り沢色 粘土質シルト 粘性なし、しまり中
- 3Y3-2オリーブ黒色シルト 粘性なし、しまり中

SD01

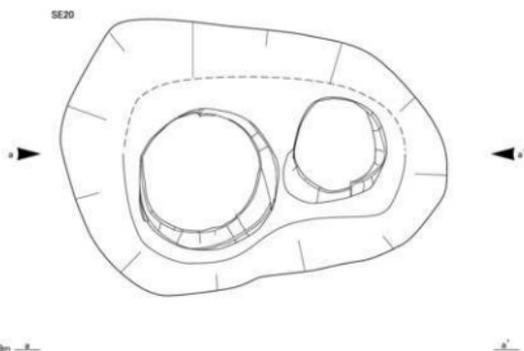
- 10Y4-3黒褐色土 粘性弱、しまり中 小礫を含む
- SD04
- 3Y3-2オリーブ黒色土 粘性弱、しまり強
- 23Y3-1黒褐色土 粘性弱、しまり強
- 23Y3-2黒褐色土 粘性弱、しまり強
- 23Y3-1黒褐色土 粘性弱、しまり強
- 3Y3-2オリーブ黒色砂 粘性なし、しまり弱
- 3Y4-2緑オリーブ色シルト 粘性なし、しまり中
- 10Y3-1オリーブ黒色粘土質シルト 粘性なし、しまり中
- 73Y2-1オリーブ黒色粘土質シルト 粘性なし、しまり中
- 3Y3-2オリーブ黒色粘土質シルト 粘性なし、しまり中
- 3Y3-2オリーブ黒色粘土質シルト 粘性なし、しまり中
- 10Y3-1オリーブ黒色粘土質シルト 粘性なし、しまり中



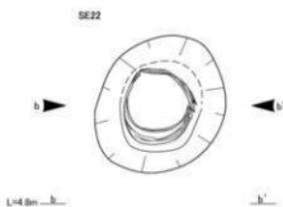
0 2m

1:40

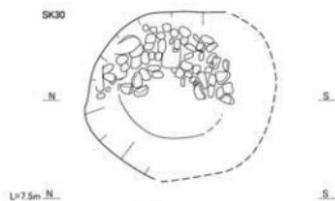
第15図 遺構断面図(1:40)



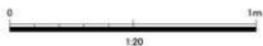
1 2.5Y7/2灰黄色粘砂に2.5Y5/1黄灰色砂が混入:20~30%混



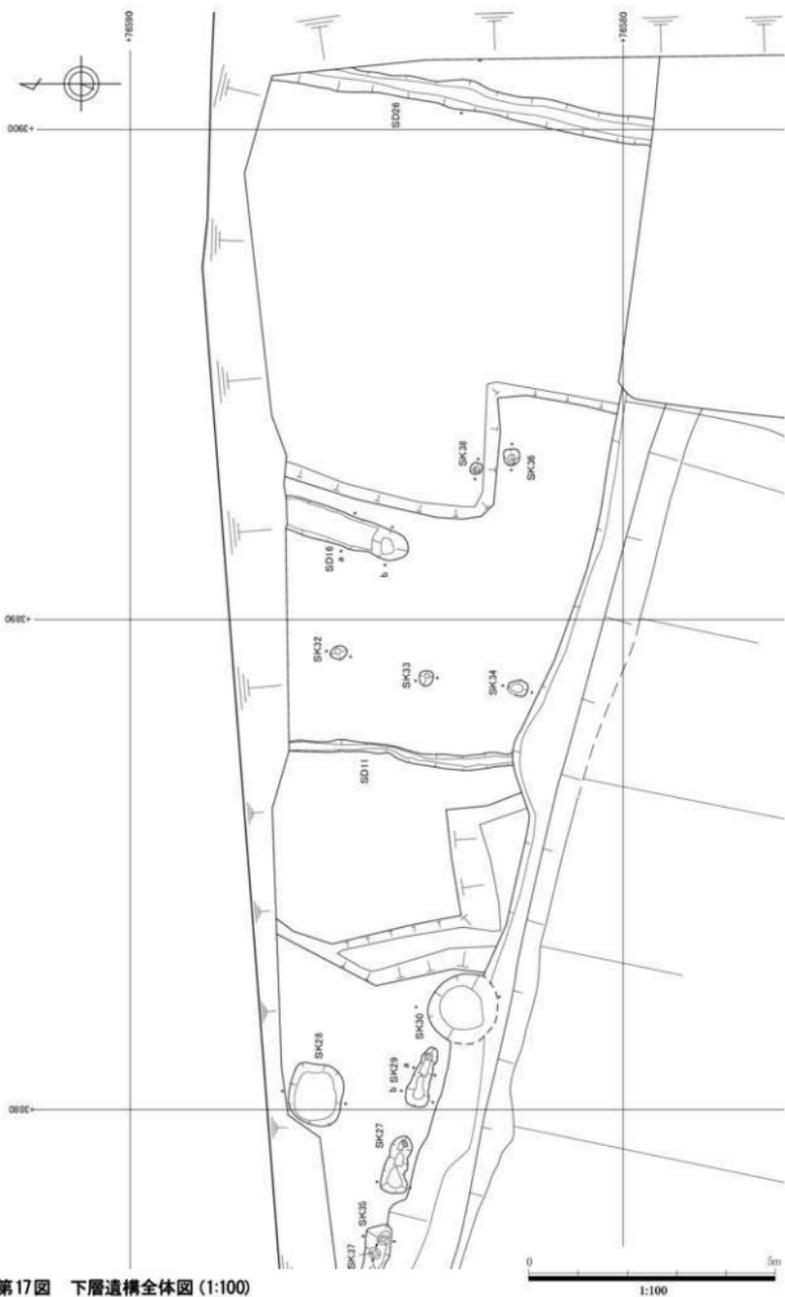
1 2.5Y7/2灰黄色粘砂に2.5Y5/1黄灰色砂が混入:20~30%混



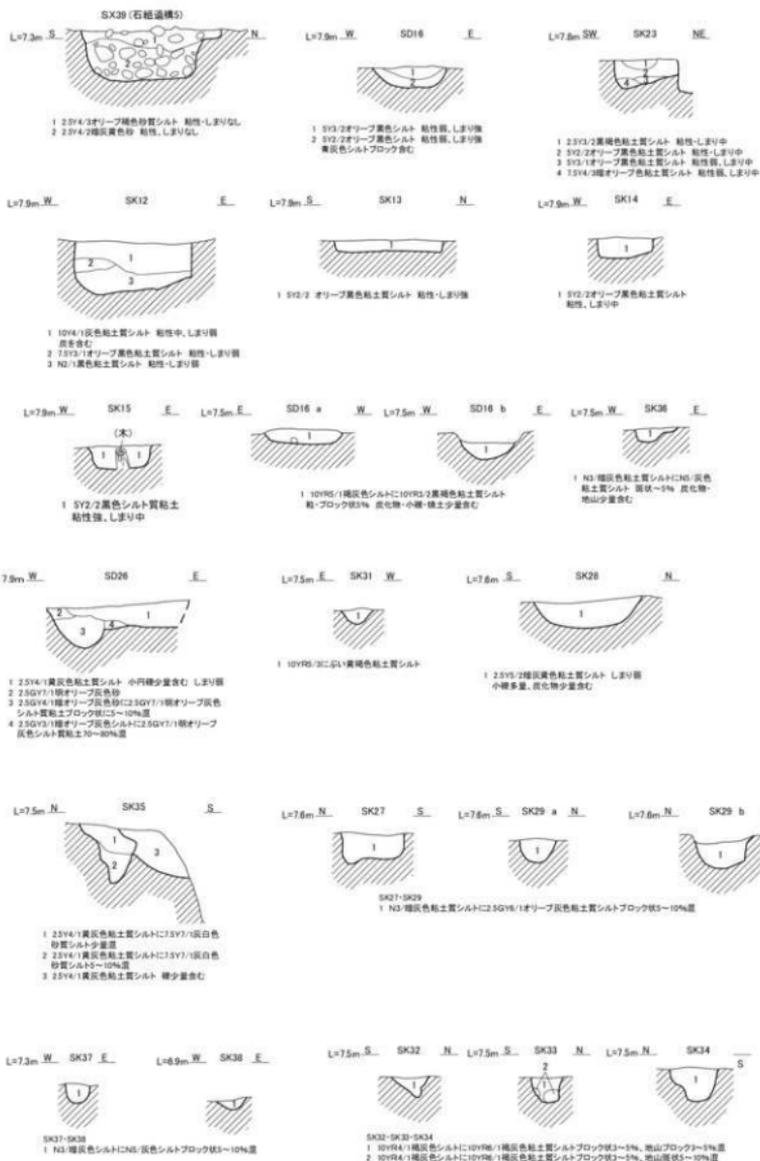
1 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトに2.5Y5/2黄褐色粘土質シルトが混入:10~20%混
 2 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトに2.5Y7/1灰白色シルト粘-ブロック状:2~3%混
 の微少な量混入
 3 3:融化物が多量に混
 4 2.5Y5/1黄灰色シルト 混入層を成す
 5 2.5Y4/1黄灰色粘砂に内壁が多量に塗られる



第16図 遺構断面図(1:20) SE20 SE22 SK30



第17図 下層遺構全体図 (1:100)



第18図 遺構断面図(1:40)



(2)遺物

遺物のほぼすべてが近代の石垣水路SD01および近世の富山城外堀SD04から出土した。ここでは近世富山城外堀SD04出土遺物を中心に述べる。出土遺物は、中近世土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃、中国製陶磁器、越中瀬戸、唐津・伊万里等肥前系陶磁器、土製品、木製品、金属製品、石製品・石造物・石垣石材などがある。主要な土器陶磁器及び木製品、石造物と石垣石材を中心に、特徴的なものについて述べ、詳細は観察表にまとめた。年代については、唐津・伊万里等肥前系陶磁器は大橋編年、越中瀬戸は宮田編年など、引用・参考文献に記載した編年から従った。富山城外堀が機能していた近世の主要な遺物の編年等については、「第V章第1節」でまとめた。

中近世土師器皿(第19図1～59)

中近世土師器皿は全て非口クロ成形である。

1～21は平底または平底と推定されるもので、体部は外反し、口縁端部を上方に積み上げる。口径は11～12cm前後(3～9・13)と9～10cm前後(10～12・14～21)が多いが、15cm前後のもの(1・2)も少量出土した。体部外面1段ナデで、体部下半から底部にかけてオサエが確認できるものが多い。1～6は口唇端部内面を強いナデにより窪ませながら上に積み上げる。21は口縁端部外面に面を取り、面の下には沈線が1条巡る。2・4・10～12・14の口縁部には、灯明皿として使用された痕跡である煤・油煙が付着する。既往の富山市の調査では、口縁端部を積み上げるものは、①端部外面にナデを施し面を取る、②口縁端部内面に凹みを持つ、③口縁が外反し端部をそのまま仕上げる、等で分類され、時期は16世紀後半から17世紀前半に比定される。

22～30・45～56は丸底または丸底と推定されるもので、体部がかかる外反するもの(22、25～27、50～53・56)と、直線またはやや内湾気味に立ち上がるもの(23・24、28～30、45～49、54・55)がある。口径は9cm前後と10～11cm前後のものに分かれる。口縁端部は、積み上げるか内面内側上方に面をとるもの(22、26～28、46・47、49～56)と、そのまま丸く仕上げるもの(23～25、29・30、45、48)がある。49の口縁端部外面のナデの下には幅広い沈線が1条巡る。23、45、47～49の口縁部に油煙が付着する。

31～44は平底または平底と推定されるもので、体部は直線的またはやや内湾気味に立ち上がる。口径9～12cmを測る。底部と体部の境が明瞭なものが多い。31～37は口縁端部を上方に積み上げ、38～44はそのまま丸く仕上げる。56は口縁部が肥厚する。23、35・36、39、44の口縁部には油煙が、33の体部内外面には全体的に煤が付着する。

57～59は搬入品と考えられる。57は浅く、やや外反する体部で、口唇部は揃って薄く仕上げる。焼成が甘く、胎土に砂を非常に多く含む。58・59は平底で、底部・体部の境に明瞭な境を持ち、体部が直線的に立ち上がる。58の口縁は外反し、端部は内面に面を取り上方に積み上げる。体部外面半ばに幅広い沈線を1条巡らす。同様のものが金沢城でも出土しており、加賀方面からの搬入品と考えられる。時期は17世紀初頭である。59の口縁はそのまま薄く仕上げる。胎土に粗砂を多く含む。57の口縁端部に油煙が付着する。

弥生土器(第20図60～62)

60・61は弥生土器または土師器の小型甕の口縁部である。62は弥生土器または土師器の大型甕の体部片である。黒斑部分であり、固く焼き締まる。内面をナデ、外面をケズリで調整する。

土師質土器(第20図63・64)

63・64は土師質土器である。火入れと思われる。口縁は内湾し、端部に向かって肥厚する。端部を面取りする。64は内外・口縁端部まで丁寧にミガキを施す。

珠洲(第20図65・66)

65・66は播鉢である。65は口径30.2cmを測る。口縁端部は方頭で、上方やや外側に面を取る。吉岡編年Ⅳ期で14世紀である。66は体部内面に1単位8目の卸目を放射状に、底部内面には重ねて横方向に卸目を施す。土器表面の剥離が激しく、二次被熱の影響と考える。

越前(第20図67～69)

67は壺である。肩部から口縁が直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外に返す。体部はロクロナデののちに内外とも板状工具でヨコナデを施し、全面に鉄釉を施す。肩部には自然釉が掛かり、底部付近は焼き膨れがみられる。16世紀である。68は無釉の甕で、口縁端部は水平に面取りする。16世紀前半のものである。69は鉢である。やや外反する体部で、端部を水平に面取りする。鉄釉を施す。

信楽(第20図70)

70は建水である。体部～口縁部は垂直に立ち上がり、ロク口の引き上げ痕が顕著である。端部はやや内傾して面取りされ、蓋付きであった可能性がある。鉄釉を施す。底部に糸切り痕を残す。

中国製陶磁器(第20図71～81)

71は白磁の皿である。口縁端部が外反する。72・73は青白磁の底部である。72は内面が無釉のため壺と考える。73は碗で、高台置付の露胎部が赤く発色する。

74～76は青磁である。74は皿である口縁端部が外反する。置付から高台内面が露胎するが、中央のみ釉が残る。75・76は香炉で、75は外面に彫刻のある三足をもち、口縁部を内に折り返す。体部外面は、2条の沈線を上中下の3か所に巡らす。上田編年で16世紀前半に比定される。

77～81は青花である。77は漳州窯に類例を求められる皿で、15世紀後半～16世紀後半に比定される。きわめて軽量で、焼成不良のため染付は緑色に発色する。78・79は景德鎮の皿である。78は内底面に十字花文(羯磨文)を描く。小野分類「Ⅶ類」(B1群)にあたり、15世紀後半～16世紀後半に比定できる。79は16世紀末～17世紀初頭に比定される。80・81は景德鎮の皿である。80の外底面に砂が大量に付着する。高台置付周辺は釉剥ぎされる。16世紀前半に比定できる。81は口縁部を強く折り返し、見込みに絵付けがされる。体部下半に丸みをもつ。体部外面に蟠龍文状の絵付けを施す。

瀬戸美濃(第21図82～第23図140)

大窯期(82～107)と連房式登窯(113～140)がある。

82～96は皿である。82～89は付け高台、90～96は削り出し高台である。釉は、82・83・85・86・89～93・95・96が灰釉、87は藁灰釉、88・94は鉄釉を施す。82は丸皿である。見込みに十六弁菊の印花を4つ重複するように施し、外底面を除く全面に釉を厚く施す。高台は高く、断面逆台形に成形する。釉の露胎部が赤く発色する。83は口縁がやや外反し、見込みに釉止めの段をもつ。見込みに印花、体部内面には放射状4方向に1単位6条の沈線を施す。見込み全面に釉を施す。84～88は内売皿である。見込みに十六弁菊の印花を施す。85は印花を施したのちに釉を掛け、見込みの釉を拭き取る。86は見込みに段をもち、印花と放射状4方向(残存2方向)3条の沈線を施す。87は見込みに沈線3条と、印花を施す。印花は不明瞭だが、かたばみの可能性が高い。口縁はやや外反する。釉を内面全体に施したのち、見込み部分を拭き取る。腰部に鉄釉による列点文を施す。89は丸皿で全面施釉である。高台が摩滅する。胎土が脆く、二次被熱と考えられる。90は内売皿である。89・90の外底面の高台内に輪ドチ痕がみられる。91は口縁端部が内湾する丸皿である。胎土は精緻で、外面底部を除き全面に釉を施す。削り出し高台であるが、高台内側の中心が著しくずれている。92は丸皿で、口縁は端部に向かっ

て薄く成形する。釉を施したのち、見込みの釉を蛇の目に削り取る。口縁部端部の欠けに煤が付着しており、灯明皿として転用された可能性がある。93は稜皿である。体の立ち上がりが明瞭で、口縁に向かって外反する。全面に釉を施す。95は菊花皿である。内面に花卉を削り出し、口縁端部に刻みを施し、外面は縦の沈線を施す。全面に釉を施す。95は菊花皿である。内面に花卉を削り出し、口縁端部に刻みを施し、外面は縦の沈線を施す。全面に釉を施す。外底面の高台内に目積痕がみられる。割れ口の一部に漆継痕が確認できる。96は丸皿である。見込み底部がやや下がり、高台はなく、ケズリで底部外面を窪ませるため、底部が極めて薄い。胎土は精緻である。口縁部外面から内面全面に釉を施す。内面見込み付近に目跡が残る。外面に墨書「〇文」「日」がみえる。皿の主な時期は大窯第Ⅱ段階で、96のみ大窯第Ⅳ段階～登窯Ⅰ段階のものである。

97・98は天目茶碗である。いずれも鉄釉を施す。大窯第Ⅰ段階から第Ⅱ段階のものである。99は口径6.8cmを測る小型の天目茶碗である。鉄釉を施す。猪口の可能性がある。

100～102は碗である。100・101は丸碗で、体部が口縁部に向かって直線的に延びる。100は灰釉を施し、削り出し輪高台をもつ。101は胎土が黒く、鉄釉が暗赤色に発色しており、二次被熱したためと考える。102は口縁がやや外反する。鉄釉を施す。103は小型の丸碗で、鉄釉を施す。仏飯器の可能性がある。

104は土瓶の素焼の蓋である。焼成不良で、全体に摩滅している。

105は燭台の脚部である。脚部内面中央を穿孔する。全面に鉄釉を掛け、脚部内面に自然釉が掛かる。

106は黄瀬戸の大皿である。口縁をくの字に強く外側に折り返し、底部を除く全面に黄瀬戸釉を施す。削り出し高台である。

107は細頸壺である。体部を輪積み・叩きで成形したのち頸部・口縁部をロクロ成型し、体部外面をヘラ削りあるいはナデで滑らかに整えている。頸径3.6cm、体部最大径21.1cmを測る。肩部に沈線2条・櫛書横線文を施し、体部内面に同心円当具痕を残す。内面下半は一面敲打痕のように荒れる。全面に灰釉を施す。大窯Ⅰ期の仏花瓶の形状と類似する。

108～111は壺である。108は頸部に太い沈線を施し、鉄釉を施す。109は鉄釉を施す。110は肩部に櫛書波状文を施す。灰釉を施す。111はほぼ直立する体部で口縁を面取りするもので、外面から内面口縁部に灰釉を施す。

112は織部と思われる。器壁が薄いことから、向付のような器と考えられる。輪積み・手捻りによる成形と思われる、肩部内面に接合痕が観察できる。工具や指で凹凸を加え、口縁部は摘み出して歪ませる。口縁部に鉄絵で、短歌の一部「てとや川の由□」を描き、長石釉を内面から外面肩部まで施す。内面は露胎している。

113～140は登窯期の瀬戸あるいは瀬戸の可能性が高い磁器を示す。新製焼で19世紀初頭以降である。高台内側に朱書を持つものが一定量含まれ、これまでの城下町の調査から、朱書は焼窯師の書き込みであり、持主の名前または住所を示すと考えられる。

113～119は皿である。113は青磁皿で、見込みと体部・高台の外面に青磁釉を掛け、高台内には染付し透明釉を施す。見込みには釉の上から色染付を施す。114・115は小皿で、胎土見込みにスタンプを押し、染付で浮き上がらせて透明釉を施す。焼継による補修痕があり、114の高台内側には「差手前」の朱書がみえる。115は口唇部のみ褐色に染め付けている。116は折れ縁の白磁皿で、体部内面に植物の意匠を彫る。117は口縁が大きく外反する腰折れの小皿で、体部内面に蕃葵の花のような意匠を彫り、染付で浮き上がらせ、透明釉を施す。118・119は皿の底部である。118は見込みに印判手の染付を施すもので、焼継痕があり、高台内側に「疋川角」の朱書がみえる。

120・121は蓋付き碗の蓋である。

122は小鉢と思われる。内外に染付を施す。高台は厚みがあり、端部で凹ませながら面をとる。

123は向付のような器形の可能性がある。見込みに染付、体部内面胎土に、貼付けまたは彫刻による編み込みのような造形がみられる。124は印判手の鉢である。

125～134は碗である。125～129は体部が丸く内湾する。125は焼継痕があり、高台内側に「府中や太郎力左江門」の朱書がある。126は色染付で、青と緑の放射文を施す。127は体部の内外と口縁の欠けに煤が付着しており、灯明皿に転用されたようである。128は内面に非常に傷が多い。129は内外に印判手の染付を施す。130～134は体部が直線的なものである。130・131は放射文を施す。130は焼継痕があり、内面口縁下と高台内側に朱書がみえる。内面は判読不能、高台内側は「ミ乃や」と読める。132は植物とトンボ、133はタンポボを描き、いずれも余白の多い意匠である。134は印判手で、高台が外に踏ん張る。印判の継ぎ目が目立ち、ツブレが多い粗製品である。

135は湯呑である。花にコウモリを描く。136は体部外面にケズリを入れ、高台は厚く削り出し、内傾する面をとる。青絵染付し透明釉をかけた上に色絵付けをするもので、意匠不明だが一部金彩もみられる。鍋島焼を模したものか。137・138は猪口である。植物の意匠を描く。138の口縁は外反し、端部を薄く整える。体部は八角形に成形される。139は小型の急須である。底部に墨書「伊 示右」がみえる。140は一輪挿しである。体部に梅の枝を描く。体部最大径7.4cmを測る。

越中瀬戸(第23図141～第26図237)

141～174は素焼皿である。ロク口成形で、底部に糸切り痕が残る。34点中17点(50%)と、口縁端部に油煙が付着するものが極めて多く、素焼皿の主な用途の一つは灯明皿である。また、いくつか規格が存在した可能性が高いことから、下記のとおりA類・B類に分類した。施釉皿の宮田編年と出土位置から、A類は17世紀初頭以降、B類は17世紀半ば以降を主な時期と考える。

A類(141～150)：体部が内湾し口縁がやや外反する器形である。口径は11～12cm前後を中心とするが、口径の大きいものと小さいものも少量存在する。また、器高が2.8～3cm前後と高いものが多い。141・142は口径15cm弱を測る大型品で、141は体部をロク口ケズリ調整する。143～148は口径11～12cm前後の中型品である。146は体部下半をロク口ケズリ調整する。糸切り痕が確認できず、ケズリ再調整の可能性がある。147は内面に墨で「△」を書く。150は小型品である。

B類(151～174)：体部から口縁にかけて緩く内湾するもの(151～174)と、直線的に外傾または緩やかに外反するもの(166～174)に大別できる。口縁端部を丸く収めるものが多いが、薄く仕上げるものも少量含まれる。大部分の口径は約8～9cm前後である(154～174)が、11cm前後を測るやや大型のもの(151～153)も含まれる。器高は2cm前後である。151は体部をへう削りて調整する。156は口縁内面側に2条の沈線状の窪みが、159は口縁端部外面に沈線状の窪みが巡る。162は底部外面に墨で「五」と書く。

175～210は施釉の皿である。ほとんどのものが口径10cm～12cmに納まるが、13cmを超える大型のもの(191)や7cm前後の小型のもの(203)もある。器高はほとんどのものが2cm前後で、高いもの(191・202)で約3cmである。体部に明瞭な稜を持つものが多く、口縁に向かって直線的に伸びるが、稜を持たず外反するもの(203)もある。釉は、175は緑釉、176～178・183・187・193～196は灰釉、182は薬灰釉、180・184・185・188・190・192・197・198・202・205・206は錆釉を、179・181・186・189・191・199～201・203・204・207～210は鉄釉を施す。確認できる高台は、付け高台(175～185)、削り出し高台(186～195)、高台をもたないもの(202・203)に大別できる。

175～185は見込みに十六弁菊の印花をもつ。176・177は底部を除く全面を、175～209は見込み・底部高台周辺を除いて施釉する。175、176は体部内面に1単位4本のケズリを放射状に5単位施す。

175～178は見込みに段を持つ。176は見込みに段を持つが、釉はガラス化しておらず、内面全体が施釉されている。183は高台内側に墨で「五」が書かれる。

187は口縁欠損部の一部に釉がかかっており、器形成時に口縁部が欠け、そのまま施釉・焼成したようである。186～190は印花をもたない。187は口縁の欠損部に煤が付着しており、灯明皿として転用されたと考える。

191～201は削り出し高台のものである。191～194は口縁が外反し、口縁端部を面取りする。194は高台内側に記号の墨書が確認できる。195・196は体部～口縁部にかけて緩く内湾する。197は口縁部が強く外反する。煤が付着しており、灯明皿として転用されたと考える。

202・203は底部に糸切り痕を残す皿で、外底面を除く全面に施釉する。202は体部から口縁部にかけてやや内湾する。203は体部が外反する。

204～210は内禿皿の口縁である。204～209は口縁部がやや外反する。210は口縁が直線的に開く。

211～213は向付である。いずれも鉄釉を施す。211は見込みに十六瓣菊の印花をもつもので、削り出し高台である。212は口縁が屈曲して外反し、S字状を呈する。213は体部をクロナデで凹凸をつけながら立ち上げ、口縁は強く外反させる。

214は茶碗である。口径8.7cm、器高8cmを測る。底部から体部が強く屈曲し、口縁に向かって直立して伸びる。口縁端部は丸く収める。高台・底部を除き、全面に鉄釉を施す。削り出し高台である。

215は小型の鉢である。体部外面全体にカキメを施し、口縁をややすぼめる。底部に糸切り痕を残す。錆釉を施す。

216は匱鉢である。体部に丸みを持ちながら直立し、筒状を呈する。底部を除く全面に錆釉を施す。

217は双耳壺に注口を付けたお歯黒壺である。注口部が欠損するが、ほぼ完形である。底部に糸切り痕を残す。底部を除く全面に鉄釉を施す。肩部に自然釉が掛かる。

218～220は広口壺である。218は錆釉を施す。内外に煤が付着する。219は口縁部がごく短く、体部は丸い。鉄釉を施す。220は口縁部が垂直に立ち上がる。鉄釉を施す。221は壺の底部と考えられる。底部を含む全面に鉄釉を施す。

222は建水である。口縁端部を除き、鉄釉を施す。

223は絵皿である。口縁は逆S字に屈曲し、端部は面取りする。削り出し高台である。見込みに3枚の葉が2重の線刻で描かれる。高台が安定していること、絵の天地方向を意識して内側に曲げていることから、歪みを意識して製作した可能性が高い。体部が歪んでいるため、見込みはやや楕円形を呈する。全体に鉄釉を施す。224は中皿である。削り出し高台で、鉄釉を施す。見込みに焼台痕を残す。

225～245は播鉢である。皿と同様、素焼または下地の釉の可能性のある薄い施釉のもの（225～227・230）と、鉄釉・錆釉を施す施釉の明瞭なものがある。

225～227・230は素焼または薄く錆釉を施した焼成の甘いものである。225～228は口縁部外側に折り返しによる凸状の口縁帯をもち、口縁部内面を窪ませる。口縁帯下部が外側に膨らむものから縮小するものまで確認できる。口縁形態に施釉されたものとの違いはなく、16世紀末～17世紀前半と考えられる。229・233～235は鉄釉、230・236～245は錆釉を施す。230は、体部内面に1目12条の節目を施す。233・234は口縁部をカエシ状に折り返した口縁帯をもち、折り返し部と端部に面を取る。234は口縁帯を掴み出すようにして小さな注口を付ける。235・236は口縁帯をもつが、端部に面取りをしないものである。237～239は口縁を折り返し、断面を三角形に整えるものである。240・241は口縁が内湾し、端部は折り返す。242は注口部の破片である。口縁を折り返さず、端部に面を取る。243は口縁を折り返さず、端部内側に面を取る。胎土から宮田分類の播鉢Bとしたが、越前の可能性もある。244は体部の立ち上がる角度が急である。見込みの節目は巴状に曲交または六角形に施した

のち、体部の卸目を中央下から8方向に入れ、さらに間に8方向入れている。底部に糸切り痕を残す。使用痕が顕著で、底部外面は摩滅して丸みを帯び、卸目も底部付近で摩滅し、ほとんど消えている。245は見込み中央から体部にかけて、放射状反時計回りに卸目を施す。底部は糸切りであるが、焼成以前にナデまたは摩滅によりほぼ消えている。

唐津(第27図246～第30図312)

器種は皿・向付・椀・中大皿・瓶(徳利)・鉢などがある。大部分が大橋編年のⅠ・Ⅱ期、16世紀末～17世紀初頭であり、Ⅲ期以降のものはほとんど出土していない。出土した皿に、胎土目積や砂目積の痕跡が確認できなかつたものもあるが、器形・釉薬で総合的に判断した。Ⅲ期以降のものは、京焼風唐津や、緑銅釉を施し、見込みに蛇の目軸刺ぎが確認できる波佐見等(298～312)が出土した。

246～258は丸皿である。体部が内湾しながら立ち上がる。口径14cm前後で器高約4cmの大型のもの(246～248)と、口径10cm前後で器高約3cmの小型のもの(251～257)が大半を占める。高台が残るものうち、256は削り込み高台、その他は全て削り出し高台である。246～250は土灰釉、251・252・255～257は灰釉、253・254・258は緑釉を施す。246は口縁端部を面取りし、高台は断面が長方形を呈する。246・247・250の見込みに砂目積痕が、247・250は高台にも砂目積痕がみられる。249は二次被熱による変色がみられ、全体に煤けている。250は見込みと高台内面にそれぞれ3か所の砂目積痕があり、高台置付に回転糸切り痕を残す。251は高台に胎土目積痕が付着している。

259～267は皿である。口縁部が外反する。口径は10～12cm前後にほとんどが納まるが、器高は2cm前後の浅いものと3cmを超えるもの(260・261、265～267)に2極化する。259・260・264は白釉、260・261・263は灰釉、265は長石釉を施す。260は見込みに胎土目積痕がみられる。262の高台内面に胎土目積痕が付着する。厚く掛けられた釉には貫入がみられる。263は体部内面に放射状の削りを入れるもので、瀬戸美濃や越中瀬戸の皿に同様の装飾がみられる。264は体部が直線的に開く小皿で、体部外面下半にハゲ目がみられる。高台に4か所の抉りがある。266の高台端部は摩滅している。

268・269は輪花皿である。いずれも口径約11cm、器高約3cmを測り、口縁を内側に揃えて輪花とする。削り出し高台である。268は藁灰釉を施した上に、口縁部のみ鉄釉を上掛けする。269の釉は藁灰釉を施し、口縁部のみ5Y4/3暗オリーブ～5Y3/1オリーブ黒色に発色する。

270～275は絵唐津の皿である。270～274はいずれも丸皿の器形で、口径14～15cm、器高4～4.5cmを測る。口縁部の四方を摘み、摘んだ部分と見込みに鉄絵を施し、長石釉を掛ける。共通する絵付けの内容と規格で作成されていることから、セット関係にあると考えられる。275は口縁部が強く外反し、端部に向かって薄く整える。体部外面下半は削り調整である。口縁内面に鉄絵による唐草紋を施したのち、長石釉を掛ける。大橋編年Ⅱ期、17世紀前半である。

276～286は向付である。276～285は口径10～11cm、器高4cm前後を測る。胎土が極めて粗く、藁灰釉を掛ける。口縁部は、276～278はやや外反、279～285はそのまま直立し、端部を丸く収める。279は高台内側に、砂目積みの砂と焼成時に下に置かれた器の胎土が融着している。いずれも大橋編年Ⅱ期、17世紀前半である。共通する規格で作成されたものであり、セット関係にあると考えられる。286は口縁端部を面取りし、外面を押さえながら内面から工具を当てて三角形に成形し、高台内外面を除く全面に2.5Y6/4にぶい黄色の釉を施す。見込みには目跡が残る。大橋編年Ⅲ期、17世紀後半以降である。

287～290は碗である。287は276～285の向付と胎土は共通しており、体部下半から高台以外の全面に藁灰釉を施す。やや焼成不良である。288～290は絵唐津の碗で、いずれも鉄絵に施した後に長石釉を掛ける。288は底部から体部が口縁部まで直立する半筒型の碗であり、体部側面から内面まで施釉する。

289は高台内側まで全面に施釉し、畳付のみ釉を剥ぎ取る。290は体部から口縁が内湾し、口縁は折り返して玉縁にする。3方向に○(円)の鉄絵を施したのち、高台周辺を除く全面に長石釉を掛ける。

291は壺である。朝鮮唐津の徳利の可能性ある。体部を輪積み・タタキで成型し、頸部・口縁部をロクロで成形する。体部表面はケズリとナデにより調整し、タタキ痕は体部下半にわずかに残るのみであるが、内面には同心円の当具痕が残る。口縁部は外側に肥厚する。口縁から体部中央にかけて、藁灰釉を施す。体部外面下部と底面は露胎する。

292・293は絵唐津の大皿である。292は鉄絵を施した後に長石釉を掛ける。図案は梅の枝か。293は灰釉を施したのちに、さらに上から灰釉で簡略な植物文の絵付けをしたものである。294・295は絵唐津の中皿である。294は口縁端部内外面にわずかに鉄絵が確認できる。295は294と同一規格と思われる底部である。見込みに胎土目積痕が残る。長石釉を施す。296は輪花の中皿である。土灰釉を掛ける。

297は器種不明で、底部外面を削りくぼめて高台とする。高台内側に墨書「三」がみえる。長石釉を施す。

298～305は大橋編年の第Ⅲ期、17世紀後半以降の唐津である。

298は波佐見の丸皿である。高台周辺を除く全面に銅緑釉を施し、見込み部分の釉を蛇の目に削り取る。釉を削り取った部分に砂目積痕がみられる。削り出し高台である。

299は急須の蓋である。ツマミ・穴は残存しない。銅緑釉を外側全面に施す。

300は徳利の底部である。残存部は無釉である。

301は香合で、口縁端部外側に蓋を載せる段を持つ。高台内側を除く全面に青磁釉を施し、口縁部と高台端部の釉を削り取る。釉は貫入が著しい。

302は小型の鉢である。体部はロクロナデの跡を強く残して直角に立ち上げ、口縁は端部を面取りしたのちツマミで波状口縁にする。底部はヘラケズリの跡を渦巻き状に残す。底部外面を除く全体に鉄釉を施す。口縁部全体を意識的に歪ませることで、真上からみた形状が梅花風になるよう成形した容器である。全体に調整の痕跡を強く残すことで装飾とする。

303は壺である。口縁端部はやや内傾して面を取る。上方体部内外面に灰釉を施すが、口縁端部は施釉しない。

304は大型の鉢で、口縁は折り返す。見込みに目跡を放射状に残す。

305は京焼風の碗である。筒状で、底部から体部が直立する。鉄・コバルトの二色の釉で絵付けしたのち、高台周辺を除く全面に長石釉を施す。

306・307・309・310は中・大皿である。306は口縁部が外側に屈曲し端部は丸く収める。灰釉を施す。

307は藁灰釉を施す。309は底部が大きく、無高台とみられる。口縁を内側に折り込み、玉縁状にする。灰釉を施す。310は口縁端部を垂直に面取りし、沈線を巡らす。体部外面上半から内面にかけて鉄釉を施す。

308は波佐見の輪花中皿である。内外に長石釉を施し、さらに見込みから口縁に銅緑釉を上掛けする。見込みは蛇の目に釉を削り取る。蛇の目の外側に隣接して砂目積痕が残る。

311は刷毛目皿である。内面全体に鉄釉を施した後に白釉で刷毛目文の絵付けを行う。見込みに砂目積痕が残る。体部外面はロクロケズリとロクロナデの境に沈線を巡らし、その下は露胎する。312は鉢である。体部はやや内傾する筒状を呈する。体部内外面に長石釉を施すが、口縁端部は露胎する。

肥前(第30図313～318)

313・314は丸皿である。いずれも口径14cm前後を測り、灰釉を施す。時期は大橋編年の第Ⅱ期、17世紀初頭である。315は徳利である。頸部径2.55cm、体部最大径10.4cmを測る。体部外面はヘラ状工具によるヨコナデ、頸部はロクロナデで調整される。底部には炭化したモミが大量に付着する。全面に緑釉を施す。大橋編年の第Ⅰ期、16世紀末～17世紀初頭である。316～318は染付の磁器である。

316は仏花瓶である。317は皿である。見込みに竹などの植物文を施す。高台中央に砂目積痕がみられる。318は碗である。高台は内湾する。18世紀のくらわんか碗と考えられる。

伊万里等肥前系陶磁器(第30図319～第32図357)

皿・碗を中心に大量に出土した。皿、碗の胎土と釉は、①Ⅱ期・Ⅲ期(17世紀前半・後半)の胎土が灰色か灰白色で釉は透明釉、②Ⅳ期の陶胎染付の時期の胎土は灰色か暗灰色で釉は灰色がかった厚手の透明釉、③Ⅴ期(18世紀末)以降の胎土は乳白色で透明釉を施すものに分かれ、今回出土したものはⅤ期以降のものが多い。全体に焼成は良好である。高台は削り出し高台である。台置付を除く全面に施釉される。18世紀以降に始まる焼継痕と朱書を持つものが一定量含まれている。

319～326は皿である。319・320・323・330・331は施釉後に底部の高台内側を蛇の目に削る、いわゆる蛇の目凹型高台を持つもので、肥前陶磁Ⅴ期前半期、18世紀末から19世紀前葉期と推定できる。外面に唐草文、内面に植物文を描くものが含まれる。319・323は高台がやや内傾する。319・320のケズリ部分には朱書がある。319は「か中町御けや二」、320は「疋川角」か。320は見込みに印判手の染付を施す。321は鉢形の碗である。体部に比べ高台が小さめで、全面に染付・施釉する。高台内側に「大明」の銘がみられる。大橋編年のⅢ期、17世紀後半に推定できる。322は腰高で径の小さい高台をもつ。324は高台端部がケズリにより波状を呈する。

327～329は輪花皿で、中皿(329)も含まれる。肥前陶磁Ⅴ期後半期、19世紀前葉から幕末の時期と推定できる。329は外面に曲線文、体部内面に竹を描く。

332～344は碗である。332はⅤ期で、内外面に草花文を施す。焼継痕と朱書きがみられる。333は蛇の目凹型高台を持ち、高台が高く削り出されたため、底部が極めて薄く仕上げられている。内面に丸文を描く。後出のいわゆる「くらわんか碗」で、18世紀後半と推定される。334は高台径が大きく、体部下半が張り、体部から口縁部に向かって直立する。17世紀末葉～18世紀前葉と推定される。体部外面に草木文が描かれる。

335～337は肥前陶磁Ⅲ期、17世紀後半に遡る可能性がある。残存率が悪いことと、呉須の滲みの為、意匠は不明である。340～342は体部が丸く内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま伸びるものと外反するものがある。高台はやや高く削り出され、置付が外方に向かって張り出す。時期は19世紀前葉から幕末と推定される。

345・346は小杯である。345の体部外面には草文が描かれ、高台内側には押印がみられる。

351は小型の鉢である。口縁部が受け口状になり、口縁端部は上方に面を取る。内外面に山水が呉須で描かれる。

その他の陶磁器(第32図358～第35図394)

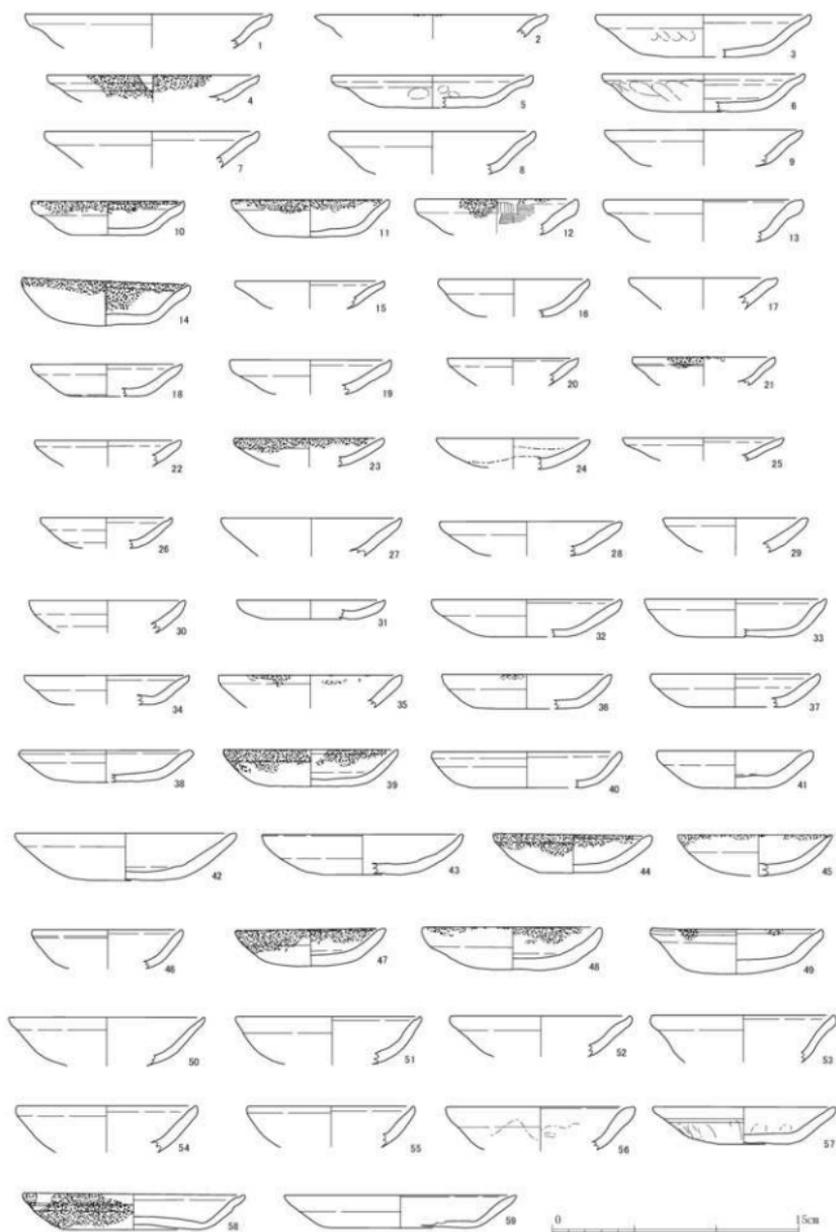
産地と時代が明瞭ではない土器・陶磁器のうち、特色のあるものを中心に記載した。近世・近代の瓦質火鉢、雪平鍋や播鉢、植木鉢などがある。

358は瓦器の火鉢である。体部が内湾気味に立ち上がり、底部外縁部に円錐逆台形型の足を貼り付ける。口縁部の叩打痕が著しい。近世である。360も口縁部の叩打痕が著しく、火鉢の一種と考えられる。体部外面に草文が描かれ、緑色の釉が施される。

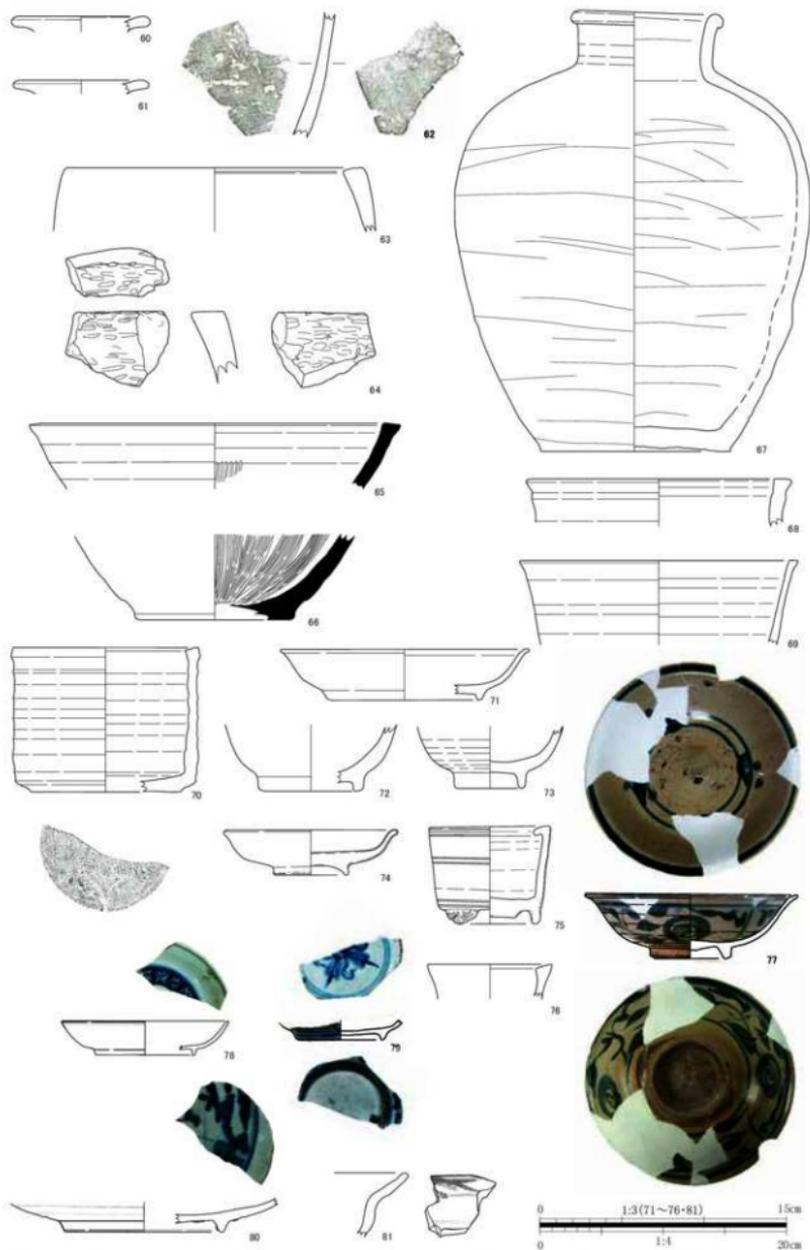
361～365は在地産の陶磁器と考えられる。361・363は越中丸山の可能性が高い皿と小型の碗である。

366～369は雪平鍋の蓋(366)と鍋(367～369)である。

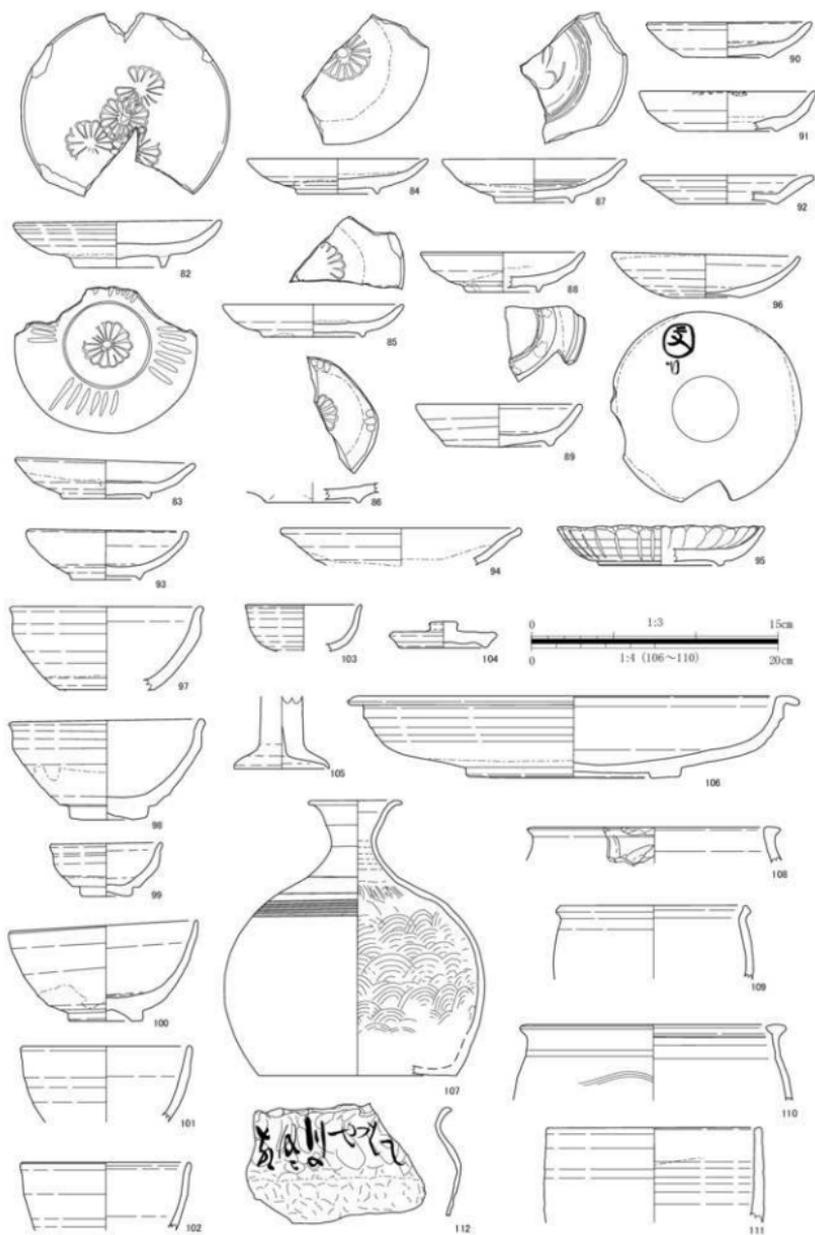
376～386は播鉢である。いずれも胎土が緻密で、内面全体に卸目を密に施している。鉄釉を施す。口縁部を折り返すものと肥厚するものとに分かれる。



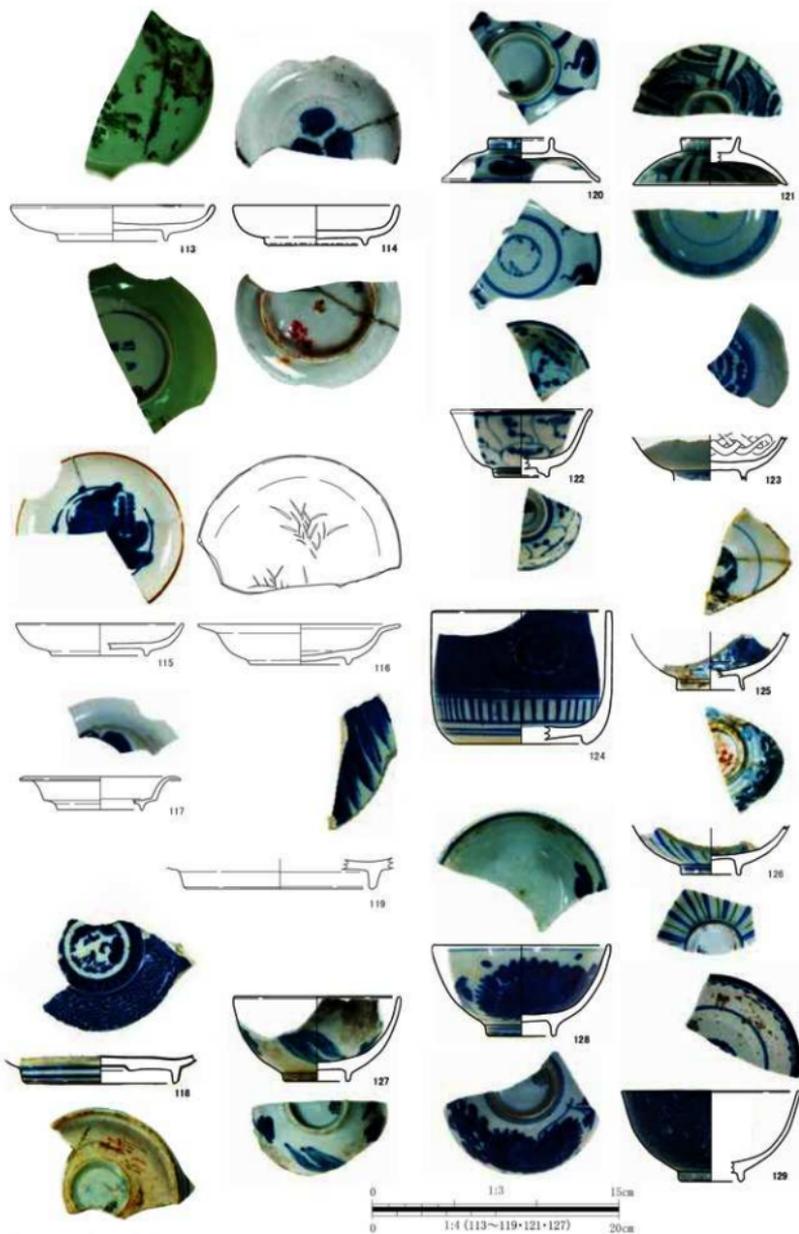
第19圖 中近世土器(1~59)



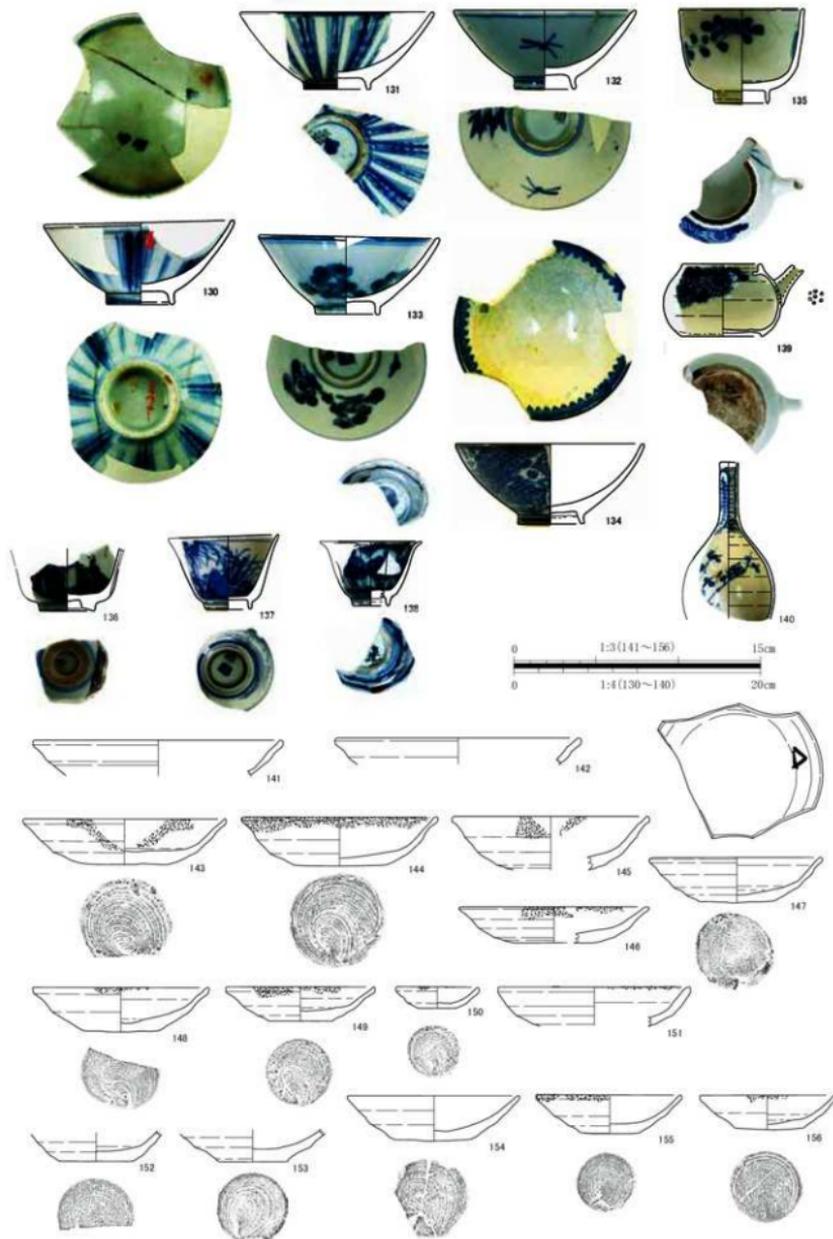
第20図 弥生土器(60~62)・土師質土器(63~64)・珠洲(65~66)・越前(67~69)・信楽(70)・中国製陶磁器(71~81)



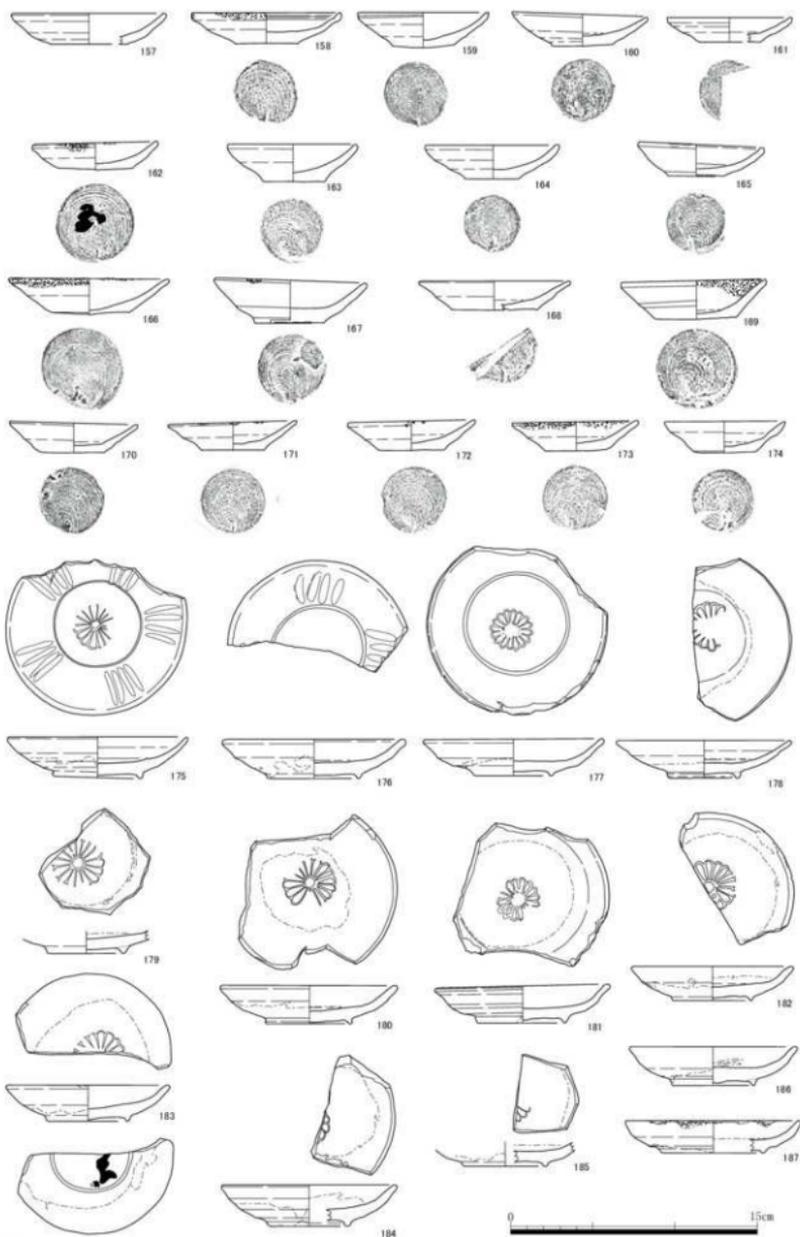
第21図 瀬戸美濃 (82~111)・織部 (112)



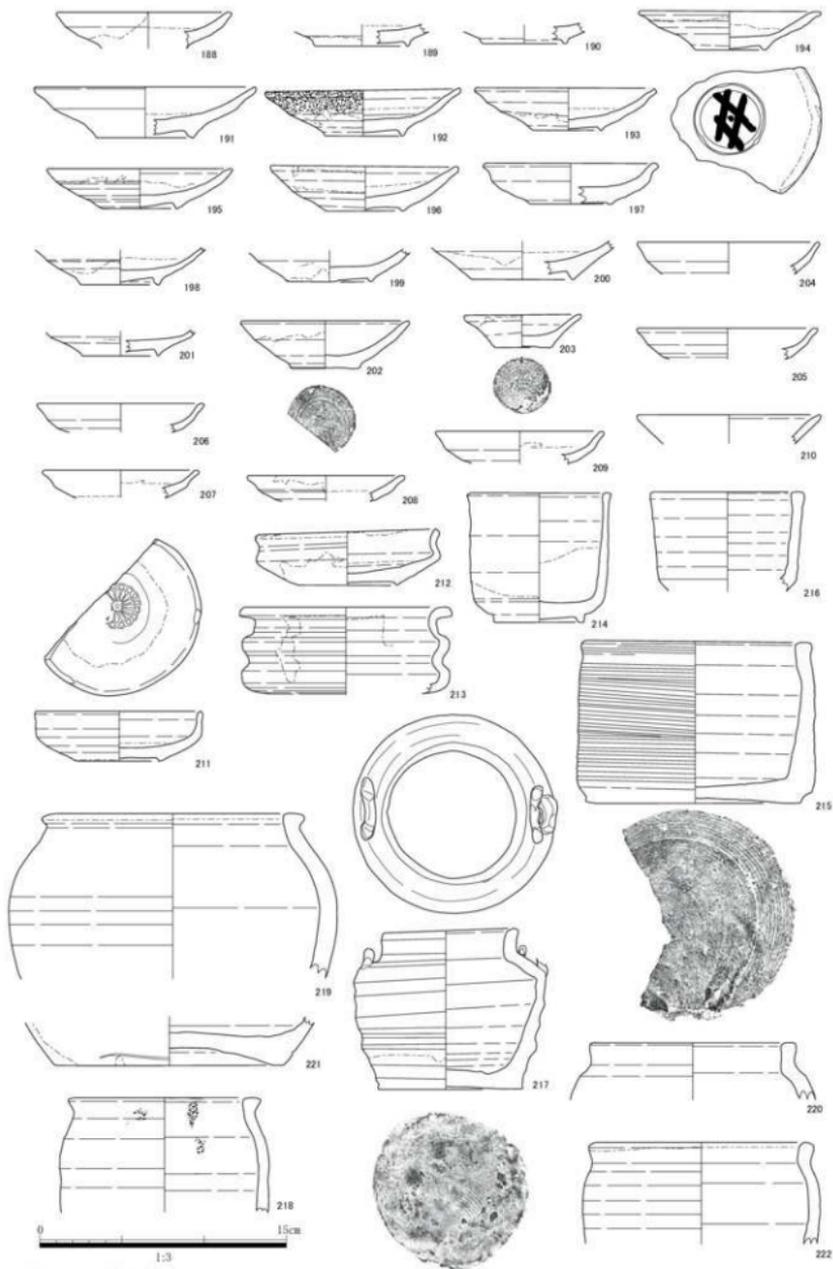
第22図 瀬戸美濃(磁器I)(113~129)



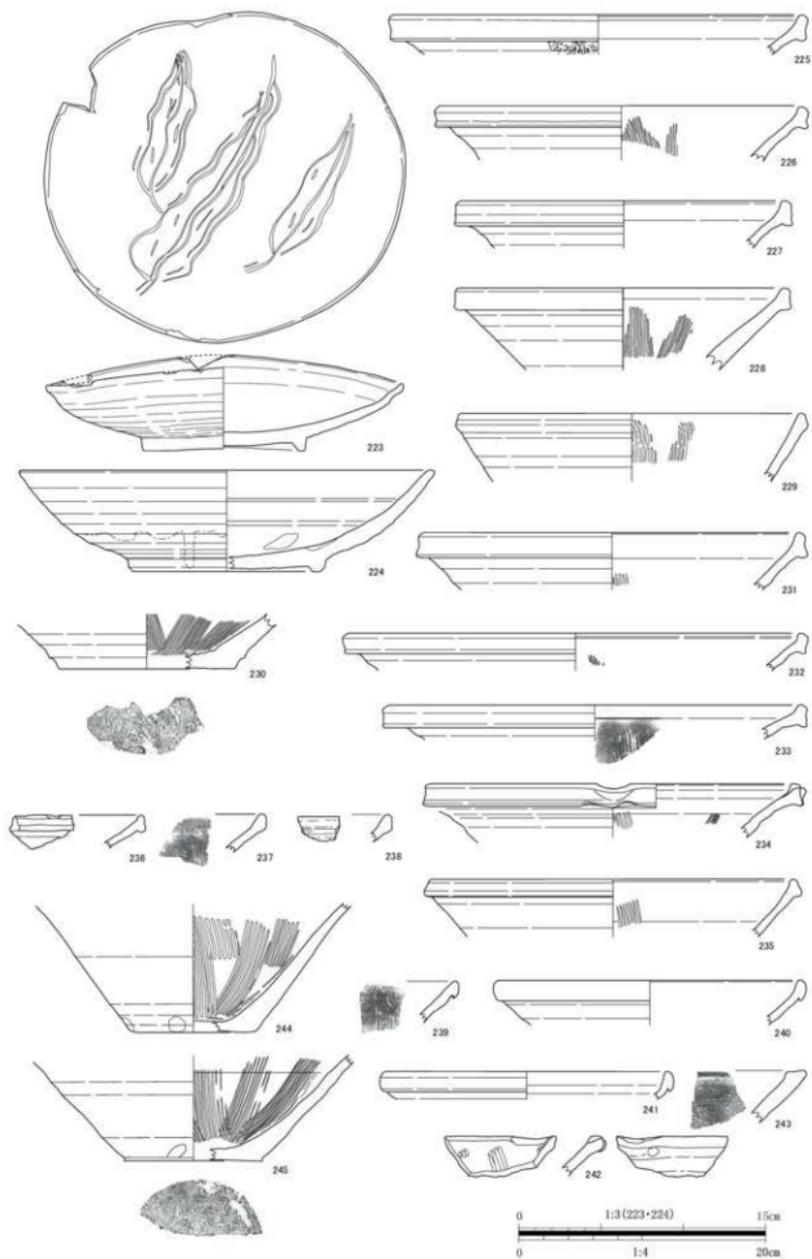
第23回瀬戸美濃(磁器2)(130~140)・越中瀬戸1(141~156)



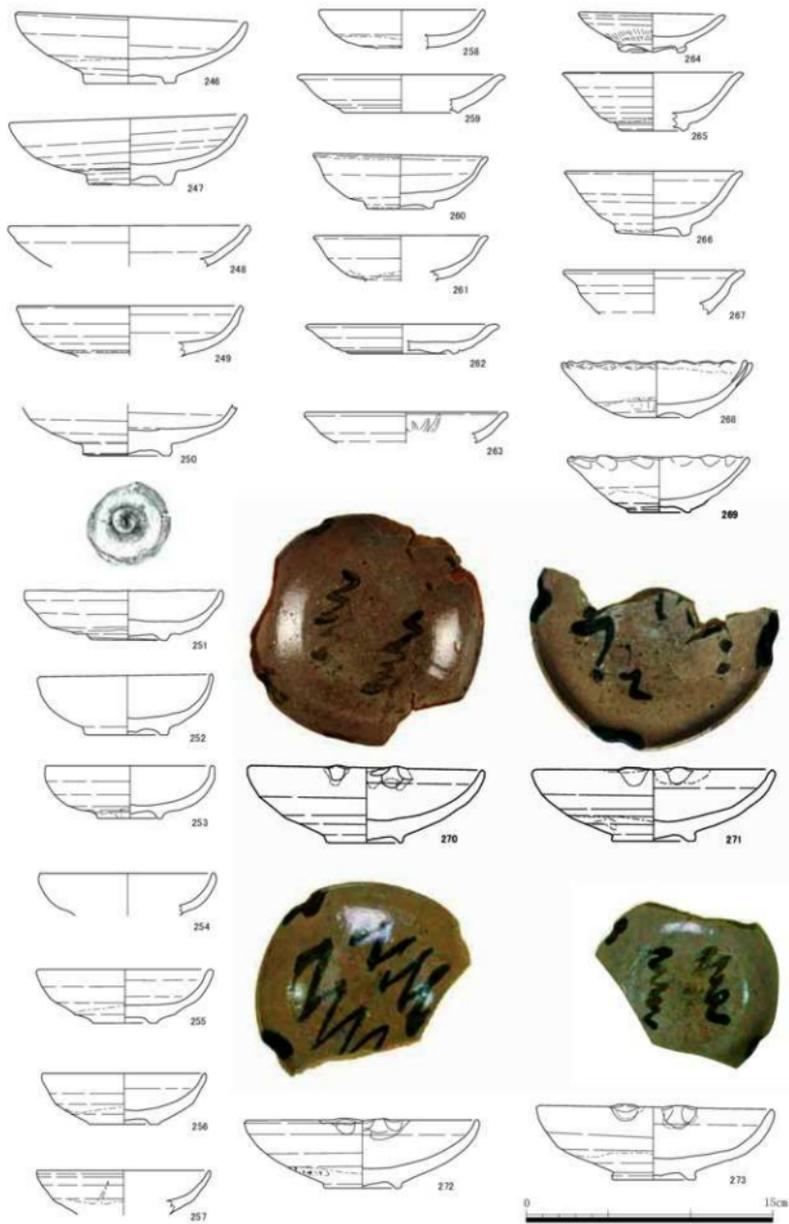
第24図 越中瀬戸2 (157~187)



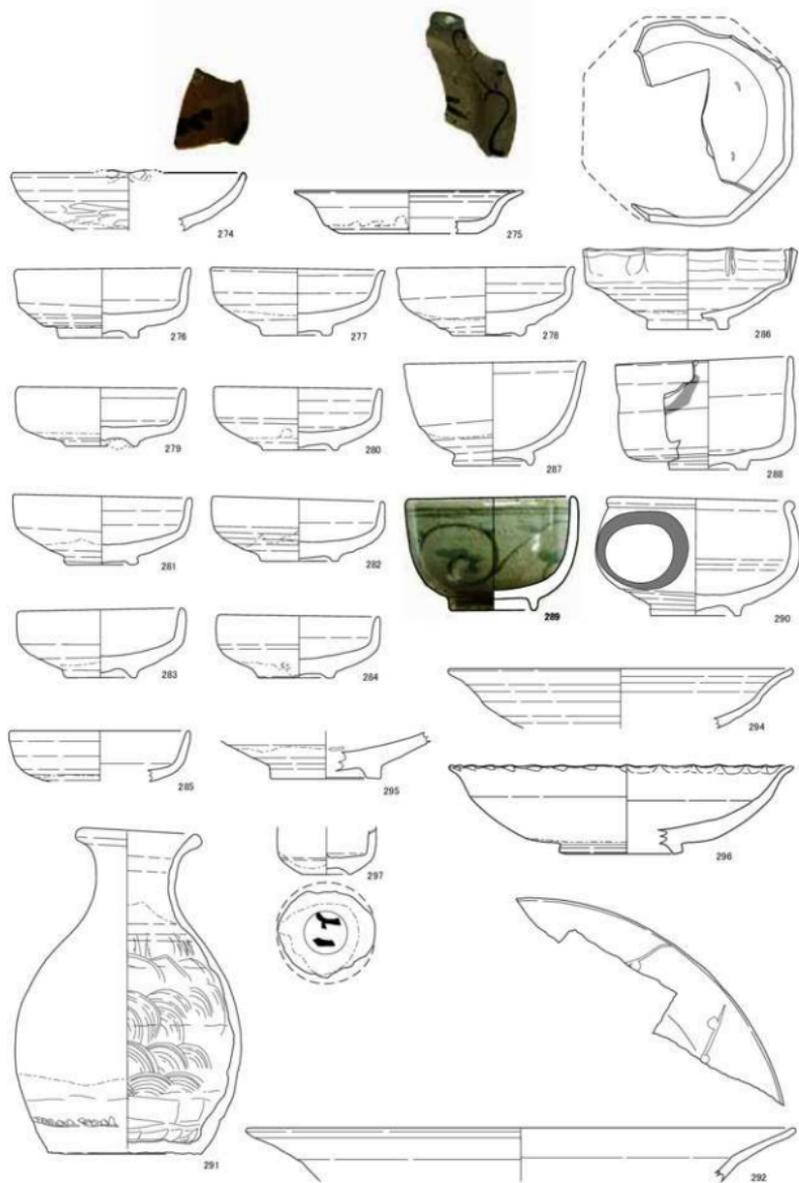
第25図 越中瀬戸3 (188~222)



第26図 越中瀬戸4 (223~245)

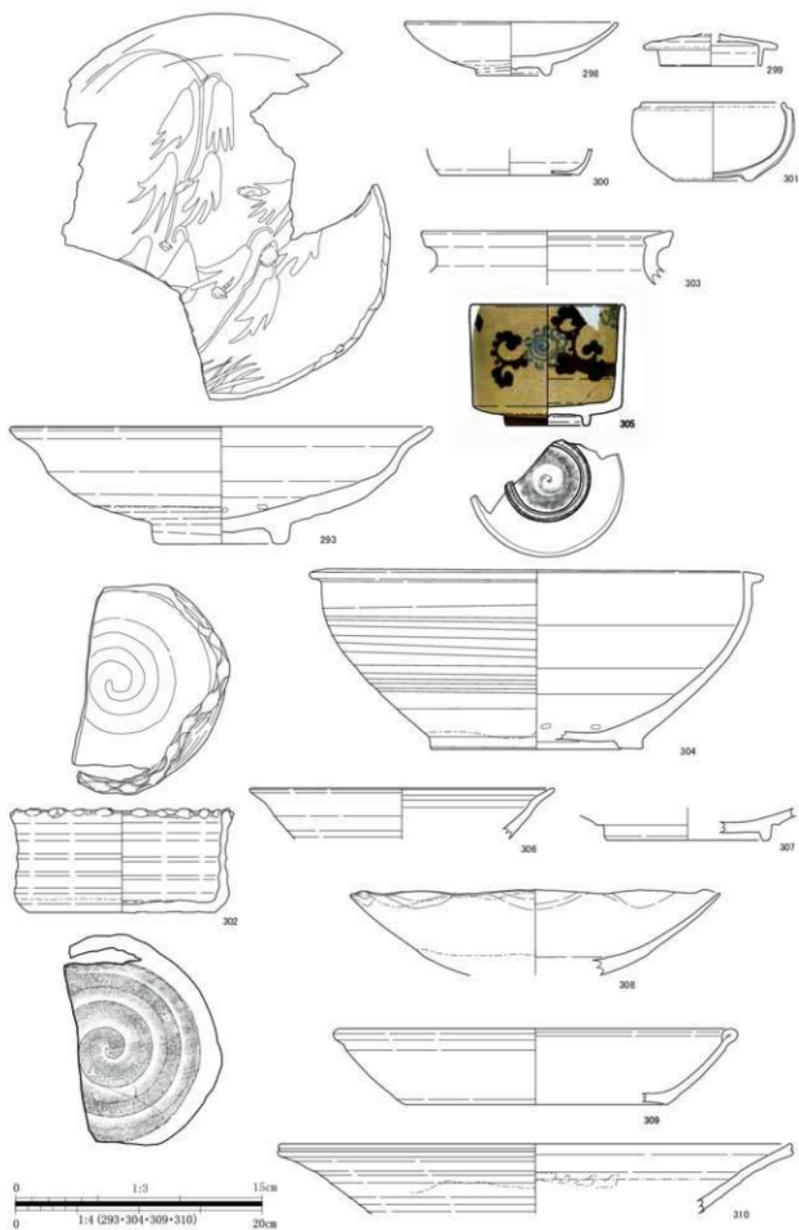


第27图 唐津1(246~273)

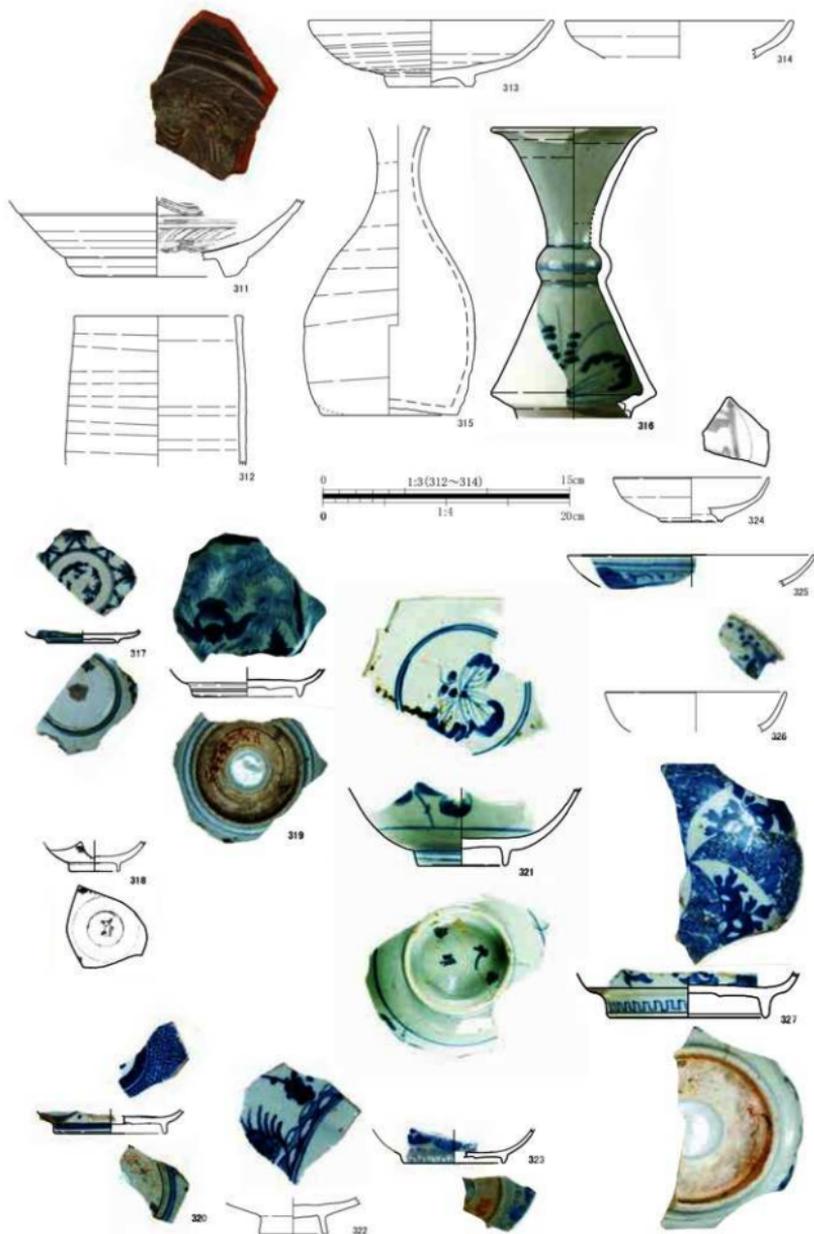


0 1:3 15cm
 0 1:4 (292-294~296) 20cm

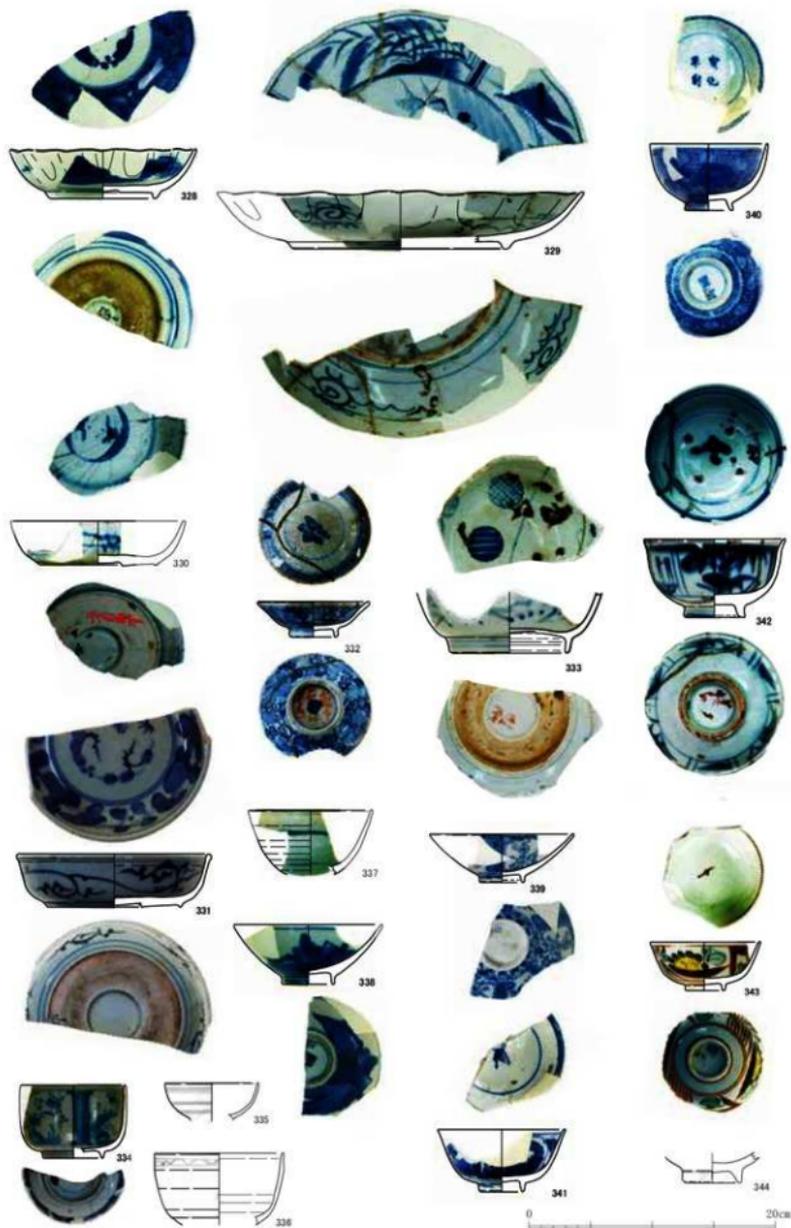
第28図 唐津2 (274~292・294~296)



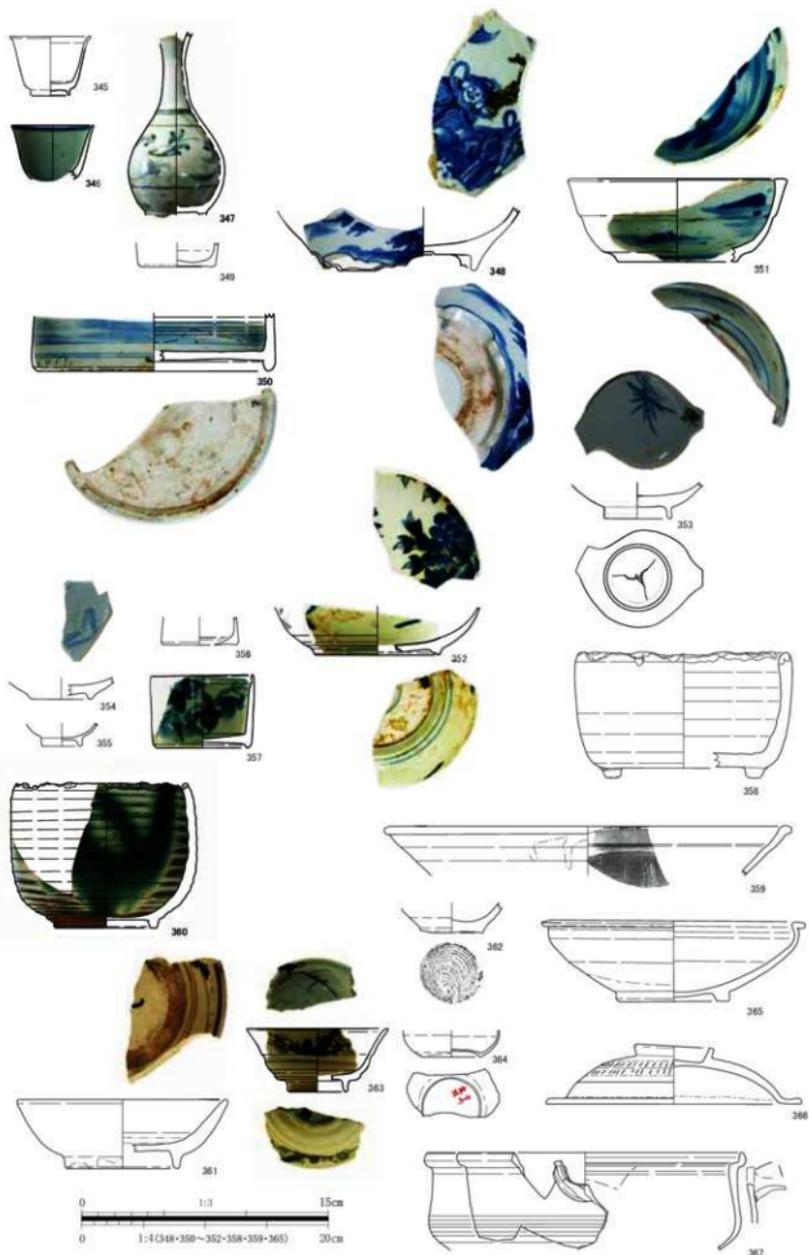
第29図 唐津3 (293・298～310)



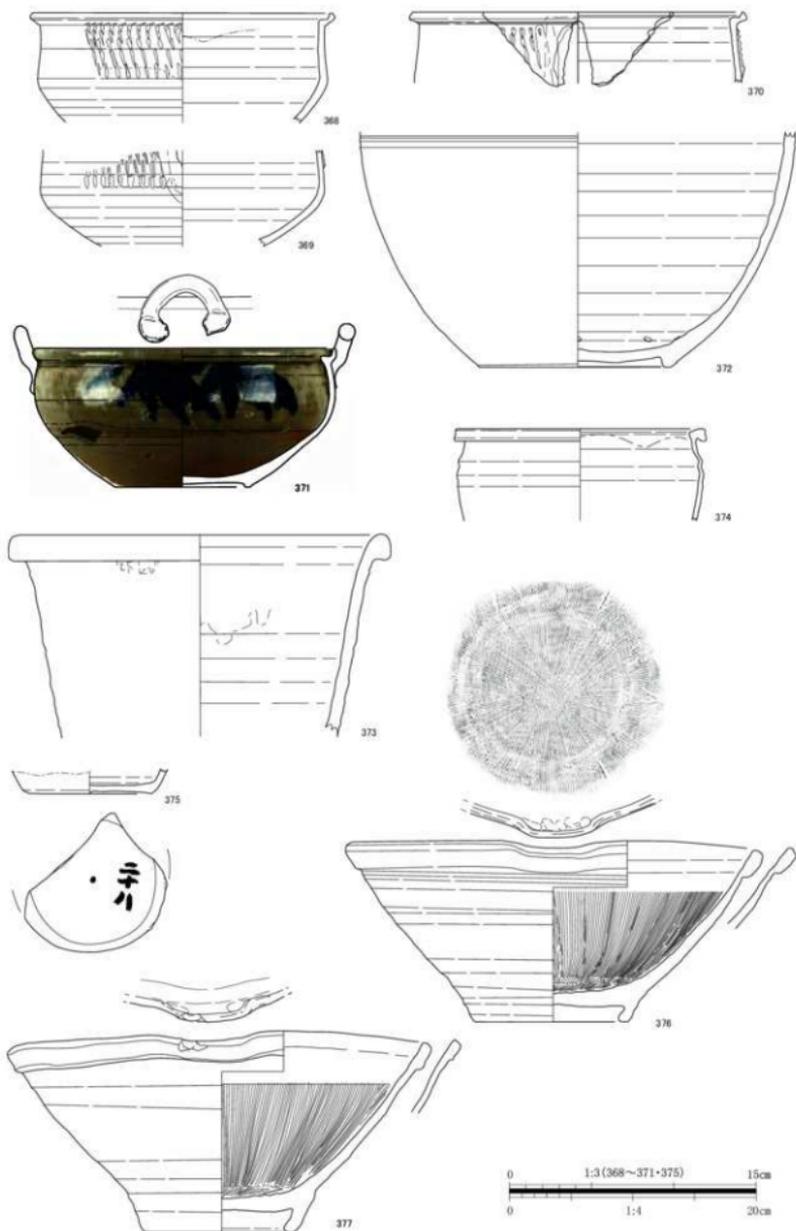
第30图 唐津4 (311·312) ·伊万里等肥前系陶磁器1 (313~327)



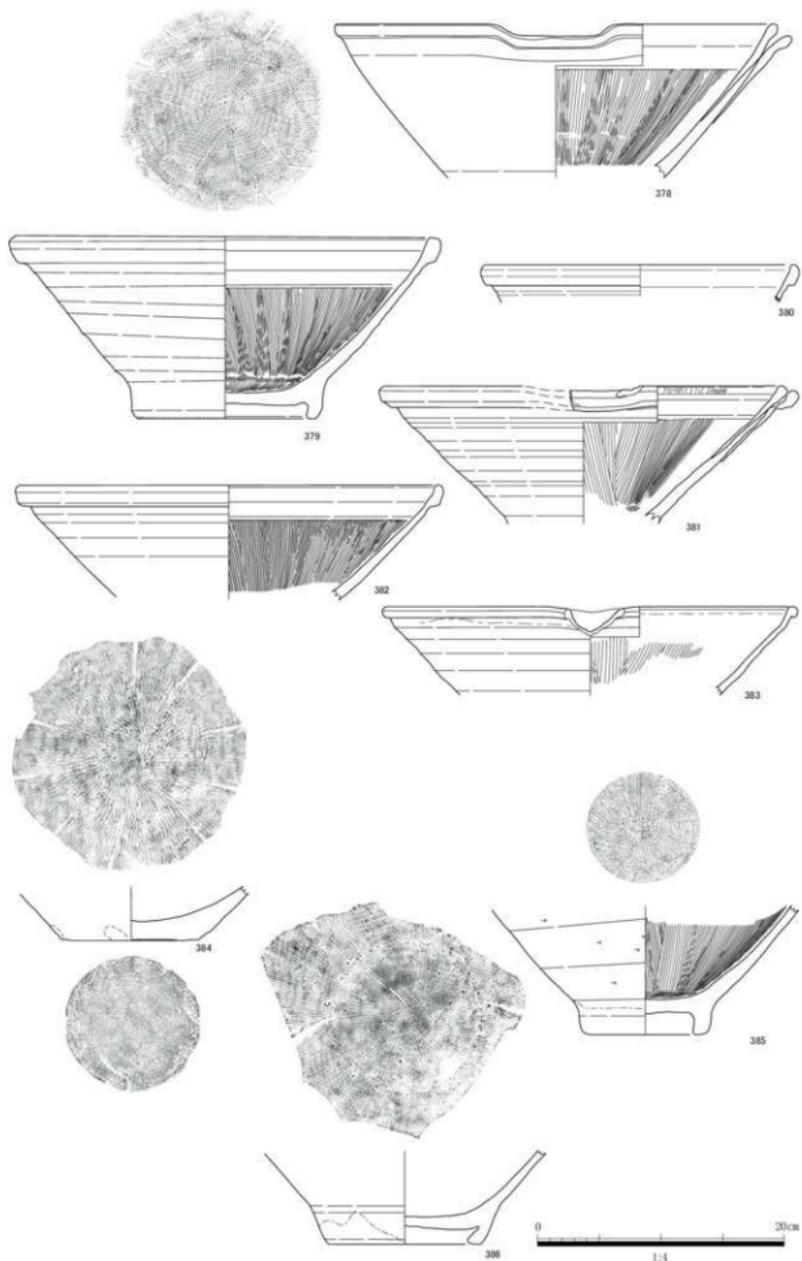
第31图 伊万里等備前系陶磁器2 (328~344)



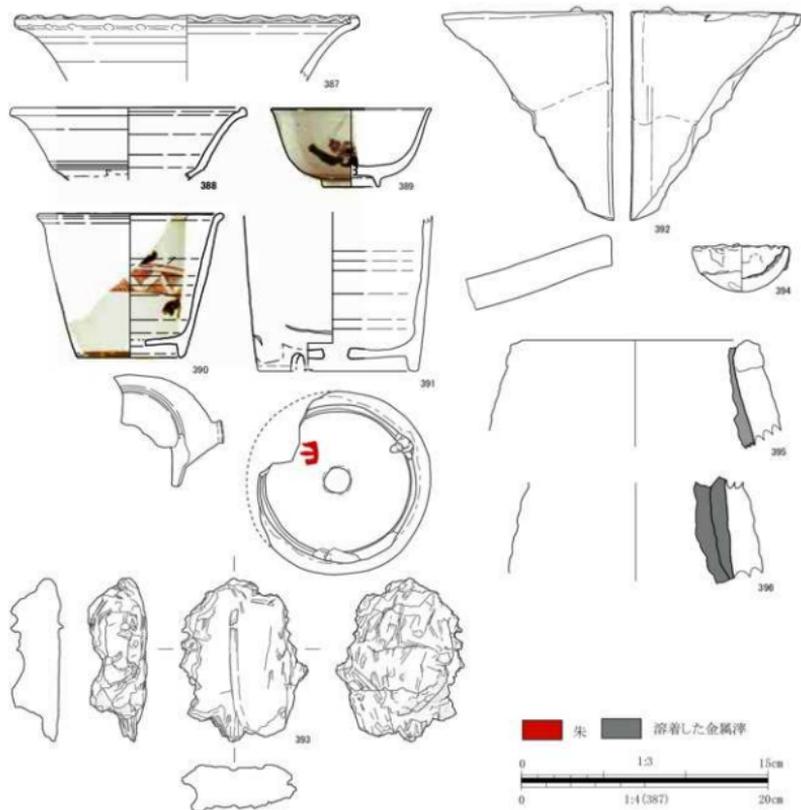
第32図 伊万里等肥前系陶磁器3 (345~357)・その他の陶磁器1 (358~367)



第33図 その他の陶磁器2 (368~377)



第34図 その他の陶磁器3 (378~386)



第35図 その他の陶磁器4 (387~391)・瓦(392)・土製品(393~396)

土製品(第35図)

393は磚である。

394~396は鍛冶関連遺物である。394は取鍋である。口径6.0cm、器高2.9cmを測る。底部を除き、鉛が溶着する。395・396は坩堝と考えられる。いずれも口縁部に紐状に胎土を継ぎ足し、器高を高くした痕跡が確認できる。内面に銅と鉄が溶着する。銅と鉄の合金は存在しなかったことや融解温度が異なることから、転用されたものと考えられる。394~396に溶着する金属については「第IV章第5節」に詳述する。

金属製品(第36図)

397・398は鶴亀燭台である。鶴と亀に分離する。浄土真宗大谷派を中心に、仏具である三身具の一つとして室町時代から現在まで連綿と使用されている。397は鶴で、頭頂部まで高さ22.0cm、胴部の前後幅9.35cm、左右幅5.0cmを測る。398は亀で、高さ6.3cm、前後幅13.0cm、左右幅7.5cmを測る。甲羅に鶴の足を差し込む2孔が確認できる。いずれも青銅製とみられる。鶴亀いずれも精緻な意匠が施されている。慶長期富山城外堀最下層埋土から出土しており、ほぼ同位置から出土した唐津の年代から、16世紀末から17世紀初頭のものとする。

399は鏡である。径10.9cm、厚さ0.9cmを測る。柄はもたない。中央に亀を象った鈕を配し、穿孔を施す。文様は上方に2羽の鶴を配し、中央の亀の周りには、六角形の3重格子内に菊花を持つ意匠を、

第3表 遺構一覧表

遺構No.	図版No.	位置	検出層位	大きさ(m)			遺物	時期	備考
				長軸	短軸	深さ			
SD 01	12・15	FG ～ NE	上層	37.30	75	66	珠洲・越中瀬戸・越中丸山・小杉橋・近代陶磁器・銅金・不明金属製品等	近代	石組水路 SD01>SD04
SX 02	7・9 11	B・C3	上層	625	185	37	近代陶磁器・土人形・麦包	近代	池状石組遺構(石組遺構2)
SX 03	7・10	J1	上層	116	97.5	43.5	埋桶	近代	埋桶式便桶。桶の周囲に石組(検出時1区)を配する。
SD 04	12 ～ 15	A～K 6 A～N 3～5 A～J 2 H～J 1	上層	6240	2000	400	弥生土器・土師質土器・中近世土師器・珠洲・中国製磁器・越前・信楽・瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津・肥前・伊万里・近代磁器・土製品(取鍋・埴輪等鉄器関連製品)・木製品(漆器等食器具・漆器関連製品・下駄・農具・曲物・円形板・結桶側板等)・金属製品(鶴亀陶台・銅鏡)、石製品(砥石・硯、石造物・石垣石材)	中世～ 近代	近世富山城外堀 SD04>SD11
SK 05	12・15	L6	上層	124	90	17	近代陶磁器	近代	廃棄土坑
SK 06	12・15	M6	上層	128	116	26	陶器	近代	
SK 07	12・15	L3M	上層	104	104	9	-	近代	
SK 08	12・15	M6	上層	212	188	25	-	近代	
SK 09	12・15	M6	上層	104	78	38	陶磁器・瓦・管	近代	廃棄土坑
SK 10	12・15	M6	上層	65	64	7	土師質土器・近代陶磁器	近代	
SD 11	12・15	K6	上層 下層	283	35	12	-	中近世	上層遺構検出時に捜乱下で検出。2区検出の間に連絡する可能性が高い。
SK 12	12・18	J6	上層	140	95	43	陶磁器	近代	廃棄土坑
SK 13	12・18	J6	上層	88	64	10	-	近代	
SK 14	12・18	J6	上層	50	54	17	-	近代	
SK 15	12・18	J6・7	上層	70	50	18	-	近代	
SD 16	12・18	L6	上層	323	61	18	-	近世以前	下層SD16の延長
SD 17	17・18	L6・7	下層	255	63	20	-	近世以前	上層SD16の延長
SX 17	7・8 11	IA 4・5	上層	450	280	39	近代陶磁器	近代	石組遺構1、トイレ状遺構(埋渠)及びその水樋か
SK 18	12・15	L6	上層	62	62	4	-	近代	
SK 19	12・15	L6	上層	56	38	7	-	近代	
SE 20	12・16	C4	下層	155	112	43	井戸側(結桶側板)×2組	近世	外堀西側最下層底面(VI層)で検出。井戸の下部構造。
SK 21	12・15	L7	上層	59	40	37	-	近代	
SE 22	12・16	D5	下層	55	53	53	曲物・唐津	近世	外堀西側最下層底面(VI層)で検出。井戸の下部構造。
SK 23	12・18	K6	上層	55	53	23	-	近代	
SX 24	7・9 11	B 2～5	上層	1730	430	70	-	近代	石組遺構4:道路状遺構。左右の石組に石垣石材5個を転用する。
SK 25	12・15	K6	上層	62	50	19	陶器	近世後期～	
SD 26	17・18	M3 ～ M6・7	下層	668	115	32	-	中世	捜乱下・東端で検出。北側2区に延びる。区画溝。
SK 27	17・18	K6	下層	40	51	25	-	近世以前	
SK 28	17・18	J7	下層	110	89	23	-	近世以前	
SK 29	17・18	J6	下層	52	47	20	-	近世以前	
SK 30	16・17	J6	下層	104	84	124	-	近世以前	底面～半ばまで小磯が充填する。
SK 31	17・18	-	下層	25	22	13	-	近世以前	
SK 32	17・18	K7	下層	30	30	16	中世土師器	中世	
SK 33	17・18	K6	下層	31	26	19	-	近世以前	
SK 34	17・18	K6	下層	40	33	29	-	近世以前	
SK 35	17・18	J6・7	下層	68	60	45	-	近世以前	
SK 36	17・18	L6	下層	35	35	10	-	近世以前	
SK 37	17・18	J6・7	下層	25	20	16	-	近世以前	
SK 38	17・18	L6	下層	25	24	8	-	近世以前	
SX 39	7・18	CD3	上層	923	83	45	-	近代	石組遺構5

第4表 土器陶磁器観察表

観測 No.	種別①	種別②	群種	法量(mm)			調査	胎土		胎		構成	調査
				口縁	底縁	高さ		粒度	色調	種類	色調		
1	中古土上層部	Ⅱ	13.00	—	0.13	ヨコナガ+ナゲ	※	2.5367/3	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
2	中古土上層部	Ⅱ	14.00	—	0.03	ヨコナガ	※	1.0317/3	黄褐色	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
3	中古土上層部	Ⅱ	13.00	—	2.00	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	2.0336/4	黄褐色	—	—	—	Ⅱ
4	中古土上層部	Ⅱ	12.00	—	1.70	ヨコナガ	※	1.3367/6	橙	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
5	中古土上層部	Ⅱ	12.00	—	2.00	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.3367/3	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
6	中古土上層部	Ⅱ	12.20	0.00	2.30	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	2.3367/2	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
7	中古土上層部	Ⅱ	12.00	—	0.30	ヨコナガ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ
8	中古土上層部	Ⅱ	12.10	—	0.60	ナゲ	※	3.0317/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
9	中古土上層部	Ⅱ	11.00	—	0.20	ヨコナガ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ
10	中古土上層部	Ⅱ	9.20	—	2.10	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	2.5337/2	黄白	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
11	中古土上層部	Ⅱ	9.70	—	2.25	ヨコナガ	※	1.2367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ 白緑帯・黄褐色片
12	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.20	ヨコナガ・短ナゲ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
13	中古土上層部	Ⅱ	12.00	—	0.00	ナゲ	※	3.0367/2	黄白	—	—	—	Ⅱ 二次焼成片
14	中古土上層部	Ⅱ	10.00	0.00	2.95	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
15	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.20	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
16	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.30	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
17	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	1.30	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ
18	中古土上層部	Ⅱ	9.00	3.00	2.00	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0336/1	黄白	—	—	—	Ⅱ
19	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.10	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ
20	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.20	ヨコナガ	※	3.0317/2	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
21	中古土上層部	Ⅱ	8.00	—	1.70	ヨコナガ	※	1.3367/2	黄褐色	—	—	—	Ⅱ 白緑帯赤・黄褐色 一部二次焼成焼片
22	中古土上層部	Ⅱ	8.00	—	0.00	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
23	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.20	ヨコナガ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
24	中古土上層部	Ⅱ	8.20	—	0.00	ヨコナガ	※	1.0317/3	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
25	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	0.00	ヨコナガ	※	1.0336/1	黄白	—	—	—	Ⅱ 輸入の可能性あり
26	中古土上層部	Ⅱ	8.00	—	0.00	ヨコナガ	※	1.2336/4	黄褐色	—	—	—	Ⅱ
27	中古土上層部	Ⅱ	10.00	—	0.30	ヨコナガ	※	1.0317/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
28	中古土上層部	Ⅱ	10.30	—	0.10	ヨコナガ+ナゲ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
29	中古土上層部	Ⅱ	8.00	—	0.10	ヨコナガ	※	1.0317/2	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ
30	中古土上層部	Ⅱ	8.00	—	0.00	ヨコナガ	※	1.3317/2	黄褐色	—	—	—	Ⅱ
31	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	1.20	ヨコナガ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
32	中古土上層部	Ⅱ	11.20	0.00	2.30	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.0336/3	黄褐色	—	—	—	Ⅱ
33	中古土上層部	Ⅱ	11.00	—	2.10	ヨコナガ	※	1.0317/3	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 二次焼成焼片
34	中古土上層部	Ⅱ	10.00	—	1.00	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
35	中古土上層部	Ⅱ	10.00	—	0.50	ヨコナガ	※	1.0317/4	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
36	中古土上層部	Ⅱ	10.20	—	0.10	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0317/3	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
37	中古土上層部	Ⅱ	10.10	—	0.00	ヨコナガ	※	1.0336/4 1.0317/2	紅白・橙 紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ
38	中古土上層部	Ⅱ	10.20	—	2.00	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ
39	中古土上層部	Ⅱ	10.00	—	2.30	ヨコナガ+ナゲ+オナユ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
40	中古土上層部	Ⅱ	11.30	—	2.20	ヨコナガ	※	3.0367/6	橙	—	—	—	Ⅱ
41	中古土上層部	Ⅱ	9.20	—	2.20	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0336/1	黄白	—	—	—	Ⅱ
42	中古土上層部	Ⅱ	13.00	0.00	2.00	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0317/3	紅白・黄灰	—	—	—	Ⅱ
43	中古土上層部	Ⅱ	12.20	—	2.20	ヨコナガ+ナゲ	※	3.0367/2	黄白	—	—	—	Ⅱ
44	中古土上層部	Ⅱ	9.00	—	2.10	ヨコナガ+ナゲ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
45	中古土上層部	Ⅱ	9.20	—	2.20	ヨコナガ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
46	中古土上層部	Ⅱ	9.10	—	0.00	ヨコナガ+ナゲ	※	1.2336/3	黄褐色	—	—	—	Ⅱ
47	中古土上層部	Ⅱ	9.00	0.00	2.25	ヨコナガ+ナゲ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ 厚付系・赤褐色片
48	中古土上層部	Ⅱ	10.00	—	2.00	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ 二次焼成焼片
49	中古土上層部	Ⅱ	10.25	—	2.75	ヨコナガ+ナゲ	※	1.0336/2	黄白	—	—	—	Ⅱ 赤褐色片
50	中古土上層部	Ⅱ	11.00	—	0.00	ヨコナガ	※	1.3367/4	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
51	中古土上層部	Ⅱ	10.30	—	0.30	ヨコナガ+ナゲ	※	3.0317/2	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ
52	中古土上層部	Ⅱ	11.00	—	0.30	ヨコナガ	※	1.3367/3	紅白・橙	—	—	—	Ⅱ

階層 No.	種別①	種別②	階層	法量(m)			調査	土工		地盤		構成	調査	
				自重	埋積	掘削		数量	色調	種類	色調			
106	陥中掘戸	掘	10.50	4.50	2.75	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
107	陥中掘戸	掘	9.10	4.00	1.10	ロソクナダ	中粒	10YR9/2	灰白	—	—	—	貫	底層本層
108	陥中掘戸	掘	6.50	3.00	1.00	ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
110	陥中掘戸	掘	11.70	—	0.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	調整地層
112	陥中掘戸	掘	—	4.00	0.00	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
113	陥中掘戸	掘	—	4.00	0.00	ロソクナダ	中粒	10YR8/1	灰白	—	—	—	貫	底層本層
114	陥中掘戸	掘	10.30	5.00	2.75	ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層
115	陥中掘戸	掘	9.70	3.20	2.50	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/4	黄褐色	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
116	陥中掘戸	掘	8.15	4.25	3.15	ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
117	陥中掘戸	掘	9.20	3.70	1.00	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層
118	陥中掘戸	掘	9.00	3.65	1.95	ロソクナダ	中粒	10YR7/2	紅土・黄	鉄屑	2.0YR5/1	紅土・黄	貫	日積層内側(設置)・埋積層の一部に鉄屑を含む状態の本層、調整地層
119	陥中掘戸	掘	7.00	3.00	2.15	ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	日積層内側(設置)
120	陥中掘戸	掘	8.10	3.75	3.10	ロソクナダ	粗	2.0YR7/6	黄	—	—	—	貫	底層本層
121	陥中掘戸	掘	7.50	3.70	1.60	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/2	黄褐色	—	—	—	貫	底層本層
122	陥中掘戸	掘	7.30	4.50	1.80	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	良好な底層(調整)層、底層本層、調整地層
123	陥中掘戸	掘	7.80	3.90	3.30	ロソクナダ	中粒	5YR8/6	黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
124	陥中掘戸	掘	8.00	3.30	2.10	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層
125	陥中掘戸	掘	7.00	4.15	3.15	ロソクナダ	粗	2.0YR6/4	紅土・黄	—	—	—	貫	泥層、底層本層、調整地層
126	陥中掘戸	掘	9.00	5.85	2.25	ロソクナダ	中粒	10YR8/4	黄褐色	—	—	鉄屑	貫	底層本層、調整地層
127	陥中掘戸	掘	9.05	4.05	2.00	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/4	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
128	陥中掘戸	掘	8.90	3.20	1.80	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/4	黄褐色	—	—	—	貫	底層本層
129	陥中掘戸	掘	8.80	4.00	2.15	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
130	陥中掘戸	掘	7.00	3.05	1.95	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層
131	陥中掘戸	掘	7.20	3.00	1.80	ロソクナダ	中粒	2.0YR7/2	紅土・黄	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
132	陥中掘戸	掘	7.50	4.00	1.80	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/2	灰白	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
133	陥中掘戸	掘	7.00	3.00	1.05	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/2	灰白	—	—	—	貫	底層本層、調整地層
134	陥中掘戸	掘	7.35	3.00	1.90	ロソクナダ	中粒	2.0YR8/2	黄褐色	—	—	—	貫	底層本層、内側(設置)・土上(調整)層(穴状)層、調整地層
135	陥中掘戸	掘	10.00	3.20	2.20	ロソクナダ・ロソクナダ	粗	10YR8/3	黄褐色	炭屑	2.0Y5/4	黄褐色	貫	見込みに浮石・埋石を含む調整層(浮石)・土上の調整層、浮石を含む
136	陥中掘戸	掘	10.00	3.30	2.50	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	炭屑	2.0Y7/2	黄褐色	貫	見込みに埋石・埋石を含む調整層(浮石)・土上の調整層、浮石を含む
137	陥中掘戸	掘	10.00	3.30	2.30	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/4	紅土・黄	白粉	2.0Y9/1	灰白	貫	見込みに浮石・埋石を含む調整層、浮石を含む
138	陥中掘戸	掘	10.00	4.30	3.35	ロソクナダ・ロソクナダ	粗	5YR8/6	黄	炭屑	5Y7/3	黄褐色	貫	浮石、浮石、埋石を含む、浮石と埋石を含む
139	陥中掘戸	掘	—	4.00	0.00	ナベ・ナダ	中粒	5YR8/6	黄	鉄屑	5YR2/1	赤褐色	貫	浮石、埋石、浮石を含む
140	陥中掘戸	掘	10.50	5.00	3.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR8/6	黄	鉄屑	5YR3/1	赤褐色	貫	浮石、浮石を含む
141	陥中掘戸	掘	10.70	5.10	3.50	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/6	黄	鉄屑	10B2/4	赤褐色	貫	見込みに浮石・埋石の一部に埋石・埋石を含む調整層
142	陥中掘戸	掘	9.00	4.70	3.10	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/8	黄	濃灰層	2.0Y9/2	灰褐色	貫	高層(調整)層・埋石を含む調整層、浮石を含む、埋石を含む調整層
143	陥中掘戸	掘	9.00	4.70	3.15	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/8	黄	鉄屑	2.0Y9/2	灰褐色	貫	浮石を含む、高層(調整)層(埋石)
144	陥中掘戸	掘	10.50	5.00	3.35	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/8	黄	鉄屑	5YR3/2	赤褐色	貫	浮石、浮石を含む
145	陥中掘戸	掘	—	5.00	0.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR7/1	紅土・黄	鉄屑	2.0YR3/1	暗赤褐色	貫	浮石、浮石を含む
146	陥中掘戸	掘	10.00	5.00	3.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/8	黄	鉄屑	2.0YR2/1	赤褐色	貫	浮石を含む、見込みに埋石
147	陥中掘戸	掘	10.50	5.00	3.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR7/4	黄褐色	炭屑	5YR2/2	赤褐色	貫	浮石を含む、埋石の重層(埋石を含む)で浮石を含む調整層
148	陥中掘戸	掘	11.00	0.00	2.25	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/6	黄	濃粉	5YR3/2	暗赤褐色	貫	浮石を含む
149	陥中掘戸	掘	—	5.00	0.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/8	黄	鉄屑	10B2/1	赤褐色	貫	浮石を含む
150	陥中掘戸	掘	—	5.00	0.20	ロソクナダ	中粒	5YR7/6	黄	鉄屑	2.0YR3/3	暗赤褐色	貫	浮石を含む
151	陥中掘戸	掘	13.20	5.00	3.15	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/6	黄	鉄屑	2.0YR2/1	赤褐色	貫	浮石(土層)を含む
152	陥中掘戸	掘	11.85	4.00	3.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR7/6	黄	鉄屑	5YR2/3	暗赤褐色	貫	浮石を含む、浮石(埋石)を含む(調整)層(調整)層
153	陥中掘戸	掘	9.00	4.70	2.25	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	10YR8/3	黄褐色	鉄屑	2.0Y7/2	灰褐色	貫	浮石(土層)を含む
154	陥中掘戸	掘	10.00	4.20	3.35	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR8/6	黄	鉄屑	3.0Y7/2	灰褐色	貫	高層(調整)層(埋石)を含む
155	陥中掘戸	掘	11.00	4.50	2.50	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR7/4	紅土・黄	鉄屑	3.0Y7/2	灰褐色	貫	浮石(土層)を含む、見込みに埋石、二次調整層
156	陥中掘戸	掘	11.20	4.50	2.00	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	2.0YR7/6-1	紅土・黄	鉄屑	2.0Y7/2	灰褐色	貫	浮石(土層)を含む
157	陥中掘戸	掘	10.00	5.00	3.00	ロソクナダ・ロソクナダ	粗	2.0YR8/8	黄褐色	鉄屑	2.0YR2/1	暗赤褐色	貫	浮石(土層)を含む、浮石(埋石)を含む
158	陥中掘戸	掘	—	4.00	0.20	ロソクナダ・ロソクナダ	中粒	5YR7/6	黄	鉄屑	5YR3/2	紅土・黄	貫	浮石(土層)を含む

種別 No.	種別①	種別②	種類	法量(m ³)			調製	施工		船		構成	調製			
				白濁	凝集	凝集		数量	色調	種類	色調					
199	船中戸	流	—	5.09	0.00	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	中色	5987/3	白濁+塩	鉄粉	2.9382/1	赤茶	具	管内詰、溝付、見込小埋込	
200	船中戸	流	—	6.26	0.33	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	1.9388/3	白濁+塩	鉄粉	2.9382/3	黒褐色	具	管内詰、溝付	
201	船中戸	流	—	6.60	0.60	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	中色	2.087/6	塩	鉄粉	2.9382/2	黒褐色	具	管内詰、溝付	
202	船中戸	流	18.18	4.00	2.95	ボタナゲ	中色	2.9382/9	塩	鉄粉	2.9384/4	白濁+塩	黒褐色	具	管内詰、溝付	
203	船中戸	流	7.10	3.25	2.03	ボタナゲ	中色	10383/1	赤黄緑	鉄粉	2.9382/2	黒褐色	具	底層赤茶		
204	船中戸	流	11.00	—	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	9382/4	塩	鉄粉	2.9384/2	赤茶	具	見込小に溝付、底層赤茶		
205	船中戸	流	18.00	—	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	2.9382/6	塩	鉄粉	2.9382/3	黒褐色	具	底層赤茶		
206	船中戸	流	18.00	—	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	2.9388/6	塩	鉄粉	1.018/6	黒	具	具		
207	船中戸	流	8.30	—	0.30	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	2.9386/6	塩	鉄粉	2.9382/1	赤茶	具	具		
208	船中戸	流	8.00	—	0.00	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	1.9382/6	塩	鉄粉	2.9382/1	黒褐色	具	具		
209	船中戸	流	18.18	—	0.00	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	5987/4	白濁+塩	鉄粉	9383/1	黒褐色	具	具		
210	船中戸	流	11.00	—	0.00	ボタナゲ	赤	2.087/4	白濁+塩	鉄粉	—	—	具	具		
211	船中戸	約付	18.00	4.00	3.05	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	2.9388/6	赤黄緑	鉄粉	9382/2	黒褐色	具	見込小に溝付、管内詰、溝付		
212	船中戸	約付	19.65	6.00	3.43	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	2.087/2	白濁+塩	炭粉	2.9374/4	黒褐色	具	管内詰		
213	船中戸	約付	11.00	—	0.30	ボタナゲ	赤	10382/4	白濁+黄緑	鉄粉	2.9382/3	黒褐色	具	具		
214	船中戸	赤褐色	8.20	02.00	2.35	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	9382/3	白濁+黄緑	鉄粉	2.9384/6	黒	具	見込小に白粉		
215	船中戸	黒緑	12.00	12.00	8.92	ボタナゲ	中色	2.088/3	赤黄緑	鉄粉	9382/2	黒褐色	具	体取金網に付、底層赤茶		
216	船中戸/小	不明	8.00	—	0.30	ボタナゲ	中色	1.9386/3	白濁+塩	鉄粉	—	—	具	具		
217	船中戸	赤黄緑	8.40	8.20	8.95	ボタナゲ	赤	10382/2	灰白	鉄粉	2.9384/6	黒	具	管内詰		
218	船中戸	流	11.00	—	0.20	ボタナゲ	中色	10383/1	赤黄緑	鉄粉	9382/2	黒褐色	具	管内詰付		
219	船中戸	灰白濁	14.00	—	0.20	ボタナゲ+ボタナゲ	中色	10382/3	赤黄緑	鉄粉	2.9382/3	黒	具	体取金網に付		
220	船中戸	灰白濁	12.20	—	0.30	ボタナゲ	黒	10382/2	灰白	鉄粉	2.9384/1	黒褐色	具	具		
221	船中戸	壁小	—	11.80	0.00	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	2.9387/4	白濁+塩	鉄粉	2.9382/2	黒褐色	具	へう岩底小		
222	船中戸	壁小	12.00	—	0.20	ボタナゲ	中色	2.9388/6	黄緑	鉄粉	2.9382/3	黒褐色	具	具		
223	船中戸/小	流	21.55	8.00	5.85	ボタナゲ+ボタナゲ	赤	2.9388/3	赤黄緑	鉄粉+白粉	9382/2	黒褐色	具	見込小に溝付、管内詰、溝付、白粉塗金網、管内詰、溝付		
224	船中戸	中流	23.00	11.00	8.20	ボタナゲ、ボタナゲ	中色	10382/3	赤黄緑	鉄粉	2.9382/3	黒	具	管内詰、溝付、見込小に白粉塗金網		
225	船中戸	緑粉	37.00	—	0.33	ボタナゲ	黒	2.9388/3	赤黄緑	—	—	—	具	管内詰付		
226	船中戸	緑粉	28.20	—	0.40	ボタナゲ	中色	10388/2	灰白	—	—	—	具	具		
227	船中戸	緑粉	28.00	—	0.90	ボタナゲ	黒	2.9388/2	灰白	—	—	—	具	具		
228	船中戸	緑粉	28.00	—	0.70	ボタナゲ	黒	10388/1	灰白	—	—	—	具	具		
229	船中戸	流	27.20	—	0.52	ボタナゲ	黒	10388/2	灰白	—	—	—	中色不具	具	具	
230	船中戸	緑粉	—	11.80	0.30	ボタナゲ	黒	10388/1	灰白	—	—	—	具	底層赤茶	具	具
231	船中戸	緑粉	38.00	—	0.70	ボタナゲ	黒	2.9388/2	赤黄緑	鉄粉	9382/3	白濁+塩	中色不具	具	具	
232	船中戸	緑粉	36.20	—	0.30	ボタナゲ	中色	10388/2	灰白	鉄粉	2.9382/2	黒褐色	具	具	具	
233	船中戸	緑粉	33.20	—	0.10	ボタナゲ	中色	10388/2	灰白	鉄粉	2.9384/2	黒褐色	具	具	具	
234	船中戸	緑粉	29.20	—	0.30	ボタナゲ	中色	10388/2	灰白	鉄粉	9381/1	黒褐色	具	具	具	
235	船中戸	緑粉	28.20	—	0.80	ボタナゲ	黒	2.9387/4	白濁+塩	鉄粉	9383/3	白濁+塩	具	具	具	
236	船中戸	緑粉	—	—	0.60	ボタナゲ	黒	2.9382/4	白濁+塩	鉄粉	9384/2	白濁+塩	具	具	具	
237	船中戸	緑粉	—	—	0.30	ボタナゲ	赤	2.9388/4	赤黄緑	鉄粉	2.9384/2	黒褐色	具	具	具	
238	船中戸	緑粉	—	—	0.33	ボタナゲ	黒	2.9387/4	白濁+塩	鉄粉	9385/6	赤茶	具	具	具	
239	船中戸	緑粉	—	—	0.40	ボタナゲ	黒	9388/2	赤黄	鉄粉	9384/2	白濁+塩	具	具	具	
240	船中戸	緑粉	24.20	—	0.43	ボタナゲ	黒	2.9387/6	塩	鉄粉	2.9384/9	黒	具	具	具	
241	船中戸	緑粉	28.00	—	0.20	ボタナゲ	中色	2.9388/4	赤黄緑	鉄粉	2.9382/2	黒褐色	具	具	具	
242	船中戸	緑粉	—	—	0.30	ボタナゲ	黒	10388/2	赤黄緑	鉄粉	9382/3	黒褐色	具	具	具	
243	船中戸	緑粉	—	—	0.20	ボタナゲ	黒	9388/4	赤黄	鉄粉	9385/4	白濁+塩	具	具	具	
244	船中戸	緑粉	—	—	0.42	ボタナゲ	黒	2.9388/3	赤黄緑	鉄粉	10383/3	黒褐色	具	具	具	
245	船中戸	緑粉	—	—	0.80	ボタナゲ	黒	2.9388/3	赤黄緑	鉄粉	9384/2	黒褐色	具	具	具	
246	溝渠	流	14.45	4.20	3.68	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	10382/1	灰白	土灰粉	2.9371/1	灰白	具	管内詰、溝付、見込小埋込		
247	溝渠	小流	14.20	4.00	4.20	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	10382/1	灰白	炭色粉	2.9371/1	灰白	具	管内詰、溝付、見込小埋込、白粉塗金網		
248	溝渠	流	14.45	—	0.30	ボタナゲ	赤	10382/1	灰白	黒心粉	2.9371/1	灰白	具	具	具	
249	溝渠	流	14.50	—	0.33	ボタナゲ、ボタナゲ	赤	2.9371/1	灰白	黒心粉	9381/1	灰	具	底層粉に土厚敷、管内詰付		

第5表 木製品観察表

図録 №	遺物 №(木)	出土 遺跡	分析 №	写真 図録	種類/部	法量 (cm)			内外面 の漆の色	観察
						長さ/ 口径	幅/ 厚	厚/高さ		
37	B-1	SD01	50	17	漆器類	—	6.30	0.250	内外黒	底面内面に赤色漆で貼付
37	B-2	SD01	82	17	漆器類	—	6.65	2.85	内外外黒	外面、底面高台内側に赤色漆で貼付
37	B-3	SD01	50	17	漆器類	12.60	5.20	6.20	内外黒色	内外面に赤色漆で貼付
37	B-4	SD01	47	17	漆器類	—	5.30	4.50	内赤外黒	高台穴縁
37	B-5	SD01	53	17	漆器類	11.50	11.50	(5.10)	内外外黒	高台縁、胴部に穿孔あり
37	B-6	SD01	13	17	漆器類	—	5.20	(14.60)	内外赤	黄土色漆地(周視赤色)に北の意匠を施す。
37	B-7	SD01	48	17	漆器類	—	—	4.10	内赤外黒	外面に赤色漆で装束、高台穴縁
37	B-8	SD01	58	17	漆器類	12.00	6.10	4.65	内外外黒	高台縁
37	B-9	SD01	46	17	漆器類	—	5.80	3.70	内外黒	内外面に赤色漆で貼付、高台穴縁
37	B-10	SD01	60	17	漆器類	—	8.00	(1.90)	内外黒	内外面に赤色漆で貼付、高台穴縁
37	B-11	SD01	25	17	漆器類	(10.80)	5.30	(4.10)	内外外黒	外面に赤漆(青色)、高台穴縁
37	B-12	SD01	21	17	漆器類	—	5.80	0.700	内外黒	内外面に赤色漆で貼付
37	B-13	SD01	31	17	漆器類	(11.40)	6.30	(5.60)	内外黒	外面に赤色漆で装束
37	B-14	SD01	42	17	漆器類	10.40	5.80	4.65	内外外黒	外面に赤色漆で装束、高台にキキメ
37	B-15	SD01	4	18	漆器類	11.80	6.60	5.90	内外黒	外面に赤色漆で貼付(匳文)
37	B-16	SD01	54	18	漆器類	10.60	5.70	4.35	内赤外黒	外面に赤漆、高台穴縁
37	B-17	SD01	14	18	漆器類	12.20	6.00	(5.10)	内外赤	高台内黒地に赤色漆で「●」あり、高台穴縁
37	B-18	SD01	6	18	漆器類	—	6.80	(14.00)	内外赤	高台内黒地に赤色で「草」(葉)
37	B-19	SD01	23	18	漆器類	—	6.10	(3.65)	内外黒	高台穴縁
37	B-20	SD01	—	18	漆器類	(3.50)	(6.30)	(6.30)	内外黒	外面に赤色漆で貼付(匳)
37	B-21	SD01	12	18	漆器類	—	6.60	(14.25)	内外黒	内赤黒瓦彩色
37	B-22	SD01	26	18	漆器類	—	4.95	(3.30)	内外外黒	高台穴縁
37	B-23	SD01	51	18	漆器類	11.90	—	6.20	内外外黒	外面に赤色漆で貼付
37	B-24	SD01	29	18	漆器類	(11.60)	5.65	(5.40)	内外外黒	赤み大い
37	B-25	SD01	30	18	漆器類	11.30	—	(4.85)	内外外黒	外面に赤色と金彩の家紋
37	B-26	SD01	41	18	漆器類	—	5.70	(14.90)	内外外黒	—
37	B-27	SD01	8	18	漆器類	10.80	10.10	7.00	内外外黒	—
37	B-28	SD01	7	18	漆器類	9.50	5.00	6.00	内外外黒	—
37	B-29	SD01	57	18	漆器類	—	6.20	(6.40)	内外外黒	底面含む外面に赤色漆で貼付(意匠不明)、高台縁
37	B-30	SD01	49	18	漆器類	—	5.80	(7.60)	内外外黒	高台にキキメ
38	B-31	SD01	28	18	漆器類	17.00	—	(5.30)	内外赤	高台穴縁
38	B-32	SD01	45	18	漆器類	15.80	6.80	8.75	内外黒	外面・高台内面に赤色漆で貼付(匳)
38	B-33	SD01	39	18	漆器類	—	6.70	(7.25)	内外外黒	赤色漆で外面に貼付、高台内「二」
38	B-34	SD01	44	19	漆器類	—	5.80	(7.90)	内外外黒	外面に赤色で貼付
38	B-35	SD01	38	19	漆器類	11~14	6.5~7	(9.95)	内外黒	赤み大く、法量不明、外面に赤色漆で貼付(同柄に施用)、高台にキキメ
38	B-36	SD01	35	19	漆器類	11.40	5.90	9.10	内外外黒	赤み大く、法量図上書き、外面に赤色漆で貼付
38	B-37	SD01	37	19	漆器類	—	6.35	(2.45)	内外赤	高台内黒地に赤色で「」または「一」
38	B-38	SD01	33	19	漆器類	—	6.15	(6.60)	内外赤	見込み一部欠化
38	B-39	SD01	18	19	漆器類	—	5.90	(5.90)	内外赤色	—
38	B-40	SD01	22	19	漆器類	—	5.80	(4.00)	内外赤	漆質剥離、い
38	B-41	SD01	34	19	漆器類	11.00	4.30	5.30	内外黒	高台内に穿孔
38	B-42	SD01	19	19	漆器類	11.10	5.20	5.10	内外黒	高台内に赤色で「人」または「丁」、胴部に漆を塗った意匠あり。
38	B-43	SD01	5	19	漆器類	12.00	6.00	4.90	内外黒	胴部に漆を塗って成形した装束あり。
38	B-44	SD01	24	19	漆器類	—	(5.00)	(4.00)	内外赤	内面に金彩
38	B-45	SD01	56	19	漆器類	10.70	5.25	2.90	内外赤	高台内に穿孔、蓋の可能性あり、写真図録は蓋着載。
38	B-46	SD01	43	19	漆器類	8.30	4.80	3.15	内外黒	内外面に赤色漆で貼付
38	B-47	SD01	20	19	漆器類	12.80	5.80	3.30	内外黒	内外面に金彩の貼付
38	B-48	SD01	17	19	漆器類	11.30	5.60	2.85	内外黒	高台内赤色で「サ」、蓋の可能性あり。
38	B-49	SD01	55	19	漆器類	8.95	3.90	2.30	内外外黒	外面に金彩小(黄色)にて植物的に模写
38	B-50	SD01	27	19	漆器類	—	4.80	(2.10)	内外外黒	外面に家紋(再給給機×3)、ツメ(内に貼付)(竹3)
38	B-51	SD01	16	19	漆器類	11.40	4.20	(2.95)	内外黒	外面に貼付(金彩含む赤色で、写真的にオウギタを模写)
38	B-52	SD01	40	19	漆器類	8.70	4.15	2.50	内外外黒	外面に貼付(薄黄を呈する、金彩の輪を施したもの)
38	B-53	SD01	9	19	漆器類	11.60	4.70	3.10	内外赤	腰に設け
38	B-54	SD01	11	19	漆器類	(13.40)	6.30	(1.95)	内外外黒	—
38	B-55	SD01	32	19	漆器類	13.60	6.30	0.250	内外外黒	—

図面 №	遺物 №(本)	出土 遺構	分析 №	写真 図番	種類・器種	法量(mm)			内外面 の色澤/ 平面形態	摘要
						長さ/ 口径	幅/ 底径	厚/高さ		
38	5-56	SD04	15	19	漆器蓋	13.60	6.30	2.40	内赤外黒	
38	5-57	SD04	133	18	ミニチュア甕	5.00	2.00	3.60		黒と赤色で彩色。穿孔あり、穴の周囲は炭化する。
38	5-58	SD04	36	19	漆木製物容器	(11.70)	10.60	(3.50)	内外黒	腰部に突起、胴部に凹溝。芯材を使用 角を削った方形の板状。胴にダボで銅板を接合した跡があり、裏に板状の 跡と固定痕がある。
39	5-59	SD04	1	19	漆製品什器類	28.70	(15.10)	0.70	内赤外黒	
39	5-60	SD04			漆製品什器類	27.30	(11.25)	1.30	黒	
39	5-61	SD04			漆製品什器類	30.60	31.85	2.10		3つのかげを接合して形成。底板をダボで固定していた跡あり。
39	5-62	SD04			漆製品什器類	(13.50)	(6.50)	0.70	外赤内黒	
39	5-63	SD04			漆製品什器類					
39	5-64	SD04	37	19	漆製品什器類	3.80	4.40	4.70	外赤内黒	隅丸方形の什器類の脚。上面3方に接合痕がある。
39	5-65	SD04	19	19	漆器蓋物	13.35	11.00	2.40	外側面黒	
39	5-66	SD04	144	19	漆製品容器皿 板	16.70	(14.70)	0.50	外側面黒	円形。縁に段。ダボによる固定跡あり。
39	5-67	SD04	3	20	しゃもじ	21.90	7.50	3.90	内外黒 底内面赤	
39	5-68	SD04			しゃもじ	19.90	(6.70)	0.70		
39	5-69	SD04	150	20	しゃもじ	19.45	6.45	0.60		
39	5-70	SD04	161	20	箸状木製品	16.45	0.65	0.65	円形	片側欠損。
39	5-71	SD04	165	20	片口箸	16.55	0.65	0.65	四角	端部欠損。
39	5-72	SD04	164	20	箸状木製品	19.65	0.50	0.50	中央四角 先端円形	両端欠損。
39	5-73	SD04	166	20	箸状木製品	13.85	0.95	0.95	隅丸方形	持ち手側欠損。
39	5-74	SD04	157	20	片口箸	16.00	0.60	0.60	円形	子ども用か。加工精緻。完形。
39	5-75	SD04	160	20	片口箸	16.30	0.55	0.55	四角	完形。
39	5-76	SD04	149	20	棒状木製品	15.50	0.50	0.50	四角	細い角材状。裏の裏面欠損。
39	5-77	SD04	162	20	箸状木製品	9.90	0.60	0.60	円形	断面円形。両端欠損。
39	5-78	SD04	173	20	箸状木製品	(9.60)	0.60	0.60	円形	持ち手欠損。
39	5-79	SD04	174	20	両口箸	16.20	0.65	0.65	円形	両端部、片側欠損。
39	5-80	SD04	158		片口箸	20.80	0.80	0.80	隅丸方形	先端片削あり。完形。
39	5-81	SD04	163	20	箸状木製品	22.80	0.60	0.60	円形	完形。
39	5-82	SD04	170	20	両口箸	(21.30)	0.75	0.75	四角	両端部、片側欠損。
39	5-83	SD04	171	20	棒状木製品	(18.45)	0.80	0.80	円形	曲がっている。
39	5-84	SD04	169	20	箸状木製品	24.15	0.65	0.65	円形	両端を細くする。断面隅丸方形。片側欠損。
39	5-85	SD04	168	20	箸状木製品	(19.80)	0.60	0.60	円形	両端欠損。
39	5-86	SD04	167	20	両口箸	27.15	0.75	0.75	円形	両端を細くする。完形。
39	5-87	SD04	159		両口箸	24.90	0.95	0.95	中央四角 先端円形	両端部、片側欠損。
39	5-88	SD04	172	20	片口箸	25.30	0.70	0.70	円形	片側部、完形。
39	5-89	SD04	155	20	ナイフ形木製品	(17.60)	2.35	0.70		
39	5-90	SD04	156	20	ナイフ形木製品	24.70	2.80	0.75		
39	5-91	SD04	66	20	自在鉤	16.45	6.85	1.40		片方形の枝あり。
39	5-92	SD04	76	20	下駄	23.30	9.60	5.65	長方形型	完形で使用痕ほとんどなし。
39	5-93	SD04	121	20	下駄	20.80	9.60	4.90	長方形型	
39	5-94	SD04	122	20	下駄	(22.60)	10.70	1.45	長方形型	使い慣れ、凹溝、表面はほぼ消失。おたけ部分が割れている。
39	5-95	SD04	75	21	下駄	(18.90)	9.80	2.70	長方形型	爪先を削削してある。
39	5-96	SD04	68	21	下駄	(18.90)	8.15	2.00	長方形型	表面下部が炭化する。
39	5-97	SD04	79	21	下駄	(26.50)	10.10	2.65		
39	5-98	SD04	73	21	下駄	17.20	9.30	2.80		
39	5-99	SD04	70	21	下駄	16.55	7.40	1.55		
39	5-100	SD04	71	21	下駄	17.25	7.50	2.80		
39	5-101	SD04	77	21	下駄	16.50	8.20	1.50		使い慣れ、凹溝、表面はほぼ消失する。
40	5-102	SD04	76	21	下駄	14.85	7.40	2.20		左側片削のみ。裏の裏面欠損。
40	5-103	SD04	125	21	げっぐ下駄	(13.25)	8.70	3.15		断面に黒色系漆を塗す。
40	5-104	SD04	69	21	げっぐ下駄	18.15	8.00	3.10		上部分の固定痕あり。
40	5-105	SD04	61	21	げっぐ下駄	14.30	7.60	2.50		

図面 №	遺物 №(木)	出土 遺構	分析 №	写真 図版	種類器種	法量(cm)			取巻の特徴	調査
						長さ/ 口徑	幅/ 底径	厚/高さ		
40	4-106	SD01	2	21	げっし下駄	18.80	8.60	4.65		側面に黒色漆塗を施す。上部の固定部、底の縁内に墨垂(残留不能)あり。
40	4-107	SD01	63	22	下駄	21.40	8.95	3.10		上部の7個固定する釘の高さを含めると厚さ3.5cm。側面に黒色漆塗を施し、土面に墨垂あり(残留不能)。
40	4-108	SD01	62	22	下駄	18.10	7.30	7.70		メシロ穴の上部のみ、固定の釘も残存する。
40	4-109	SD01	123	22	漆塗下駄	(14.90)	5.30	2.40		小型で細幅。
40	4-110	SD01	81	22	漆塗下駄	(11.75)	0.90	3.00		ホゾ穴2つ、ホゾに覆を入れて固定する。
40	4-111	SD01	67	22	漆塗下駄	(15.75)	10.65	6.80		長方形型、本体(15.75×7.8×2.8、後縁から後が削られている。
40	4-112	SD01	64	22	漆塗下駄	24.10	14.00	10.00		面は広くて高い。
40	4-113	SD01	80	22	漆塗下駄	21.50	7.85	3.30		本体のみ。
40	4-114	SD01	72	22	漆塗下駄	21.35	7.75	2.60		本体のみ。
40	4-115	SD01	65	22	漆塗下駄	22.50	7.80	3.50		前縁のホゾ部分残存する。
40	4-116	SD01	124	22	漆塗下駄	(15.55)	7.20	4.05		長方形型、裏はホゾツツのタイプである。
40	4-117	SD01	139	22	櫛状木製品	34.60	14.25	3.90		
40	4-118	SD01	143	22	櫛	31.80	14.15	3.05		表面に黒色漆塗。
41	4-119	SD01	132	23	曲物柄杓	7.20	5.90	4.40		柄なし。
41	4-120	SD01	130	23	曲物柄杓	11.65	11.30	7.50		柄なし。
41	4-121	SD01	131	23	曲物柄杓	14.90	11.00	8.70		柄なし、内側に2穴開のある角材を固定。
41	4-122	SD01	127	23	曲物	14.20	12.30	7.20		内側コ字型の部品を取り付ける。
41	4-123	SD01	129	23	曲物容器	16.65	15.95	6.90		
41	4-124	SD01	128	23	曲物側板	11.80	12.35	3.95		
41	4-125	SD01	141	23	曲物側板	24.00	24.00	5.10		126の蓋の可能性あり。天板(または底板)をダボで固定した跡あり。
41	4-126	SD01	142	23	曲物側板	27.70	22.70	16.65		
41	4-127	SD01	140	23	子縁の持ち手	4.50	48.80	1.05		
41	4-128	SD01			板材	23.90	4.10	0.75		指が抜けた穿孔あり。
41	4-129	SD01			栓	4.35	3.25	3.25		
41	4-130	SD01			栓	4.95	2.90	2.40		
41	4-131	SD01			栓	5.15	3.30	3.30		
41	4-132	SD01			栓	4.00	3.10	2.80		
41	4-133	SD01			栓	4.85	3.05	3.05		
41	4-134	SD01			栓	6.20	3.20	3.00		
41	4-135	SD01	154	23	栓	8.15	2.40	2.00		
41	4-136	SD01			栓	12.20	2.00	2.00		
41	4-137	SD01			栓か	3.70	3.50	3.50		コシカガボヤへのへりに類似、再利用か。
41	4-138	SD01	136	23	板(櫛?)程度	5.00	2.30	1.35		板または櫛の程度を推した。櫛に具にするための材料と考えられる。
41	4-139	SD01	151	23	小型有孔円形板	6.45	6.20	1.30		
41	4-140	SD01	148	23	小型有孔円形板	6.10	6.10	1.00		いびつな円形、中央に穿孔。
41	4-141	SD01	153	23	小型円形板	2.10	1.95	0.20		
41	4-142	SD01			小型円形板	6.30	6.80	0.50		
41	4-143	SD01	152		小型円形板	6.45	(3.25)	0.40		程度の細工あり。
41	4-144	SD01			小型円形板	6.55	6.70	0.70		貫通しない穴いづつあり。
41	4-145	SD01			小型円形板	8.90	8.90	0.50		片面に漆塗材のようなものが塗られている。
42	4-146	SD01			円形板	12.10	10.10	1.10		縁は有縁、中央に貫通しない穴、縁付近に穿孔。
42	4-147	SD01			円形板	11.50	12.10	1.40		
42	4-148	SD01			円形板	14.20	14.65	1.10		
42	4-149	SD01			円形板	14.50	(13.90)	1.00		
42	4-150	SD01			円形板	11.00	11.10	0.90		122遺物とほぼ同出。遺板の可能性あり。
42	4-151	SD01			円形板	14.10	14.60	1.00		中央で曲がる。
42	4-152	SD01			円形板	19.85	(13.80)	0.75		板の皮で細工板2ヶ所
42	4-153	SD01	120	24	円形板	17.30	17.00	0.90		板継ぎの細工痕あり
42	4-154	SD01			円形板	17.30	17.90	1.20		ダボで2枚を綴ぐ。

図版 №	遺物 №(本)	出土 遺構	分析 №	写真 図版	構造整理	法量(cm)			形跡の特徴	構築
						長さ/ 口徑	幅/ 厚径	厚/高さ		
42	8-155	SD04	147	24	銅蓋	16.20	16.00	2.10		蓋とし蓋外、下面焼き入れ加工か
42	8-156	SD04			円形板	16.95	12.30	1.30		裏に黒色？裏は表面炭化、ダゴで覆った板を纏めて
42	8-157	SD04	107	24	円形板	13.30	(11.70)	0.90		焼印:「夕」、割れ口にダゴによる継ぎあり
42	8-158	SD04	115	24	円形板	11.65	0.80	1.10		焼印:「人」の字状、割れ口にダゴによる継ぎあり
42	8-159	SD04	119	24	円形板	10.30	1.80	1.20		焼印:「道」に「二」を、「道」、「上」は、真円の一部分を取り除く
42	8-160	SD04	110	24	円形板	9.50	11.60	1.10		焼印:判読困難、割れ口にダゴによる継ぎあり
42	8-161	SD04			円形板	12.00	12.00	1.45		焼印あり
42	8-162	SD04	111	24	円形板	11.70	12.20	1.00		焼印「◎」
42	8-163	SD04			円形板	14.90	(12.90)	1.10		焼印:判読不能、割れ口にダゴによる継ぎあり
42	8-164	SD04	109	24	円形板	14.20	(9.20)	1.00		焼印「中田 義隆」
42	8-165	SD04	117	24	円形板	(5.50)	(16.35)	1.45		焼印:■、割れ口にダゴによる継ぎあり、裏面に木の皮付着か。
42	8-166	SD04	118	24	円形板	14.00	(11.20)	1.00		焼印:分銅に「輪曲輪 中村」
42	8-167	SD04	108	24	円形板	16.00	(6.80)	1.15		焼印:番に「本義隆」、ダゴによる接合痕あり。
42	8-168	SD04	113	24	円形板	17.50	(8.90)	1.00		焼印:分銅に「■」
42	8-169	SD04	112	24	円形板	(17.50)	(8.25)	1.05		焼印「大田 義隆」、割れ口にダゴによる継ぎあり
42	8-170	SD04	116	24	円形板	(19.20)	(15.15)	1.25		焼印「平伏町 阿部」、2枚の板をダゴで接合
42	8-171	SD04	114	24	円形板	14.25	14.65	1.10		焼印:遺に「中の 西村 十」、有孔、ダゴで覆った板に付着。
42	8-172	SD04	145	24	円形板	13.80	(9.20)	1.00		焼印:分銅型、ダゴによる接合痕あり、穴あり
42	8-173	SD04			円形板か	(9.10)	(8.00)	0.40		
42	8-174	SD04			円形板か	(21.30)	(5.30)	0.40		ダゴ穴5箇
42	8-175	SD04			円形板	41.80	(15.90)	3.10		割れ口にダゴによる継ぎあり。
43	8-176	SD04	100	24	木札	44.90	5.70	1.80		墨書 ■■■ 田六 ■■■、下部が突った板状。
43	8-177	SD04	101	24	木札	44.60	5.80	3.10		墨書 ■■■ 田六 ■■■、下部が突った板状。
43	8-178	SD04	103	24	木札	(20.80)	5.90	1.20		墨書 ■■■、下部が突った板状。
43	8-179	SD04	99	25	木札	(9.70)	(5.10)	0.10		墨書 ■■■ 紗野か
43	8-180	SD04	97	25	木札	22.80	(7.75)	0.30		薄い木材に墨書「■■■」
43	8-181	SD04	98	25	木札	(38.10)	6.40	0.20		両面に墨書(表裏:「置筆紙」、裏面:判読困難)
43	8-183	SD04	126	25	曲物容器	8.20	8.30	3.10		3ヶ所に印跡。「正■筋」、雲形赤色印、割印? (判読不能)
43	8-184	SD04	146	25	板状板	30.90	6.30	1.30		持ち手部分、ほぞ穴あり、縋の跡にわずかに竹付着する、裏面に墨書(判読不可)。
43	8-185	SD04	105	25	楕圓板	23.50	6.30	1.20		焼印「八丁々」
43	8-186	SD04	106	25	楕圓板	18.65	6.90	1.20		焼印「見角徳」、縮めていた竹が残る。
43	8-187	SD04	135	25	不明木製品	19.60	2.95	2.95		版に切り込みの入った楕圓板を巻き、釘で固定、両端に焼印。「二念■」と、判読不能
43	8-188	SD04	104	25	木札	10.65	7.60	0.80		上野川郡発券発行の兜栗行直蔵札、詳細は総括に記述。
43	8-189	SD04	74	25	角印	11.20	6.25	3.00		「き■■■■■方■吉 名方金貞子 ■■■■■■■■■■」
43	8-190	SD04	134	26	算盤玉	1.65	1.70	0.95		
43	8-191	SD04	137	26	加工木	18.80	7.10	3.50		棧の端材2ヶ分板状、用途不明
43	8-192	SD04			板材	(23.95)	3.30	0.55		釘穴16ヶ所、両面に十字の痕
43	8-193	SD04	138	26	板材	54.30	3.00	1.30		一方が突った深い凹状、突った側に釘穴あり
43	8-194	SD04	102	26	板材	35.90	4.30	0.75		釘あり(釘を入れると長さ36.5cm)、看板か、墨書「正■」

図面 No.	遺物 No.(木)	出土 遺構	分析 No.	写真 図版	埋蔵層	法量(cm)			形態の特徴	摘要
						長さ/ 口徑	幅/ 底径	厚/高さ		
44	木195	Sf22			木片割板	45.30	5.15	1.55		
44	木196	Sf22			木片割板	45.10	9.25	1.60		
44	木197	Sf22			木片割板	45.00	6.95	1.80		
44	木198	Sf22			木片割板	45.25	9.50	1.60		
44	木199	Sf22			木片割板	44.60	8.20	1.50		
44	木200	Sf22			木片割板	44.60	6.80	1.60		
44	木201	Sf22			木片割板	44.90	5.90	1.60		
44	木202	Sf22			木片割板	45.30	9.10	1.60		
44	木203	Sf22			木片割板	45.30	7.10	1.60		
44	木204	Sf22			木片割板	45.00	8.80	1.70		
44	木205	Sf22			木片割板	45.20	8.45	1.45		
44	木206	Sf22			木片割板	45.20	5.70	1.60		
44	木207	Sf22			木片割板	44.50	12.80	1.80		
44	木208	Sf22			木片割板	44.70	13.30	1.70		
44	木209	Sf22			木片割板	45.30	6.90	1.60		
44	木210	Sf22			木片割板	45.00	8.80	1.60		
44	木211	Sf22			木片割板	44.80	5.20	1.50		
44	木212	Sf22			木片割板	28.95	7.20	1.60		
44	木213	Sf22			木片割板	31.60	8.50	1.70		
44	木214	Sf22			木片割板	31.80	8.80	1.90		
44	木215	Sf22			木片割板	29.70	7.85	1.40		
44	木216	Sf22			木片割板	32.30	5.75	1.45		
44	木217	Sf22			木片割板	31.95	7.60	1.60		
44	木218	Sf22			木片割板	30.60	7.10	1.55		
44	木219	Sf22			木片割板	31.25	6.15	1.55		
44	木220	Sf22			木片割板	29.85	7.65	1.45		
44	木221	Sf22			木片割板	33.10	7.80	1.60		
44	木222	Sf22			木片割板	33.50	6.85	1.70		
44	木223	Sf22			木片割板	32.70	6.50	1.50		
44	木224	Sf22			木片割板	31.80	7.20	1.50		
44	木225	Sf22			木片割板	32.70	8.50	1.55		
44	木226	Sf22			木片割板	32.25	2.70	1.50		
44	木227	Sf22			木片割板	32.35	9.30	1.60		
44	木228	Sf22			木片割板	29.90	8.15	1.40		
44	木229	Sf22			木片割板	33.30	8.20	1.65		
44	木230	Sf22			木片割板	32.55	8.65	1.35		
44	木231	Sf22			木片割板	30.30	8.95	1.60		
44	木232	Sf22			木片割板	29.90	10.05	1.50		
44	木233	Sf22			木片割板	28.30	7.10	1.40		
44	木234	Sf22			木片割板	30.10	7.80	1.40		AMS1540-1635AD002.0%
44	木235	Sf22	173		木片割板	31.95	7.60	1.60		分析資料#掲載
44	木236	Sf22	174		木片割板	32.55	8.65	1.35		分析資料#掲載

第6表 瓦・土製品・金属製品・石製品観察表

観察No.	遺物No.	遺物種別	種類①	種類②	寸法(単位:cm)			調査	出土	調査	
					口径(長軸)	直径(短軸)	高さ				
18	395	SD04	模瓦			(13.40)	(10.30)	3.00			鉄線
18	396	SD04	磁石			(10.80)	(8.90)	(3.60)			粘土に大量の葉を混ぜたもの、竹などを棒に込んだ材料で造り付けられた一部の可塑性から、磁器と思われる。
18	397	SD04	形磁			6.0	—	2.9			ナゾノオサエ
18	398	SD04	埴輪			(12.40)	—	(6.40)			瓶
18	399	SD04	埴輪			(14.40)	—	(8.30)			瓶
19	400	SD04	陶台	磁瓦陶台	磁	9.30	5.0	22.0			
				瓦	瓦	13.0	7.5	6.3			
19	401	SD04	銅鏡			11.00	11.00	1.05			完全に磨き付いた、扁平地双鏡、鏡は亀を象る。
19	402	SD04	磁石			10.60	4.50	0.90			鉛板石製、使用面は白面、仕上げが滑である。
19	403	SD04	瓦			16.10	6.20	1.63			

第7表 石造物観察表

No.	種別	寸法(単位:cm)			材質	厚さ(mm)	備考
		長さ	幅	高さ			
61	手水鉢	33	24	80	花崗岩	7.7	石目と縁が粗い、下面に丸穴1ヶ所
62	燈籠・宝篋	40	29	33	花崗岩	10.07	蓋石は華奢、
63	燈籠・型	88	86	42	花崗岩	6.01	上面にハツノ模
64	燈籠・火筒	60	54	(26)	花崗岩	6.01	文様が彫り込み、蓋が2箇に分かれる。大口内面と下面に彫り込みあり
65	燈籠・中台	87	82	32	花崗岩	6.02	上面に六角形、下面に円筒のハツノ模、下面には鉄釘、蓋石は厚輪付の十二角形確定
66	銅付惣燈籠・脚部	57	53	(18)	花崗岩	6.01	前面に彫刻の彫刻文様、上面ハツノ模、脚は欠損
67	板状石材	88	68	14	紫石	28.1	上面の角部を面取り、上・下面共にハツノ模、石目が粗い
68	不明石材	30	20	31	花崗岩	0.08	先端の角部が鋭い
69	貫状石材	(41)	(21)	(32)	花崗岩	9.2	下面に彫り込みの彫刻文様の、上面の縦断面に窪み2ヶ所あり
写真 図説30	赤玉石	-	-	-	鉄石英	-	黒黒赤石
写真 図説30	赤玉石	-	-	-	鉄石英	-	黒黒赤石

第8表 石垣石材観察表(1)

No.	種別	寸法(単位:号)			番番	番番位置	刻印	刻印位置	表面加工	欠穴	欠角数	石割	石質	厚さ(mm)	備考
		石割幅	石割高さ	貫入長さ											
610	平石	13.0	13	18			大面中央	石面ハツノウオシ	大面1		0	早石花崗岩	8.8		
611	平石	11	12	28	一、三		大面・欠穴	石面ハツノウオシ、大面1ハツノウオシ	大面3+3		6以上	早石花崗岩	8.6/9.8	欠穴に蓋石	
612	平石	16	12	19	九十六		大面	石面ハツノウオシ、大面1ハツノウオシ	大面4+横梁欠		4	大面1石割 開線石	10.1	蓋石は欠穴に 5ヶ所	
613	平石	12	13	22	百二十四		大面	石面ハツノウオシ	大面3		4	早石花崗岩	10.3		
614	平石	17	11	14	百四十六		大面	石面ハツノウオシ	石面2、大面3+以上		6以上	早石花崗岩	9.4/11.4		
615	平石	14	10	35	百六十一		大面	石面ハツノウオシ、大面1ハツノウオシ	大面1+2以上		4	早石花崗岩	8.1	大面の石割面に 合身合せ型部	
616	平石	15	15	24	百八十六上		石面・大面	大面ハツノウオシ	大面2+2	あり	4	早石花崗岩	10.6	麻擦番番	
617	平石	12	8	27	二番		石面		大面2+4		9	早石花崗岩	8.8		
618	平石	16	16	19	二番三		大面		石面3、大面2	あり	4	早石花崗岩	6.5	大面石割に 転用	
619	平石	16	4	25	五〇八		大面	石面・大面ハツノウオシ、ハツノウ	大面1		4	早石花崗岩	9.3		
620	平石	15	16	12.5	五〇九		大面	石面ハツノウオシ、大面1ハツノウ	石面2、大面2		6以上	早石花崗岩	7.8	石面に窪み2ヶ所 型部	
621	平石	11	15	23.5	六三七		大面	石面ハツノウオシ	大面2+2		4以上	早石花崗岩	8.4	石面窪み	
622	平石	15	14	20	六七九		大面	大面1ハツノウオシ	石面3、大面2		4	早石花崗岩	8.2	蓋石は石割	
623	平石	15	9	20	七一九		大面	大面1ハツノウ	石面2、大面3		6以上	早石花崗岩	5.5/9.7		
624	平石	15	14	20.5	七二七六、■		大面	石面・大面ハツノウオシ	大面3+3		9以上	早石花崗岩	7.1		
625	平石	20	9	27.5	七五八四		大面		石面2、大面1		2	早石花崗岩	9.5		
626	平石	13	11	19	七六一七		大面	石面ハツノウ、大面ハツノウ	石面2、大面2		4	早石花崗岩	6.9		
627	平石	11	11	14	七七四六		大面	石面ハツノウオシ、大面1ハツノウオシ	大面2+横梁欠穴		4	早石花崗岩	9.8		

第8表 石垣石材観察表(2)

No.	種類	寸法(単位:寸)			産地	産層 位置	刻印 位置	表面加工	欠穴	欠地 幅	石割	石質	等級率 (×10 ⁻¹)	備考
		石幅 幅	石高 高	石厚 厚										
石28	平石	14	12	21	ア	大面	大面1+ハツリ、大面1 ツンクオオシ	石面3、大面1		4	早月産調砂	5.2	表面風石割	
石29	平石	17	8	35	3桁?連数字	大面	石面磨光、大面1+ハ ツリ	大面4		4	早月産調砂	7	表面風石割	
石30	平石	14	14	16		あゆか	石面	石面1		4	早月産調砂	6.1	石割磨面	
石31	平石	14	8	35			石面磨光、大面1+ハ ツリ	大面1+5	あり	4以上	大塚山花崗 閃緑岩	16.9	石割と接合、大 面への石面側に合 縁合せ磨面	
石32	平石	10.5	5	23			石面+大面磨光	大面5		4以上	大塚山花崗 閃緑岩	19.3	石割と接合	
石33	平石	14.5	7	31				石面1、大面 1+2		4以上	早月産調砂	9.3	大面に磨面+	
石34	平石	14.5	7.5	32			石面+ハツリ	石面4、大面2		4	早月産調砂	10/12.1	大面欠穴割と 大面	
石35	平石	11	10	23			石面+ハツリ(矢張り石)	大面3	あり	4	早月産調砂	9.2		
石36	平石	15	8	15				大面3+2		4以上	早月産調砂	7.2/8.2		
石37	平石	16.5	16	20		あゆか	石面+ハツリ、大面1+ ハツリ+ツンクオオシ	石面1、大面 1+5、石面産 産縁欠穴(1)		4以上	早月産調砂	5.2/8.4		
石38	平石	14.5	8	22			大面1ツンクオオシ +石面ツンクオオシ	大面3		2	早月産調砂	7.8/9.1		
石39	平石	17	16	33				大面7以上		2	早月産調砂	8.1	横割による石割 表面	
石40	平石	16	11	26.5			石面+ハツリ	石面1+大面3		4以上	早月産調砂	4.2		
石41	平石	15	13	22			石面磨光、大面1+ ハツリ+磨光、ツンク オオシ			4	早月産調砂	6.5	大面の石面側 に合縁合せ磨 面	
石42	平石	14	11	21			大面2ツンクオオシ	石面1		4	早月産調砂	6.4		
石43	方解 石	13	13	12							砂岩(森野石)	7.3	石造物産産?	
石44	平石	22.5	10	26			大面1+ハツリ	石面1、大面2		4	早月産調砂	7.5		
石45	平石	16.5	7	32				大面1		4以上	早月産調砂	9.1	ボーンズ欠 あり	
石46	平石	16.5	13	16.5			大面1ツンクオオシ	石面3		4	早月産調砂	7.6		
石47	平石	15	13	16			大面1+ハツリ+磨光	石面1、大面 1+2		4	早月産調砂	6.6		
石48	平石	16	14	22			石面+ハツリ、大面2ツ ンクオオシ	石面3		4	早月産調砂	15		
石49	平石	14	13	21.5			大面ツンクオオシ+ ハツリ	石面1、大面2		4	早月産調砂	7.1		
石50	平石	20	14	11.5			大面ツンクオオシ	大面4		4	早月産調砂	6.7	大面を石面に 転用	
石51	平石	12.5	10	21.5				石面2、大面 1+2		4	早月産調砂	8.3		
石52	平石	20	16	26			大面2ツンクオオシ			2	早月産調砂	19.8		
石53	平石	18	16	29			大面2ツンクオオシ	大面1以上		4	早月産調砂	8.5		
石54	平石	16	9	21			大面1ツンクオオシ	大面3		4	早月産調砂	8.5		
石55	平石	16	7	34			石面+大面1ツンク オオシ	大面2		4	早月産調砂	10.6		
石56	平石	15	10.5	23			石面磨光、大面1ツ ンクオオシ	石面1、大面2		4	早月産調砂	11.4/ 12.8		
石57	平石	12	12.5	17.5			大面1ツンクオオシ	石面1、大面3		4	早月産調砂	16.6/ 11.9		
石58	平石	7	3.5	9				大面1			早月産調砂			
石59	平石	14	8.5	12			大面2ツンクオオ シ、大面1+ハツリ	大面2		4以上	早月産調砂	8.7/8.1	大面を石面に 転用	
石60	平石	16	9	25.5				石面2、大面3		4	早月産調砂			
石61	平石	10	11	20			石面+ハツリ	大面3		4	早月産調砂	8.1		
石62	平石	16	14	14			大面1ツンクオオシ	石面3、大面3		4	早月産調砂	14.6		
石63	平石	14.5	12	10			大面1+ハツリ、大面1 ツンクオオシ	大面2		4	早月産調砂	12.6		
石64	平石	13	7	10			石面磨光、ハツリ+ツ ンクオオシ、大面1ツ ンクオオシ	大面1+2		4	早月産調砂	9.2	大面を石面に 転用	
石65	平石	17.8									早月産調砂			
石66	平石										早月産調砂			
石67	平石	8.5	7	15			石面磨光、大面1ツ ンクオオシ			4	早月産調砂	21.7		
石68	平石	15.5	12.5	20.5				石面1		2	早月産調砂	6.9	表面風化顕著	
石69	平石	8.5	7	15			石面+ハツリ			4	早月産調砂	2.5		